
魔法先生ネギま！ ～幻想より出でし最狂者～

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～幻想より出でし最狂者～

【Nコード】

N1856V

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

とあるアニメ専門店への帰り道。主人公は女神の不手際により死んでしまう。しかし心優しい(?)女神によって転生される！転生先は幻想郷。妖怪として生きた彼は外の世界への興味を示す。紫の隙間から(強制的に)外の世界へ出られた主人公は、魔法世界にいた。そこで出会う者達とは……！(注…作者の自己満足小説。キヤラ崩壊有り)

プロローグ（前書き）

恐らく駄文になるでしょう。
それでもどうか誰か読んでください。お願い、読んで。

プロローグ

うわーお……。。

なんででしょうここ。真っ白な部屋ですけど……。真っ白すぎです。窓がないのも不自然。なんなんでしょうか……。

いや、そもそも何故俺はこんなところにいるんだ？

確か、栃木県宇都宮市のアニメイトに行って帰って……。あれ？
そこから記憶が……。

あ、ちなみに作者は栃木出身です。

「あっちゃー、どうしたもんかなー……」

「……ダレデスカ？」

なんか女の人立ってるよー。服装からしてコスプレイヤー？

「なんでカタゴトなのよ」

「いや、日本語通じんのかなーと思って」

「……え、なに？ 今のカタゴトって日本語じゃないの？ 何語？」

「いやいや、日本語に決まってるでしょう。頭大丈夫ですか？」

「殺されたい？」

「すみません調子に乗りました殺さないでください」

「まあ、まず死んでるしね、あんた」

「……は？」

「いや、だから死んでんだって」

罨だ！ これは罨だ！ 俺を陥れる為に仕組んだ罨だ！ だって俺は死んだ記憶がない！ それがなによりの証拠！

「いや、そんな顔されても……」

「えゝ、なに？ 死んじゃったの俺。どうしよう。アンリミテッドコード買ったばかりなのに……。しかも戯言シリーズも教師に借りたクビツリハイスクールまでしか読んでないよ。未練ドラッダラだよゝ」

「……未練があるなら、別世界になら転生させられるけど……。どうす「行きます」即答なのね」

当たり前じゃないですか。

生き返られるんだよ？

別世界とは言え、その世界にもきつとあるよ戯言シリーズ。フェイト／アンリミテッドコードだってあるって絶対。

「まあ、ぶっちゃけアンタを殺したの私だしね」

「お前の仕業かよ」

「口が悪いわね。やっぱり転生は無し」「すみません僕が間違ってた許してください」……。切り替え速いわねゝ」

「……ていうか、アンタ何者？ まさか、神様とか？」

「そうそのまさかよ」

「うわゝお神様だゝ」

「なんで棒読みなのよ」

いや、だって神様って……。

もっと髭がもじゃもじゃしてたりするもんじゃないの？

「私は女神なのよ。……ところで、なんか力的なモノ欲しい？ 少しくらいならプレゼントするわよ？」

「マジ？」

「豪くマジです」

……ふんもつふの人みたいなセリフだな。まあ、気にしないでおう。

「ていうか、次の世界ってどこに行くことになるんだ？」

「さあ？ それは私にも決められないわ」

「役立たず「ああ?!」いえ何でもないです」

「で？ どんな力？」

「あーじゃあ。曲絃師の力みたいなのって……」

「んー？ ああ、糸のヤツ？ 知識と技術は与えといてあげる」

「あざーす。じゃあ……やっぱり固有結界とか欲しいなあ」

「……欲張りすぎじゃない？」

「え、そう？ じゃ、あれだ。魔法的なもんで無限に糸を作れる力」

「オーケイ。曲絃師と同じ感じに知識と技術を与えてやるわ」

「マジアザース。……うーん、やっぱり固有結界とか投影魔術みたいなのちようだーい」

「だったら糸は投影して作りなさいよ。どうせあのエミヤシロウとかと同じ力が欲しいんでしょ」

「おー！ マジ尊敬しますよ女神様！」

「まあ、私が与えられる力はこれくらいが限界ね。容量ってのがあんのよ」

「パソコンみたいっすね」

「ここの記憶はなくなるけど……まあ、精々ががんばなさい」
「ほーい」

そんなやり取りをした後、俺の体は光に包まれた。

そして俺は産まれた。ああ、産まりましたよ。しかし捨てられましたよ。

ちくしょう……。

しかも驚いたことに俺を拾ったのが妖怪。……そもそも俺が妖怪みたいですね。

あの女神、記憶はなくなるって言ってたくせに記憶がバリバリ残ってんぞ。

いや、生前の記憶はないんだけどさ。

んで、今は竹林にて曲絃系の使い方を少々復習中。

「精が出るわね」

「……何か用か？ 紫」

「あら、それが保護者に対する言葉？」

「アンタにならこれでいいでしょ。このババ「隙間に落としてあげましょうか」すみませんでした」

そう、俺を拾った妖怪というのがこの隙間という空間から身を乗り出してこちらを覗いているバ「殺されたい？」ではなくてお姉さん。名前は八雲紫だ。

「それより、あんた一回外の世界に行ってみたって言ってたわよね？」

「ああ、言ってたな」

幻想郷。それがこの地の名前。文字通り幻想が住まう郷。

妖怪の俺だが、外の世界に興味を持つのは当たり前だ。

もう五百年くらい同じような場所にいんだぞ？ 外見的には人間年齢で言う十歳前後。

しかも、最近じゃあ橙っていう妖獣の遊び相手だ。耳を引っ張れて遊ばれる。それもかなりの力で。

一回だけ、マジで耳が取れたかと錯覚したこともあったな……。
ちなみに俺の耳は俗に言う獣耳です。どうやら犬とか狼系みたい
ですね。妖怪の種族的なモノは。
できれば狼がいいよね。

「行っているわよ。その代わり、外は危険よ。ここがどれだけ優し
い所か学んで来なさい」

「えっ？」

反論する余地すら無く、隙間入り。

って、「マジかよおおおおおおおおおおおおお！」

落ちていく最中、「がんばんなさいよ、銀炉」という紫の声が聞
こえた。そこに紫はいないと解っているながらも、思わず虚空を睨ん
でしまったのは言うまでもない。

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか。

俺自身、いろいろなクロスオーバー小説に感化されている身です。恐らくデジャブるかもしれません。

そんな俺だけど、どうか許して……。

誰をメインヒロインにしようか。

俺的にはやっぱり木乃香とか刹那とか、エヴァとか夕映、まき絵もいかなあ。

大穴でナギがメインヒロインとか……。……。あ、いや。冗談だよ！？ 冗談だからね！？

まあ、恐らく木乃香になるでしょうねえ……。あ、要望があれば、なるべくその要望通りに行かせてもらおうと思います。

とりあえず、俺的に最初の頃のネギがものすごく嫌いなので、いじめ抜いてやろうと思います。

文才の無い身ですが、どうか心広く、それでいてジェラートの様に甘い目で見てくださいです。

過去と現在

「いだっ！」

隙間から出た俺に待っていたのは鈍痛。

それも背中を打って呼吸がちよっと難しい感じになった。

何回か「ゲホッゲホッ」と無理矢理空気を吐き出し、無理矢理空気を吸っていると呼吸も安定してきたけど。

そして、そんな俺の目に映ってきたのは……。

「戦争、か？ それにしちゃ銃声ってもんがないな。逆にスペカみたいなのが飛び交ってるし」

まあ、戦争を静観すると言うのもいいかもな……。

うん、そう思ってた。それが戦争のど真ん中じゃなければ絶対静観してた。

しかし……ここで糸とか投影を試すのいいかもしれないな。

とりあえず手始めに、俺の歩む道を邪魔する兵をぶった切っているか。

「恨みは無い。だが取り敢えず、死ね」

普段着である黒い着物の裾に隠しておいた投影品『なによりも丈夫な糸（自称）』を取り出す。

重石を糸の先端に付けないで精密な操作をできる様になったのは数年前。

竹林を叩き斬りまくって妹紅に怒られたのは記憶に新しい。

だが対人はこれが初めて。とりあえず、ぬるくゆるくいきま
すかねえ！

.....。

終わった。結局皆殺ししちまった。

俺の周りには解体になった肢体と死体だけが残った。

あまりの呆気なさに、思わず空を仰ぐ。……ああ、良い感じに雨
が降ってきた。

まるでこの身に付いた汚れた血を洗い流してくれる様だ。

俺自身スペカを持っていないという特別極まりない妖怪だが……
能力は一応ある。

「雷を操る程度の能力」。

糸で自分と相手を繋いで電流を流して感電死させるみたいなこと
考えてたりする。

実践したことないけど。

「おい、これお前がやったのか？」

声のする方を見ると、赤毛の杖を持った男がいた。周りにはメガ
ネをかけた長刀を持つ男に長い髪を後ろで縛った男。子供もいる。
反射的に糸を投げた。のだが……。

「……何をした」

全ての糸が地に伏せられ、それと同時にクレーターができた。

「ちょっとした重力魔法ですよ」

長髪の男が静かに告げる。表情は……あまり好きになれそうになり笑顔だ。

「もう一度だけ聞くぞ。これはテメーがやったのか？」

「だとしたら、どうするんだ赤毛。殺すか？ 逃げるか？ 地に伏せ命乞いでもするか？」

重力魔法によって伏せられた糸を意図的に切り、自由になった糸と共にもう一度構える。

「……仲間になれ！」

「……すまない。もう一度言ってくれ」

「仲間になれ！！！」

「阿呆か貴様はー！！！」

「ぶべらっ！！？？」

思わず殴ってしまうほどの阿呆発言。見ろ、お前らの仲間も呆れた顔してんぞ。

見た感じはできる達人っぽいのだが……俺の目が節穴だったか？

「いきなり殴らなくなったっていいだろうがああ！」

「殴られてもおかしくない様な事を言った貴様が悪い！ いいか？

！ もし俺がお前らの敵だったらどうするつもりだったんだ？！

自分の仲間を危険に晒す気か！？」

「そんな時はそんな時でどうにかする！」

「その自信は一体どこから出てくるんだ……？」

「それに……！」

その声のでかさに、思わず息を呑んだ。

「それに、そんな顔して戦地にいるお前が敵なわけねえだろ！」

思わず、目を見開いた。

コイツは何を言っているのだと思ったから。

俺がどんな顔をしていた？

「ええ、確かに。寂しそうな顔をしていました」

と、長髪重力が言ってくる。

あー……たぶんそれは紫に放り投げられたからだと思うぞ。

あまりの唐突さだったからなあ。

しかもいきなり戦地と来た。嫌になるよ。

という感じの顔だったんだろうな。きっと。それを寂しそうだとかなんとか……って適当に解釈しやがったって訳か。

まあ、いいけどさ。

「それより、仲間になれってどういうことだ？」

「いや、かなりの実力者なんだろ？ だから仲間になってくれるかなーと」

「はあ……。この惨状を見て解らんか？ 俺はタネも仕掛けもある切断マジシャンなんだぞ？」

「それがどーしたってんだ！ てか質問に答えろ」

「ああ？ 質問？」

「仲間になれっていう質問だよ！」

「どう聞いたってそれ強制させる気満々だろうが！ 『？』はどこ

行った！」

「うるせー！ いいから仲間になれ！ いいな？」

「……………あーもう解ったよ……なればいいんだろ？ なれば」

ということで、俺が折れた。
本当は仲間なんかになるつもりは無かったんだが……。

それからが大変だったなあ。赤毛の男『ナギ・スプリングフィールド』はバカだった。計り知れない程のバカだった。いや、もうホントに理解出来ないくらいにバカなんだよ。

「バカバカうるせーぞ。折角の鍋が不味くなる」

「詠春の言うこと聞かずに肉を先に入れやがったくせに何を言うか」
えいしゅん

「いいんだよ。旨いもんから食って何が悪いよ」

「お前、さっき鍋ショーゲンとか言って慕ってただろうが」

「それにしてもこのソース旨いな！」

「それ醤油な」

「話を逸らすな！」

詠春、というのが今この鍋を仕切っているメガネ男である。

鍋奉行……の間違ひなんだろうなあ。鍋將軍って。

今のうち、全員紹介しておくか。

長髪の重力さんはアルビレオ・イマ。子供がゼクトだ。

……奇妙な面々極まりないな。だが、これからその奇妙さがドン増していくとは、俺も思わなかった。

「それにしても、姫子ちゃんにも食べさせたい程の旨さだなあ」

「姫子ちゃ……？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「まあ……戦が終わればあの子を自由にする機会だって得られるだろうよ」

「……その戦だが……。やはりどうにも不自然に思えてならん」

俺も同意を示して頷く中。

「……何が？」

「何もかもがだよ。お前が言いだしたんだろうが、この鳥頭。……肉ばっか食うな！」

鳥頭なナギに詠春が呆れた。その時――。

「……！」

上からナニか来る！

的確な投擲か。地面に突き刺さった反動で鍋が……。

あ、ヤバイ。宙に舞ってる肉をナギに取られる。……ゼクトにアルまで……。俺も肉取ろう。

「食事中失礼――っ！！」 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
「いっちょやろうぜっ！」

とんでもない大声が聞こえた。

見ると、崖の上に剣を肩に乗せて担いでいる筋肉質なおっさんがいた。

ああ、本当になんでこう……。変人ばかり引き寄せるんだ？ この集団は。

最初に食べ物を粗末にされたことに対しキレた詠春が飛び出していったが……あいつは相変わらず、エロに弱いらしい。

筋肉ダルマはカプセルの様な物を取り出し放り投げる。と、これはまあ……全裸の女性が現れた。

心頭滅却する暇があるのならエロに対する耐性を持てよ詠春。と思わなくもない。

いや、俺が言えたことでもないのだが。あゝ、ちなみにあの保険って書かれた紙が頭に付いてる子は結構好みかも。貧乳だし。

あ、いや。俺はロリコンじゃないぞ。貧乳の方が好みなだけだ。勘違いしないでくれよ？

あー……今度はナギが行っちゃったよ。俺が出る幕ねえな。

「てめえら。手え出すなよ」

「言われずとも……」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

「まあ、適当に頑張れ」

浮遊術で崖を見下ろせる位置まで舞う。

それはゼクトもアルも同じだ。

そっからは……細かに状況を表すのは面倒だ。

だから適当に言わせてもらおう。殴り合いとか大呪文とかのぶつかり合いが十三時間は続いた。

気付けば、その筋肉ダルマ『ジャック・ラカン』も仲間に加わった。

どういう経緯か啞え煙草にスーツが似合うハードボイルドな元政

府の犬であり無音拳の使い手『ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ』。その弟子である『タカミチ』までナギパーティーに加わった。とまあホントに個性が強い人だらけだよ。

地味な外見の俺から見ると羨ましいことこのうえない。

しかし、その後に待っていたのは悲しいことばかりだった。

ナギは自分が助けた少女、アスナを置いてどっか行っちゃったし、ガトウも死んじまった。

いつの間にかタカミチと俺だけが残った。

アスナの記憶の封印に関しては、俺は何もできなかった。

強制的に止める方法はあったのに……「これからの生活で辛いだけの記憶など消すべきだ」と言う言葉を聞き、心が揺らいでしまった。

今では麻帆良学園都市という明治中期より建築された学園都市に通っている。

あの頃の人形のようなアスナはいなくなり、友達と楽しそうに遊ぶ活発な中学生になった。

数年間、幻想卿に里帰りして、いろいろ遊んで暮らしていた。

タカミチには酷いことをしたと思っているとも。

ちなみに、タカミチは教員としてそこに通っているらしい。

俺も、近々そこに通うことになるのだが……………。

正直なところ、会い辛いことこの上ない……………。

しかも魔法使い関連の生徒や教員がいるとか…………。ナギと同じくらい有名になった俺からしてみれば、本当に行き辛い。

過去と現在（後書き）

とりあえず、これで説明的なモノ終わり。

次回からは主人公が麻帆良へ通うことになります。

どういった形で通うのか……迷ってます。生徒としてか先生としてか……。

とりあえず、今日はもう眠いから寝ます。正直言って目が痛いですが……。

転校とOHANASHIタイム（前書き）

OHANASHIタイムと書いてあるけど、OHANASHIはそんなに出てきません。

転校とOHANASHIタイム

とうとう来てしまったこの瞬間。今は教室の前にいるのだが……
ある意味緊張する。

三年になってからの転校、というヤツだ（そもそも寺子屋とかに通ってなかったけど）。

いやー、参った。最初は教師とかそういうので通うのかと思ったけど……あの妖怪みたいなジジイに「生徒として通うことになるとるから、よろしく♪」なんて言われた時には気が動転して思わずジジイのこと半殺しにしちゃったからなあ。

しかも俺が転校する所というのが……3－Aらしい。いや、3－Aにナニか嫌なことがあるわけじゃない。

ただ……ちよつと生徒名簿を特別に見せてもらったのだが……。

アスナはいるし木乃香、刹那までいる。あいつらと最後に会ったのは小学三年のときくらいか？

あいつらからして見れば、俺は突然消えたお兄ちゃん的存在だから……ああ、嫌な予感がする。

アスナは何も変わって無ければ一言二言文句を言われて終わりか。だがタカミチからの報告によると、かなり元気な中学生らしい。

木乃香と刹那からは……追求されるんだろうなあ。詠春とかジジイから連絡が言っていたりすれば少しは楽になれると思うんだが……。
というか女子校じゃねえか！！ 男の俺がいたら怪しまれやしないか……？

しかも絶賛登校地獄中のエヴァまでいるし……。

んで、一番厄介なのが担任だ。なんと、子供！ それも英雄の子供だよ。

戦争の英雄ナギ・スプリングフィールドの子供と聞いて楽しみに

してたんだけど……生真面目だ。
しかも弱そう。精神的にも肉体的にも。
はつきり言って期待外れだな。

そうそう、遂さっきまで幻想郷にいたのだが……橙に駄々をこねられ困ったよ。

そりゃあ、数年とかの間留守してたしき。その分遊ぶ、とか言われたんだけどさ。

……なんていうか、藍の目が怖いんだよ。怪我させたら許さない的な視線が。

しかもブン屋の天狗は外の世界のこと聞いてくるし。

俺が行ったのは外の世界でも特別な世界だったからな。魔法世界とか何とか。

とりあえず、まず帰ってすぐにしたのは紫に対する罵倒罵倒罵倒だ。

いきなり戦地に放り込みやがってという事と、百通りの呪詛を並べてやったよ。

まあ、右から左へ受け流されたけど。アイツの耳って右と左で繋がってんじゃない？

最後にババアって言った時は危く隙間送りされるところだったけど。

「あ、あのう。そろそろいいですか？」

ああ？ 誰だ。俺の回想を邪魔する奴は。
って、ああ。ネギ・スプリングフィールドか。

「ええ、いいですよ」

あ、ちなみにね。この数年間で身長やっとな伸びたよ。
人間年齢で言う十五歳くらい？　まあ、だから中学三年に転校っ
て訳なんだけど。

……恐らくジジイの陰謀だな。この一年で俺の力を見極め、その
後はここに警備員として置くつもりなんだろう。

まあ、エヴァみたいな呪いは掛かってないし、出入り自由だろう
からいいんだけど。

そんなことを言っている間にドアが開かれる。
というかそんな開けたらトラップが……。

あーあ。引かなかったよ。バカだろうコイツ。

「ゲホッゲホッ……お、おはよーございます」

ネギ少年の頭に黒板消しがボフツと……。

ていうか、そういう罠って転校生である俺のための挨拶だったり
するんじゃないの？

そうじゃなかったらお前虐め受けてるってことになんぞ。英雄の
息子が聞いて呆れる。

ざっと見た所、黒板消しトラップ以外に罠はないご様子。

まあ、ネギが教卓に着いたのを見れば解ることだが。

「えー、皆さん、今日から三年生になりましたが……これからもよ
ろしくお願いしまーす！」

「よろしくー！　ネギ先生ー！」

「先生ー！　こっち向いてこっちー！」

なんだ。人気者か。

そう言う意味での黒板消しトラップなのか？　仲良しの証がトラ

ツプってあまり聞いたことねえぞ。
どんなツンデレだ。

「それで、今日は皆さんにお伝えすることがあります！　なんと今日から、転校生がやってきます！」

「せんせーい！　その子は可愛いですかー？」

「あ、いえ。実は男性の方なんです」

あーやっぱりざわめいた。

女子校に男子って、あのジジイは一体何を考えてるんでしょーね。

「そ、それではどーぞ。入ってください」

ここで漸く教室に入れと言う命令。

足が疲れた訳ではないが……やっぱりずっと立ってるのは嫌だからなあ。

早く席に座るべく、急いで教室に入る。

「えー、今日からここに転校することになりました。八雲　銀炉です。よろしくお願いしまーす」

適当に挨拶を終えて席に着こうとした、その時。

「「「か……………かつこいいいいいいいい！」「」」

「うるせー……耳が痛え……」

思わず耳を両手で塞ぎ、目を閉じた
そうでもしなけりゃ鼓膜が破れる。

で、何事かと目を開けると…………ぬわ！？

「ねえねえ彼女いるのー？」

「どっから来たのー？」

「目、赤いけどそれって天然？」

「髪の毛もサラサラだよー！ 洗うコツとか教えてー！」

「てか、なんで女子校に転校……？」

異性に対してこのくつつき様。

大丈夫なのかこのクラス。

「皆、そこまでしなさい。他のクラスに、迷惑だろう。銀炉も困ってるじゃないか」

「あ……………」

教室のドアが開いた。その先には白スーツに啞え煙草が似合う男性が……………。

「ガ、ガトウ……………」

「ん？ ああ、違うよ。タカミチだよ」

「は、はあ！？ タカミチって……お前、まだ三十代だったよな？」

ああ、エヴァの別荘か……」

「ん？ ああ、老けてるって言いたいのかい？ ははは、そういう

銀炉はまだまだ子供だな、外見的に」

「タカミチって銀炉さんと知り合いだったの？」

久しぶりの出会いの談笑中に割り込んできたのはネギ少年。

「（タカミチ、俺が紅き翼のメンバーだったって黙っててくれよ？）」

「（ん、なんでだい？）」

「(大した理由じゃないさ。いろいろ聞かれるのが面倒なだけだ)」
「(そうか。銀炉も変わってないね。めんどくさいのは一切やらない所とか)」

「(お前は十分変わったけどな)」

こそこそ話をしてネギが不機嫌になりそうなのだが……気にしない気にしない。

「まあ、ちょっとした知り合いだよ。昔のね。アスナ君と木乃香君、刹那君が知ってると思うから、そっちに聞くと良い」

うわ、投げ出したよ。

なんというか、本当に変わった。

昔なら自分から説明していただろうに……。

ああ、教師として忙しいのか。

「じゃあ。後で暇な時にでも話をしよう、銀炉」

そう言って、さっさと教室から出ていってしまった。

タカミチが出ていくのと同時に、クラスの皆も席に付く。

やっと落ち着ける時間と言うわけか。

「そ、それじゃあ銀炉さんはエヴァンジェリンさんの隣に……」
「ん？ ああ、分かった」

よりもよってエヴァの隣か……。

まあ、いいけど。

「お前……これまでどこに行ってたんだ？」

やっぱりその質問は来るよなあ。
でも幻想郷のこと話すのも面倒だし……。

「ちょっと魔法世界で傭兵してた」

「嘘言え、そんなことしてたら私にだって情報が入る。これまで一体どれだけお前を探していたか……」

「お？ 意外だねえ。なに、心配してくれたの？」

「な……っ！？ バカ言え、そんな訳ないだろ！」

顔を真っ赤にさせてそっぽを向いてしまった。

それじゃあ説得力がないぞ、エヴァ。

こう言う所は、変わらないんだな。少し安心した。

「制服」

「んあ？」

「相変わらず似合ってるな」

「それは私を子供だと言いたいのか？ あの手を払いこの手と
言い……私を手を払いにしておいて」

バカバカ言うなよ……。

さて、ちょっと教室を見渡してみよう。

……おいおい、いきなり……。

教室の端に幽霊いんじゃない。いいのか、あれ。

しかも、良く見れば金を払えば何でもやってくれる殺し屋さん
でいんじゃないか。

………思わず目を逸らした。

だってアスナと木乃香と刹那が睨んでんだもん。
いや、まじ怖い。

気迫ってモノがあるよね。こういうの。

「ちょっと銀兄！ どこ行ってたのよ！ 小学生の頃どっか消えちゃって……心配してたんだからね！」

放課後。俺の歓迎&期末試験学年トップおめでとうパーティーと称し、皆がどんちゃん騒いでる中、そう言ってきたのがアスナだから思わず驚いた。

いや、だってあのアスナがここまで感情をむき出しにするとは……。

「お前も性格変わったな」

「そういう兄様は何も変わっとらんなく。ウチも心配したんやで？ 謝罪の言葉はないん？」

「そうですよ銀炉様。急に行方不明になられて……お嬢様やアスナさん、私もどれだけ心配したか……」

相変わらずこの三人は仲がよろしい様子で。

刹那は、昔みたいに木乃香のことを「このちゃん」と呼ばないのか？ と疑問に思ったけど。

しかし三者一応に恐ろしい顔だ。

アスナと刹那は正しく怒り心頭な表情。木乃香に至ってた怒り狂いすぎて笑顔、という感じだ。

全くもって恐ろしい妹分を持つてしまったものだ。

エヴァはそれを見て二ヤケてたりする。

それから楽しい楽しいOHANASHIタイムだった。

どこに行ってたんや？ と聞かれれば、ちよっと長い旅行に、と答えた。

長すぎない？ と聞かれれば、道に迷っていたんだ、と答えた。
相変わらずの方向音痴なんですね、と言われれば、うるせいやいと答えた。

……余談だが、長谷川とか言うクラスメイトをネギが無理矢理連れてきた上に、くしゃみと言う名の武装解除をした。何故かバニーちゃんの服を着ていた長谷川の服は一瞬にして花卉になったとき。魔法秘匿する気あんのかね、あの坊主。

で、俺の住む所と言えば……寮には住めなかった。部屋が余ってないとか何とかで。

まあ、それはいい。女子寮になど住んだら鳥肌ものだ。なんせ周りの部屋は全て異性が住んでいるということになる。そんな場所などで、落ち着いて寝る事も儘ならない。

代わりにエヴァが部屋くらいなら提供してやる、と申し出てくれた。

エヴァも女の子（？）だが、他の異性よりは接しやすい。

ちなみにエヴァは寮には住まず、森の中にあるログハウスに住んでいるらしい。自然というものが好きな俺にとってみれば、これ上無い住みやすい環境だ。

自然が好きなのは幻想郷の殆どの時間を山や森、竹林だとかで暮らしてきた妖怪の性さがとでも言っておこう。

どうしても人工的すぎる建物は好きになれない。

いや、ヨーロッパの建築物だとかは好きだぞ？ ああいう伝統的

な物は好きだ。

だがアメリカの高層マンションやらやたらとデカイ建物は好きになれん。

紫の話に聞くと日本もそれに感化され、大きなビルが立ち並んでいるらしい。悲しいことだ。

麻帆良はイタリアのフィレンツェという都市を元に作られたらしい。

ああ、当分はその景色を堪能しながら過ごそうと思っている。

……まあ、二十年くらい前みたいなのはないだろう。

なんて言っただってここは旧世界。それも日本。平和の国だ。

精々平和に、平穩に、安寧に暮らしますかね。

転校とOHANASHIタイム（後書き）

さて、とりあえずここまで進めましたけど……。

恐らくこの辺りから更新スピードがガタ落ちすると思います。

良くて一ヶ月に一回かな。

あ、でも今夏休み中だし……まあ週一で更新したいですね。

……言っておきながら明日には更新されてたりね。

しつこいけど、指摘などに関してはご感想にてお伝えいただけると嬉しいです。

11／7／25 本文訂正しました。

家族と思春期妖怪と吸血事件

エヴァ邸…リビングにて。

「なあエヴァ。さすがに貧血気味なんだが……」

「妖怪なんだからすぐ回復するだろう。住ませてやってるんだから、これくらい我慢しろ」

エヴァのログハウスに住む条件として吸血させろと言われた。いや、なんでさ。

確かに、俺は投影魔術（固有結界）を行使するために魔術回路と言う物が五十本ほど存在したりする。

魔力量はなかなかのものだ。

その魔力は血液などにも通っているそうで……。

エヴァは、今度あのガキ^{ネギ}を襲う、と言っていた。その為の魔力補給だそうだ。

俺としてはここでガキの力を見ておきたいとも思ったりする。

精神的、肉体的に弱いのは見れば分かる。

と、なれば……アイツ^{ナギ}の息子としては考え辛いが、頭を使った戦い方ができるかどうかだ。

頭を使ったと言っても、頭突きをする訳じゃあない。頭の使い方が違う。

俺が言っているのは、「どれだけ罾や戦略をたてられるか」だ。

一言に「罾」と言っても色々な罾がある。正に「色」だ。

いろいろな色を混ぜ合わせると見たこともない色や、綺麗な色ができる。それと同じだ。

いろいろな罾を組み合わせると見たこともない罾や、独特な罾ができる。

例えば、束縛と攻撃を合わせたり、ね。

まあ、俺自身それほど魔法に精通している訳でもないのだが……。戦争当時なんて火力任せだ。投影で剣群を作り数で圧倒する。

物理的な上に貫通性を高くし、攻撃力の向上ばかりを目指していた。

そこら辺の魔法使いが行使する魔法障壁なんて意味を成さない。それこそ、ゼクトの最強防護くらいじゃないか？ あれを防げるのは。

まあ、「突き穿つ死翔の槍」^{ゲイ・ボルク}ならそれすらも貫くのだろうけど。なんせあれは反則技だ。因果の逆転。この世の物理的な問題や秩序を覆す技だ。

対象の心臓を貫いたという結果を作り上げてから槍を放つ。呪いの朱槍だ。

クーフリーンが持っていたとされる槍だが……何故俺がこれを投影できるのか。

それは解らない……訳じゃない。

あのクソ女神^{アマガミ}が言っていた……いや、俺も知っていた男「エミヤシロウ」と同じ力。「固有結界」。

今の俺となってはエミヤシロウが誰なのか、知る術もないのだが……。

俺が知る限りでは、固有結界は術者の心情風景で現実世界を侵食する大禁術。特定の空間を丸ごと別の空間と入れ替える、らしい。後は糸と「雷を操る程度の能力」の組み合わせた目に見えない技とかで圧倒してたな。

……随分と話が変わったな。とりあえず閑話休題。

えーっと、なんだっけ？ ネギがどうやって戦うか……だったっけ？

まあ、大した期待はしてないんだけどな。

ネギがエヴァに勝てる訳ないし、勝てたとしてもそれは余程運が

良いのだろう。

エヴァは学園のメンテナンスだかなんだかで停電になる日にネギと戦うと言っていた。

戦う、なんていう表現でいいのか解らんが。

そのメンテナンスが予定より早く終われば、それはエヴァの誤算。無論、それを教える様なことはしない。ネギの味方でもなければエヴァの味方でもないからな。

まあ、旧知の仲であるエヴァに肩入れしちまうかもしれないけど。

「……なあ、いつまで吸う気だ。ちょっとさすがにくらくらしてきたんだが……」

「ま、マスター。もうよろしいのでは……」

「ん？ ああ、そうだな」

エヴァが囁むのを止めたのと同時に、首から血が垂れた感覚があった。

それをエヴァは「勿体ない」と器用に舐め取り、今日の吸血終了。これから毎日する、と言うのだから気が滅入る話だ。

一応、エヴァの家族には入れてもらったがな。

夕食はもう済ませた。

茶々丸はいつもエヴァの後に立って食事が終わるのを待っている様だが……。

ロボットとは言え、気の毒だなあと思った俺の「エヴァの家族である以上、共に食事をするべきだ」発言にて、一緒に食事をした。

エヴァは最初、ただの従者、と言っていたが……今では家族という響きが気に入ったらしい。

彼女からすれば六百年以上の間、縁が無かった言葉だ。

しかし素直になれない彼女からして見れば「家族という響きは好きだが、喜んだり口にするのは恥ずかしい」と言ったところか。

こう言う所が非常に愛くるしかったりする。

とてつもない額の賞金首には見えないな、これじゃ。

それから数日後、世界樹と呼ばれる無駄に大きな木の上で学園都市内を見ていた。

下でなにやらクラスメイトに追われていたネギを見かけたが……気にしないでおくことにした。

……世界樹で昼寝、というのもいいかと思ったが……今ので完全に冷めた。

適当に知り合いの所に行こうかな。

と、いうことで適当に歩いている道中、丁度良い所に木乃香を見つけた。

見つけた瞬間に「兄様助けて〜」と言ってきた。

木乃香の姿を見て驚愕と共に、感嘆した。和服だ。それもかなり着飾っている。

近くで「木乃香お嬢様〜!」という野太い声がした。

……オーケイ。大体の現状は把握した。

どうせあの茄子頭（学園長）に無理矢理見合いでもさせられそうになったのだろう。

あの茄子頭はやたらと孫娘に見合いをさせたいらしいからな。それも趣味の一つなのだろう。

現状把握を脳内で済ませた後、俺はすぐ行動に出た。

「ひゃあ!？」

なんだ、今の気の抜ける声は。

というのも、俺が木乃香をお姫様抱っこしたからなのだが。

そのまま駆けだす。
妖怪の脚力なめんなよ。

とまあ、適当に建物の中に入り身を潜めることにした。

入った建物はどこかの校舎らしい。これまた適当な教室に入り、ドアを閉めた。

「……これで当分は撒けるだろ」

「ありがと、兄様」

「その兄様って言うの、もう止めるよ。今じゃ同級生だろ？」

「そうやね……。でも兄様は兄様や。それに一度定着した呼び方から違う呼び方に替えんのって、なんや恥ずかしくって……」

「そうか。まあ、無理にとは言わないさ。兄様って呼ばれるのも、^{あなが}強^がち嫌じゃないしな」

それから無言の時間が続いた。

教室から見える木々は生き生きとしていて、見てるとなんだか嬉しくなってくる。

自然が消滅していつてるらしいこの近代。

一見幻想郷に住む分には関係ないことかもしれんが、そうでもない。と俺は思う。

幻想郷と言っても、基盤はこの外の世界だ。

外の世界の異常が幻想郷にも僅かながら影響を与えるのではないか、と俺は思っている。

「そや、兄様。ウチ、ちょっと占いやつとるんやけど……やってみいひんか？」

「ん、占い？ ……ああ、じゃあ頼むよ」

「ほな、手え出して」

迷わず右手を差し出す。

「右手じゃなくて左手や」

苦笑いされた。

俺は占いとかには疎いんだよ……。

少々拗ねた感じになりながらも左手を出す。

「うーん……やっぱりや。兄様、近々大変なことが起こるえ。気を
つけんとあかんよ?」

「大変なこと? どういう意味の?」

「さあ? どういうことやろな? ちっとは自分で考えてみい」

「む……、兄をあまり怒らせない方がいいぞ」

「怒るとどうなるん?」

「こうなる」

「きゃー!」

俺、追いかける。木乃香、逃げる。

まあ、久しぶりのスキンシップってヤツだな。

そして何周か教室を回って……、

「きゃあ!?」

木乃香が着物に足を取られてすっ転んだ。
ていうか……パンツ、見えています。

反射的に目を逸らし後頭部をカリカリと搔く。

「お、お前なあ……」

「み、見ないでー!」

「うわああ?!」

「「……………あ」」

木乃香に押し倒された。

それにしても木乃香も大きくなったよなあ。発育具合は普通の中
学生レベルだが。前言った記憶があるが俺は貧乳のが好みだぞ。

……しかし、妙に色っぽいと言うか艶やかっているか……。

俺の腹に当たってる木乃香の内股は驚くほど柔らかい。

あ、やばい。妖怪としてじゃなくてオスとしての本能が……。

木乃香の吐息が掛かる距離。俺も木乃香も微妙に頬が赤く染まっ
ている。

「木乃香……………」

「兄様……………。兄様となら、ウチは……」

「……木乃香、いいか？」

「……うん」

い、いかん。頭がぼーっとしてきた。

^{リミッター}
理性が解除されていくのが自覚できる。

いつの間にか右手で木乃香の頬を撫で、唇と唇が……………。

——ガラガラガラ。

「ふう、やっと撒けた……………あ」

「「……………!?!?!」」

なんというタイミングだ……。ネギが何やら息を切らして教室の
中に入ってきた。

いやホントなんでさ……。てか、こちらに来る気配が分からない程に油断してたのか、俺。

「だ、だめですよー！ 生徒同士でそんなことしちゃー！」

目をぐるぐる回しながら、俺達がなにをしようとしていたのかに至ったらしい。

そのネギの発言に冷めたのか、木乃香は苦笑いで「すまんすまん」と言っていた。俺も冷めてしまった。今度はオスとしてでなく、妖怪としてこの坊主を襲ってやろうか。

これでも人を食うことはできます、はい。

ていうか、戦友の娘に押し倒されて発情するとか……情けなくて涙が出るぜ。

その後、ネギを追ってきたクラスメイトが大勢やってきた。しかも俺と木乃香はナニかを疑われたりもした。いや、実際「ナニカ」をやるうとしてたのだから、疑いも何もないのだが。

イケないな……。ほんと。人間で言う思春期ってヤツですかね？

とりあえず不幸中の幸いと言えば紫がその場を監視してなかったことかな。いつもなら雰囲気で監視されてるとか分かる。今日はその雰囲気や違和感がなかった。

うん、ホント助かった。

そして、また数日後。クラスでとある小さな事件が起きた。

クラスメイトである佐々木まき絵が桜通りで吸血鬼に襲われたと言っただ。

今日の朝にちょっと聞いた噂だが、桜通りにボロ布を来た血塗れの吸血鬼が出たらしい。

……エヴァなんだろうなあ、きっと。

しかもまき絵が襲われたという報告が入ったのが運悪く身体測定の時間だった。

木乃香に教室の外に出てくれへんと言われ、変態って呼ぶえ？　と言われてそれを回避すべく教室から退場していたというのに……、佐々木が襲われたと聞いて下着姿のまままで教室から出てきた女子共はバカですか。

いや、いいんだけどさ。男子としては。

……やっぱり、というべきか。

佐々木から微弱ながらも魔力の流れを感じた。ネギもそれに気付いたみたいだが……。

一足早く教室に戻り制服を着たエヴァを問い詰めた。

「お前なあ……なんで佐々木を襲った？」

「なに、ぼーやを誘うには必要な舞台づくりをしているだけさ」

「だからって生徒を襲うか？　普通」

「襲うんだよ、普通」

んな滅茶苦茶な……。

というか、なんで佐々木？

「夜遅くに出歩いていたからさ」

……それは、まあ……なんというか。

佐々木の自業自得なのか？　これ。

とりあえず、だ。もうすぐ坊主の力を見れる。

期待はしてない。

それでも、ちよっとはどんな「戦い」をしてくれるのか、気にな

るんだなこれが。

英雄^{ナギ}の息子だからと甘やかされてなければ、それなりの魔法も行使できるだろうしな。

その日の夜。

桜通りから、大きな悲鳴が聞こえた。

またエヴァがやらかしたか？ 家族として叱っておくべきかな、これ。

「待てっ——！」

む、今度は坊主の声か。

見回りでもしてたのか？

声がした桜通りを覗いてみると、アスナと木乃香。それと……宮崎？

しかも宮崎は制服が破れ、服の意味を無さくなっている。

……仕方ない。

「^{トレース}投影、^{オン}開始」

暖かタオルを投影して、宮崎の方へ向かう。

「木乃香、アスナ。大丈夫か？」

「ぎ、銀兄！？　なんでここに……ていうか、それ」

「ところで、偶然にも俺は暖かいタオルを持っている。宮崎に羽織らせておけ。三月とは言え、まだ冷える。そんな格好では風邪をひいてしまう」

「う、うん」

それにしても坊主。アイツ判断を誤りやがったな。

ここは宮崎等の一般生徒の保護が優先だ。もしこの一件が団体での事件だった場合を考えると鳥肌が立つ。

一人が囃役でその隙に他の複数が一般人を襲う。考えられない訳ではない状況だ。

……ああ、叱ってやりたい。怒鳴ってやりたい。あれで立派な魔法使いを目指してることに腹が立つ。
ル・マギ

まあ、十歳で修行の身だから仕方ないと言えば仕方ないのだが。

だがここは魔法使いとして、なにより、宮崎の担任教師としてここに残り保護をするべきだった。

……どうやら、坊主の問題点が見えてきたかもしれないな。

こればかりはエヴァに礼を言おう。後で抹茶スイーツセットでも買ってやるかな。

「アスナ、木乃香。宮崎を安全な場所……というか寮に運べ。俺はあの坊主を追いかける」

「う、うん。分かったえ」

「ああ、頼んだ」

アスナと木乃香が行ったのを見た後、適当な建物の屋根に立ち、その戦闘の行方を見守る。

……ほう、エヴァを武装解除させたか。

エヴァは建物の屋根に降り立ち、坊主も同じく。

坊主はエヴァが武装解除されたのを見て安心したのか、下着姿のエヴァを見ない様に話をしている。

紳士的には正解な行動だな。ネギ坊主よ。お前は一体何を目指してるんだ……？

無論、それで坊主が勝てる筈もなく、突然現れた茶々丸に詠唱を邪魔される始末。

最終的にはエヴァの血を吸われそうになっている。
はぁ……とため息が出た。そんな時。

「ウチの居候に何すんのよ——っ！」

……いやお前が何してんだアスナ。

マジックキャンセルして真祖の魔法障壁抜くなよ。

てか肉体年齢十歳を足蹴りすんな。しかも茶々丸とエヴァを同時に蹴るとは……。

なかなか難易度の高い蹴りだ。

「うーん、こっからじゃ何を話してるか分からんな……」

さっきのアスナの声はあまりの音量に完璧に聞き取れたんだが……。

読唇術くらい身につけておけば良かったか。

ああ、これでも妖怪だから視力は良いんですよ、俺。

お、エヴァが飛び降りた……。アイツ、今マントが無いの忘れたのか？

あー……予想通り落ちてる途中わたわたと焦ってる焦ってる。このまま静観、というのもいいが。

ひうんひうんひうん、という子供の泣き声の様な音をたてながら糸を飛ばす。

糸は束縛用の糸の為、対象が解体になることではない。いや、それなりの摩擦力があれば斬れるかもしれないが。

ということでエヴァを糸で捉え、地面にゆっくり下ろしてやる。
俺はというと、足に強化を施して屋根から飛び降りて着地。

「この糸は……やはりお前か」

「ああ、そうだよ。……なんだ？ 不満そうだな。なんなら、今度は空に投げ飛ばしてやってもいいんだぞ？」

「あ、いや。不満なんてことは無い。ただ、その……ちょっとかっこ悪い所を見せてしまったな」

「……はあ」

そんなことかよ。

「俺は、そんなお前の方が良いと思うぞ？ 精神は肉体の影響を受けるものだ。子供っぽく騒いだり焦ったりするお前は、嫌いじゃないさ。（坊主は好きになれそうにないがな）」

「……なんか聞こえないセリフみたいなのが聞こえた気がしたが、私の気のせいかな？」

「聞こえないセリフが聞こえたって……なんだそりゃ。そんなことより、早く帰ろうぜ。腹減った」

「ああ、それもそうだな」

……ちなみに余談だが、さっき坊主がいた屋上から、泣き声が聞こえてきた。

家族と思春期妖怪と吸血事件（後書き）

さて、一気にネギとエヴァの戦闘話に行きましたな。

というか、週一って言った手前この更新だよ。

まあなんというか、さすがに疲れたけ……。

ちよっとキャラ説明やったら寝ようと思うんだ。異論は一切認めない。

……てか、文中初めての投影が「暖かタオル」ってどうなんだろう俺。

文中の銀炉の屋根から地面に降りるシーンですが浮遊術じゃなく、普通に飛び降りることにしました。

キャラ紹介

《キャラ紹介》

【八雲 銀炉】

名前に銀、なんて入ってるから銀髪を想像してるかもしれませんが、黒髪です。

転生したこと自体は覚えてるけど、前世の記憶が一切ないです。獣耳は小太郎みたいに隠せます。

まあ、あんな無重力ヘアーじゃないけど。

イメージ的にはソード・アート・オンライン（アインクラッド時代）のキリト君。

目の色は赤です。

ちなみに、麻帆良に来た時には年齢は五三七歳ってことで。

《能力的な物》

【雷を操る程度の能力】

雷を体で作りに出すことができ、それを操る能力ですね。

糸が無くても操作可能ですが……確実に相手に感電する為に糸を併用しての雷放出が多いです。

【曲弦師】

色々な種類の糸を扱う技術者。

糸使いの至高。曲弦糸。

熟練者ならビニールテープでも人を輪切りにできる、ある意味物騒な技術。

針金の硬さまでならOKなんて書いてあるが……。マジか！？
としかリアクションの仕様がなない。

【投影魔術（固有結界）】

魔術師エミヤシロウ（衛宮士郎）の持つ力をそのまま持ってきた感じ。

魔術回路は五十本になってるし魔力もかなり多いが。。

エミヤシロウが投影できるものは全て投影できる。更に、諸事情により他漫画の剣とかも投影可能ってことで

固有結界もエミヤシロウが使っていた【無限の剣製】。

曲弦師として使う糸も、これで作ったりする。

ネギのパートナー探し（ショタコンの巣窟）とちょっとシリアスモード

翌日、坊主は不登校になった。……………いや、なんでさ。

まあ、アスナに無理矢理連れて来られたみたいだけど…………。

エヴァがいつも通りサボってる事を見て安心したり、授業に身が入らなかったり。

あんた本当に教師ですか？ という疑問を持ってしまう。

まあ、坊主がこんなんじゃ、授業も全然進まないだろうし…………。ちよっとした昔話でもしようかな〜と。

昔の俺の話なのだが、ナギとジャック、それに並ぶ強者だと言われている。

そして名付けられた二つ名が《最狂者》《斬り蜘蛛》《解体屋》。そのどれもだ物騒なものだった。

当たり前だ。戦闘時、俺は魔法詠唱を行使していなかったと言われている。

詠唱を行わず雷撃、または剣を転送してくると言われ、大層驚かれたものだ。

というか、ぶっちゃけ普通の殺人鬼みたいなもんだからな、俺。

しかし、全く魔法を使わなかったというわけではない。

俺が得意としていた魔法は《黒雷龍牙》。《千の雷》に並ぶ大規模殲滅魔法。

属性は《闇》と《雷》。まあ、《黒雷龍牙》は俺のオリジナル魔法なのだけれど…………。

まずあのバカナギから教えてもらい魔法を試した（バカに教わって良かったのか？ という疑問が今更ながら押し寄せてきたが）。まずは軽く魔法の射手から。

で、何度かやっていくうちに数も威力も精度も上がっていった。魔法使いとしての素質は十分にあるんじゃないか、と詠春にも言われた。アルは不敵に笑ってたけど。

んで、そんな中オリジナルの魔法制作に入った。

最初の内はかなり強引な術式で規模も小さかった《黒雷龍牙》も、段々と安定していった。

それで、今ではナギの《千の雷》すらも凌駕するのではないだろうかと思われるほどの大規模殲滅魔法に成長しましたとさ。

ナギ以上の《千の雷》の使い手が現れない限り、恐らく《黒雷龍牙》が今の世で一番規模が大きい魔法なんじゃないだろうか？

これは今現在研究中だが《黒雷龍牙》の力を一点に集め、それを槍の様な形にして撃ち出す、なんていう魔法も試そうと思っている。規模より破壊を目指すということだ。

まあ、結局はナギの後を追いかけてるだけなんだけど……。

早速だが、今日家に帰ったらエヴァに相談を持ちかけてみよう。

別荘を使わせて貰えば、恐らく後一年も満たないうちに研究は終わり、完成するはずだ。

まあ、正直言って投影とか糸とか使ってれば並の魔法使いなんて赤子の手を捻るより、簡単に殺せちゃうんだけどね。え？ 投影は魔法なんじゃないかって？

それが俺も良く分からないんだよなあ。

あのクソ女神がくれた知識と技術しか持ち合わせていない。ただ、気になる単語が頭にある。

《魔術》……………。

「はあ……………」

……？」

こりゃ重症だなあネギ坊主。エヴァに負けた……というか逃げられたのがそんなに堪えたのか？

まあ、不登校になる程だしなあ。

更に言うところ、そんな坊主を見て皆が騒いでたりする。

……なんだ、ネギ先生王子説事件って。

「セ、センサー。読み終わりましたー」

英語の文を読んでいた和泉亜子が坊主に言うが……。

「えっ!？」

ちょ、おま……聞いてなかったのかよ。

「は、はい。ご苦労様です……。えーと……あの、つかぬことをお伺いしますが、和泉さんはパ、パートナーを選ぶとして十歳の年下の男の子なんてイヤですよー……」

「なっ……」

「ええええ!」

いいんちょ、お前は反応し過ぎだ。

伊達にショタコンって呼ばれてるわけじゃあないんだな。にしてもネギ坊主、今のは聞き捨てならんぞ。

あ、いや。別に坊主の唇を奪いたいわけじゃない。せめてファーストキスは女性がいい。

……そうじゃなくてだな。授業中に授業に関係ないことを聞くな。教師としてあるまじき行為だろう。そういうのって。

「そ、そんなセンセ。ややわ急に……。ウ、ウチ困ります。まだ中三になったばっかやし……」

……和泉も和泉だ。子供にそんなこと言われたくらいであたふたするなよ……。

そしてそれを聞いて本屋……宮崎は何を「あわわ」なんて言ってるんだ？

もしかしてネギのこと……。いや、いやいや。いいんちよじゃあるまいし……。

「で、でもあのその……。今は特にその、そういう特定の男子はいないっていうか……。フラれました！」「はあ……」

和泉、何気に問題発言じゃないか？ フラれたって……。報道部の朝倉辺りに追い詰められるぞ。……と、思ったけど朝倉は既にその情報を知ってるみたいだな。その顔からして。

「――宮崎さんはどうですか？」

「へっ……。ひゃはいっ！」

おい坊主、いい加減にせい。

「えと……。そのー。わ、私はあの――あ……。あうう」

だから何を焦ってんだって。

あー、やばい。宮崎シヨタコン説が色濃くなってきた。

「わ……。わわ、私はあの、その……。オオ、オケっ「ハイネギ先生！」「はうう！？」

「は、はい。いいんちよさん」

「私は超オーケイですわ!!」

え、なにこのシヨタコンの巣窟。
なにこれ怖い。

「――ネギ先生。ここで耳寄りな情報？　ウチのクラスは特にノー
天気なのばっかだからね。大体五分の四くらいのやつらは、彼氏い
ないと思うよ。」

恋人が欲しいんなら、二十人以上の優しいお姉さんからよりどり
みどりだね?」

お前は何を調べとんじゃ朝倉。

え、ていうかそれマジ?

逆に五分の一に彼氏がいる方が不思議な気がするっ！　不思議だ
ねっ！

「えう!?　いえ、別にボクそーゆーつもりでは……!」

じゃあどういう意味だよ。

仮契約つったって恋人同士の関係であることに変わりはないぞ
?　坊主。

と、そこで授業終了のチャイムが鳴った。

そのままふらふらとネギは教室から出ていこうとし……

――ゴッ!

重い音を立てながらドアにぶつかってたりする。

「ハ、ハハ。大丈夫です、ホントハイ……………はあ……………」

……あれホントに大丈夫なのか？

あのネギを見てクラスはやはり騒ぎになる。

「ねえねえ、ホントどうしたんだろう」「あんな元気ないネギ君始めて見るよー」

「アスナさん。何かご存知じゃなくて？」

「いや、えーと……………あの、何かパートナーを見つけられなくて困ってるみたいよ。見つけられないとなんかやばいことになるみたいで……………」

何故アスナがパートナー選びのことを知っている？ しかも何故そんな焦ってる様にネギの後を追いかける？

……………いや、まさかな。

茄子頭に聞いたが、ネギはアスナと木乃香の部屋で住んでいるらしい。

やばい、それを考えたら……………これは……………。いや、そんな筈はない。

だって、魔法の世界から身を引かせた筈のアスナがまた魔法の世界に入ってると言うのか？

アスナには普通の子に育って欲しい。記憶を消すことがもう二度と無いように、普通の子として生きてほしい。でも、あのネギ坊主の魔法の秘匿などの常識の無さ。

考えられなくもない。

もし、俺が考えたことが本当なら……………。

茄子頭とか詠春、タカミチと図書館島にいるアルに相談を持ちかけた方が良くかもしれんな。

ラカン？ あんなバカは放っておけ。

恐らく屋上にエヴァはいるはず。
まずはエヴァにアスナがどういう立場にあるのか聞きたいからな。
身近な人からの情報収集は大事ですよ。

「ふ、ふわゝあ……」

予想通り、エヴァの欠伸が聞こえた。
いつもの威厳などどこへやら。
思わず微笑んでしまいそうな程に平和な欠伸だ。

屋上の扉を開けて、声の主を探す。

エヴァは屋上の壁に寄りかかり、眠そうにうたた寝をうっていた。

「おいエヴァ、起きてるか？」

「ん、なんだ貴様。……さぼりに来たのか？」

「いいや？ 俺は優等生目指してるからな。いや、そんなことはどうでもいい。アスナのことなんだが……」

「む？」

「ん、どうした？」

「いや、侵入者みたいのが……小動物だ。結界を抜けたなら、ただの小動物では無い筈だが」

「そうか……」

「ところで、さっき何か言いかけたな。なんだ？」

「いや、これが解決してからでいい。俺もついていくよ。暇だしな」
「優等生はどこ行った？」

「……お前、気付いてないのか？ サボるもなにも、今はもう夕方
で放課後だぞ？」

「……まあいい。来るならさっさとついてこい」

「へいへい」

屋上を出て、侵入者の気配を探ってるとき、アスナと会った。

「ほう、神楽坂アスナか」

「あんた達……！ ネギをどこへやったのよ。ていうか、なんで銀兄が……」

……ん？ 坊主？

「別に、ただの退屈凌ぎをエヴァとしてただけさ。お楽しみをしたらとも言おう」

「なな……！？ お、お楽しみ！？」

……何顔を赤くしてんだよアスナ。

いや、狙ったんだけど。

「ただの会話をしてただけだ。銀、貴様もうちょっと上手く言えんのか……？」

そう言うお前も顔を赤くしてるのはどういことですか。

「それとぼーやのことだが……安心しろ。少なくとも次の満月までは私たちは私たちがぼーやを襲うことはできん」

「え……どういこと？」

「今の私は満月に近づかないとただの人間。ぼーやをさらっても血は吸えないのさ。……ほら」

そう言って口を開け吸血するための歯がないことをアピール。

しかし……これでアスナが再び魔法に関わりだしてるのは確かだと言ったことが分かった。

アスナがあのガキの心配をしているということは、あのガキが発端か？

あれだけの覚悟をしてアスナの記憶を消したのに、まさかこんなことになるなんて。

正直、今すぐあのガキを殴ってやりたい気分だ。

でも、そうすれば俺が魔法関係者だとばれる。正直、ナギのことについて聞かれるのは嫌だ。

しかし、なんにしろきつとばれる。なら、今のうちにばらしておいた方がいいのか。

面倒を無理矢理背負わされそうだな。

今日は結局、侵入者の詳細は不明のまま終わった。エヴァ曰く小動物っぽいから放っておいてもいいだろう、とのことだった。

翌日、目が覚めるとエヴァに馬乗りされていた。
なんでさ。

「昨日血を吸ってない。今日吸わせろ」

「夜じゃダメなのか」

「ダメだ。いいから吸わせろ」

ということでは今日は朝から貧血気味だった。

今日は今日で報告することは特になし。

余談だが、ネギのところに白いオコジョが来たらしい。……嫌な予感しかない。

んで、また翌日。

エヴァと共に登校したのだが……。

「やぁネギ先生。今日もまったりサボらせてもらうよ。……フフ、ネギ先生が担任になってからいろいろ楽になった」

それを本人の前で堂々と言うのだから、恐ろしい。

あー……ほら、ネギも逃げちゃった。……それより。

「おいエヴァ。気付いたか。今のオコジョ……下着ドロの常習犯だぞ」

「……ああ、まあ、注意しといて良いことに越したことはない。茶々丸。できるだけ私から離れるな。恐らくばーやの助言者になる可能性がある」

「はい、マスター」

……あのオコジョが坊主にどんな影響を及ぼすか。良くも悪くも、進展はあるんだろうな。

放課後、茄子頭に呼び出された。

そしてそこに居たのはネギ坊主と茄子頭。

……………。

「（おい茄子頭、どういうことだ。なんでネギが……）」

念話で坊主がいることを聞く。

「(安心せい。魔法のことは関係ない)」

……まあ、いいか。

「それで？ なにか用ですか、学園長」

「ふむ、実は近々転校生が来るんじゃない。その転校生がネギ君の村に居た者らしいんじゃない。……その子の年齢が、なんと数えて九歳でな？ じゃから、二人でその子を支えてもらいたいんじゃない」

「……中等部に来るのか……」

思わず頭を抱えなくなる。

まあ、十歳で教師よりは現実味あるけど……。

「……えっと、その子の名前は？」

ネギ坊主は心当たりがあるようで嫌な汗を掻きながら茄子頭に詳細を求める。

まあ、俺も気になる。

ネギの村にいたのに何故ここにいるのか、とか。

「名はエイミー・クラーク」

「……………」

それを聞いたネギが身を硬直させる。

「やっぱり、ボクの父さんを嫌ってた子だ……」

……戦争の英雄なのだから、ナギや俺は普通嫌われるものなのだ

がな……。

しかし、ウェールズの奴らは少なくとも「ちょっとした悪口」くらいで、その悪口も愛故のもの。ナギの事を嫌っているわけではない。

しかしそのエイミーと言う子は嫌っている。

クラークは下位の聖職者と言う意味。恐らく先祖が聖職者だったのだろうな。

しかし……それは先祖の話。両親がどうだったかは知らない。

もしかするとナギと敵対していた可能性だって否めない。そうするとエイミーはナギの敵として村の住民に迫害されていた可能性だって高い。それ故に日本に來たのかもしれないし。

どうやらネギはその子のが嫌いらしいな。

まあ、父親を嫌われて良い気分のする子供なんてそう居ないだろう。

特にネギはファザコンっぽいし。

それも気持ち悪いくらいの。

十歳の息子というなら父親より母親の愛情を求める方が統計的には多い。この際統計など意味を成さないが。

しかしネギは父親を求め続ける珍しい子供。

ネギの口から母親を探す、という言葉を少なくとも俺は聞いたことがない。

アリカ……可哀そうに。

「それにしても、ネギ先生の父親を嫌っていたって……なんでまた？」

学園長室からの帰り道。一応確認としてネギに聞いてみる。

「えっと、エイミーはボクの父さんは父親として失格だって言うてくるんです。ボクの父さんは世界中を飛び回っているいろんな人を助けていたのに」

「……まあ、父親としては失格だよな。……あのバカ」

「え？」

「おっと、職員室はこっちじゃありませんよ。ネギ先生」

「あ、ホントだ。いつの間にか通り過ぎちゃったみたいですね」

頭を掻いて苦笑いを浮かべる。

こう見ると、無理をしてる様にしか見えないな。

「それじゃ、また明日」

「は、はい。また明日」

……なんでこうなってるんでしょうか。ええ、ほんとどうなってるんでしょう。

適当にどっかで飲んでから帰るかなあ、と思っていたらネギとアスナが誰かを尾行しているのに気付いた。

仕事どうしたよ、お前。

ふむ……どうやら尾行の対象は茶々丸の様だな。坊主の肩には今日の朝見たオコジョが乗っている。名は確か……アルベール・カモミールだったか？

全く、麻帆良に来るとは自殺願望でもあんのか？ あの下着ドロ。

しかし……何故茶々丸が一人でいるんだ？
エヴァから離れない様にしていた筈じゃあ……。

……………。

あれから数分。

ネギとアスナが涙を流している。

理由は、茶々丸の善行の数々だ。

女の子の為に、木に引っかかった風船をジェット機を使って取っ
てあげたり。

重い荷物を持ってるお婆さんを背負って陸橋を渡ってあげたり。
川に流されている猫を助けてあげたり。

最終的には、公園にいる大量の猫に餌をあげたり……。

帰ったら茶々丸を褒めてやるか。

てか、もう皆さんお気づきでしょう。茶々丸ってロボットなんで
すよ。ロボットが学校通ってるんですよ。凄いですよね。

しかし涙を流していたネギも、今はあのカモミールに囁し立てら
れ、仕方なしとばかりに茶々丸の前に出る。

おいおい、マジかよ。

詠唱……アスナの身体能力向上か？　ということとは、仮契約を結

んだか。全く……ネギ坊主め。後で痛い目にあって貰おう。

元より運動神経が良いアスナは更に速い攻撃を仕掛ける。……と
言っても、デコピンなんだけど。

それでも茶々丸に僅かながらもダメージを負わせていく。

その隙にネギが……おい坊主。そりゃねーよ。

思わず駆けだす。

俺が見た限り、今やろうとしているのは光の《魔法の射手》だ。
マジで潰す気か!?

ダメだ。ネギの詠唱の邪魔をするには間に合わない。というか既に放たれてる。

なら、茶々丸の盾になる。それしかない。

茶々丸は逃げるのが不可能だと結論したのか、そこから動こうとしない。

丁度良い。無駄に動かれたら、盾に等ならんしな。

……魔法障壁は、無しにしよう。

《魔法》がどれだけ危険なことなのか、アイツの戦友として、アイツの子供に教える義務が俺にはある。

「……っ！ 銀炉さん!？」

茶々丸の声が後ろから聞こえるが気にしてる暇はない。

全ての矢の軌道を読む。一弾でも茶々丸に届かない様に動かなくちゃならん。

「ぐっ……ぬう………があっ!」

体に当たったり軌道がずれて地面に矢が当たったりして、かなり大音量な効果音になる。

結構な魔力量に威力だなあ……。魔法障壁なしでこれを喰らえば、普通レベルの魔法使いなら殺せるかもしれない。

……血が出ている感覚がある。

裂傷か？ 光の矢が体を貫通した訳ではないだろう。

それでも、全て受け止めたと言えば受け止めた。
かなり痛いけど……。

「ごほっごほっ！ い、今のって銀兄!？」

アスナの声が非常に遠くに聞こえる。

恐らくかなりの大音量で耳がきちんと機能しなくなったのだろう。
当分安静にしていれば、すぐに戻るだろうけれど……。

「あ……ああ……ぎ、銀炉さん……？ な、なんで……」

「やいやいやい！ 兄貴の邪魔するとは……テメー、やっぱ真祖の
味方か!？」

「黙れ、アルベール・カモミール。この下着ドロ風情が……。解体
するぞ」

久しいな。これくらい、真剣な声を出すのも。

なんと言っても戦争時以来だからな。

カモミールは俺のちよつとした殺気を孕ませた脅しに黙り込んだ。

「さてネギ先生。授業の時間だ。君は今、なにをしようとした？」

「え……」

「聞こえなかったか？ なにをしようとしたのか、と問うたのだが」

自覚はないのか……？

まあ、カモミールに囁し立てられたのが今回の原因だからな。
更に言うところ流されやすいネギ坊主が招いたこと。

「ネギ先生。茶々丸はあなたの何ですか？」

「ち、茶々丸さんはボクの生徒です」

「じゃあ、ネギ先生はその生徒になにをしようとした？」

そう俺が言った瞬間、ネギ坊主の顔がドンドン青くなっていく。頭の中では答えが出たが、なかなか口に出さない。

口に出せ、坊主。

「言え」

「え、えと……その……」

「言えと言っているのが分からんか、小僧！」

「ぎ、銀兄！ なにもそんなに言わなくても……！」

「アスナ、お前は何故止めなかった。クラスメイトを殺したい衝動にでも駆られたか？」

「ち、ちが……！ けど、エヴァちゃんに勝つためには……」

「ほう、良い考え方だ。戦士としては、その答えが正解だろうな」

「あ、当たり前だ！ 俺っちは兄貴に正解しか教えねえ！」

「カモミール。それは君の考えにとつての正解だ。ネギ坊主に押し付けるもんじゃねえぞ」

「ひいっ！」

手拔かりなく手を抜いた殺気だけで怯むくせに……。

と、更なる圧力を駆ける。

「おい坊主。さっさと俺の問いに答えろ。《君は生徒になにをしようとした》？」

強調させて問い掛ける。

最早坊主の顔は青を通り越して白。白を通り越して黒になりそうだな、こりや。

俺が答えを待ってる内にネギ坊主は逃げ出した。アスナもそれを追いかけた。

そのまま、俺の意識はフェイドアウトした。

Side エヴァ

ジジィに釘を刺されログハウスに帰ってから既に一時間は経つ。
だというのに銀どころか茶々丸すら帰ってこない。
嫌な予感がする。

折角出来た家族だ。放っておくわけにもいくまい。
そう思い、出掛ける準備をしていたときだった。

「マスター！ 銀炉さんが……！」

「茶々丸？ どうした。……なんだ、それは。何があった！」

そこを見ると、いろいろな箇所裂傷を負った銀の姿があった。
肩や腕や太腿やわき腹や頬。至る所から血が流れている。

傷それ自体が深く、なにより数が多い。見た限り血は未だに流れ
続けている。

「くっ！ 早く治療するぞ、このままでは失血死する！」

「はいマスター！」

それから数分で全ての裂傷と言う裂傷に塗り薬を塗っていった。
なんとか傷は塞がったが、血は足りないことに変わりはない。
これでは私の今日の吸血分が無くなってしまわないか。
そう心の中で文句を言いつつ、造血剤を銀の口の中に入れる。
水を流し込み、無理矢理飲ませる。

かなり量の血を失い、死んだような顔になってた銀だが……。
それも数分すればいつもの顔色に戻っていった。

思わず泣いた。

なぜ泣いたか。分かり切っている。私に家族をくれた人だからだ。
茶々丸は私にとって僕^{しもべ}だった。だがコイツは家族だろ、と言った。
最初は何を言ってるんだお前は、と思っていた。

だが、今となっては感謝している。

六百年以上もの間家族がいなかった私に家族をくれて、なにより
自分も家族になってくれた。

そんな存在が、私にとって大事な存在であることは、誰でも分かるだろう？

だから、生きててくれたことに対して大いに感謝した。

私がナギに見離され登校地獄を掛けられてから数日間、私の傍に
いてくれた。

その後、数年間ここにいたことを知った時は正直言って怒った。
数年間もここにいておいて、私に会うことはなかったのか、と。
それと同時に忘れてしまったのではないかと言う恐怖もあった。

でも忘れていなかった。

ちゃんと、ここにいてくれる。

嬉しくないわけがない。そんな奴が一度死にかけたのだから、泣
いてもいだらう？

誰に許しを請うたのか分からないが、そんなことを思いながら銀
の頬を撫でていた時。

銀の赤い目がうっすらと見えた。

Side 銀炉

「……ん？ どこだ、ここ」

「やっと起きたか。バカ者」

その言葉は良く聞いたことのある馴染みのある声から発せられた。
エヴァだ。

どうやら俺はソファに寝ているらしい。

体を見ると包帯を巻かれている。思った以上の大怪我だったみたいだな。

「……エヴァ」

「ん？ なんだ？」

ぶつきら棒に振舞って隠しているのだろうか？ 俺は分かってる。

頬に涙の跡があることを。

俺のためなのか？ ああ、きっと俺の為に泣いてくれたのだろう。

だから「ありがとう」。

「……ふん！ 私が勝手にしたことだ。礼を言われる覚えはない！」

頬を真っ赤にさせながら、エヴァはそっぽを向いた。

「ほう、ぼーやの村に居た子供が……ねえ」

「興味なさそうだな」

「当たり前だ」

と、いうことで吸血中です。

どうもこの時間だけ慣れません。

なんせ俺の血を首から吸ってたりするので、妙に体の密着度が高いんです。

ていうか、言ってしまうえば抱き合う形になってるんです。

これでもエヴァは美が付く少女。

いつも思っただけど、やっぱり俺ってロリコンなのかな。

い、いやいや。ないわー。俺は貧乳が好みなだけだ。

ましてやこんなロリババアなんかに欲情なんかする訳。

「誰がロリババアだ！」

「あだだだだだっ！ 痛い！ 噛みすぎ！」

どうやら、心の中でもこういうことは言わない方が良さそうです……。

ていうか怪我人の俺に容赦なさすぎ……。

それを悟ったのか「す、すまん」と謝ってきた。素直にすれば可愛いのかな……。

ちなみに、エヴァも俺が呼び出された後に呼び出されたそうです。なんでも学園長に「程々にな」と釘を打たれたとか……。

あ、そうそう。

俺の目が覚めてすぐ、何があったのかを聞いてくることは無かった。

いや、既に茶々丸が説明したのか……。

それでも俺を怒ることもなくいてくれるエヴァは、女神の様にも見えた。

……え？ バカ者って言ってるということは怒ってるんじゃないかって？

あれは会話でのじゃれ合いですよ。決して怒ってるわけじゃあないんです。ツンデレなんです。

「誰がツンデレだって？」

また嚙んでる力を強くしてくるエヴァ。

「痛いですが、キティ」

「殺されたいのか貴様!!」

ネギのパートナー探し（ショタコンの巣窟）とちよつとシリアスモード（後書き

実は今回、茶々丸が襲われるシーンを忘れてしまい、無理矢理本文に組み込んだ形となっております。妙に読み難いかもしれません……。

とりあえず、なんかすんません。

ということで、本文で何か可笑しな文があるかもしれませんが、俺自身何度か確認したので大丈夫だと思うのですが……。

まあ、見つけたらどうか教えてください。

あ、ちなみに今回8000文字超えましたw

あ、ちなみにエヴァが普通に銀炉の血吸ってますけど……。
これは二次設定というヤツですね。

夜になると少なからず魔力が戻って血を吸うくらいならできる、みたいなの。

看病と夢と停電当日

今日はエヴァが風邪をひいた。

吸血鬼のくせに花粉症でもあるらしい。おまけに魔力も封じられてるんだから、これじゃただの幼女だな。

そんな訳で、俺も茶々丸と休んで看病と言うわけだ。

学校には新田教員に報告した。

それを聞いた新田には、午後からでもいいから来るようにと言われた。基本的に良い先生なのだ。

厳しいが故に嫌われ役を請け負う。漫画に書いた様な教員だ。あれは尊敬に値する。

さて、そんな訳でエヴァの我儘に素直に答えていつてる中、ネギ坊主が果たし状なんてモノを持ってきた。

俺の姿を見た瞬間、「何故ここにいるのか」という表情と「会ってしまった」という表情になった。

いつも通りの生徒役として坊主に話しかけたら土下座された。

まあ、でも……あれって俺が勝手にやったことでもあるからな。

謝るなら茶々丸に謝ってほしいと言うのが俺の正直な所だ。

現在茶々丸は薬の買出し。

しかし、遅い。

少し気になったので、ネギにエヴァの看病を任せ茶々丸の迎えに行った。

S i d e ネギ

つ、疲れた……。

エヴァンジェリンさんに果たし状を持ってきた筈なのに……看病
なんかしてていいのかな？

それにしても、銀炉さん。

昨日の茶々丸さんの時とは大違いだった。いつものにこやかな表
情だったし……。

うーん、この前戦った時、エヴァンジェリンさんは「千の呪文の
男」であるボクのお父さんと知り合いだったみたいなこと言ってた
けど……なにか写真とかなないかなー。

「や……やめ、ろ……」

「うひい！？ ご、ごめんなさい！ け、決して悪気は……！」

と、謝ったものの、良く見ると寝言だったみたい。ちょっと安心。

「サウザンド・マスター……待て……やめ、ろ……」

……え！？ も、もしかしてボクの父さんの夢？
サウザンド・マスター

……女の子の夢を覗き見るのは気が引けるけど、父さんのことが
何か分かるかもしれない。

先に謝っておきます。ごめんなさいエヴァンジェリンさん。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 夢の妖精 女王メイブよ
扉を開けて 夢へといざなえ……」

ざざあ……と波が引く音がする。

浜辺を見ると、金髪の大人な女性とローブを着た人が相對する様
に立っている。

あ……こ、これは、もしかして昔のエヴァンジェリンさん……？
！ ぜ、全然違う……。

「遂に追い詰めたぞ。千の呪文の男。この極東の島国でな。……今日こそ貴様を打ち倒し、その血肉、我がモノにしてくれる」

「『人形使い』^{ドールマスター} 『闇の福音』^{ダーク・エヴァンジェリン} 『不死の魔法使い』^{マガ・ノスフェラトゥ} エヴァンジェリン……。恐るべき吸血鬼よ。己が力と美貌を糧に何百人を毒牙にかけた？ その上俺を狙い、何を企むかは知らぬが……」

あ、もしかして……このローブの人が……。

「……諦めろ。何度挑んでも俺には勝てんぞ」

や、やっぱり！ この人がサウザンド・マスター！？ 十五年前のボクのお父さん！？ か、かつこいいー！！
すごい、イメージ通りだ！

正に最強の魔法使いだ！

「パートナーもいない魔法使いに何ができる？！ 行くぞチャチャゼロ！」

「アイサー御主人」

叫びながら、エヴァンジェリンさんは父さんに向かって駆けだす。
もう一体、小さな人形もいるけど……チャチャゼロって、まさか茶々丸さんの前のパートナーなのかな？

父さんは逃げようとせず、「えーと、この辺だっけ……」とか言
って足で何かをしている。

なんだろう？ なにかの術式かな？

「フ……遅いわ若造！ 私の勝ちだ！」

ああ！ このままじゃ父さんが！
と、思った瞬間、変なことが起こった。

「うわああ！」

「あぶっ！」

エヴァンジェリンさんが消えた。
いや、消えてはいない。けど……。

「なっ……これは!?!」

「落トシ穴ダ。御主人」

「見りゃ分かるっ！」

落とし穴……。

そう、エヴァンジェリンさん達は落とし穴に落ちた。
ボクの父さんと言えば、大きな袋からニンニクを落とし穴に放りこんでいる。

「ふははは!?!」

「なあっ!? ひいいいい！ 私の嫌いなニンニクー!? い、いやあ！ やめろおーっ！」

「ふふ……お前の苦手なものは既に調査済みよ」

「あうう!?!」

「アアッ！ 御主人ノ幻術ガ解ケタ！」

あ、あれ幻術だったんだ。
気付けば、落とし穴の中のエヴァンジェリンさんはボクが良く知る女の子の姿になっている。

「ふははははっ！ 噂の吸血鬼がこんなチビのガキだと知ったら、みんななんと言うかな」

「や、やめろー！ バカー！」

そう言いながら父さんはドンドンニンニクを放っていく。

「卑怯者！ き、貴様は千の呪文の男だろう！ サウザンド・マスター魔法使いなら魔法で勝負しろっー！」

溺れそうになりながらもエヴァンジェリンさんは父さんに尋常な勝負を申し込む。

けど父さんは……。

「――やなこった。俺は本当は五、六個しか魔法知らねーんだよ、勉強苦手でな。魔法学校も中退だ。恐れ入ったかコラ」

「なっ……」

えっちょっ……。

「それにお前、ホントは銀炉と一緒にいたいんだろ？ もう俺追うのやめて、あいつを追えよ」

……え？

銀炉って……。

そう言えば茶々丸さんの時も魔法を知ってるみたいだったけど……。

「あ、あいつは追っても追ってもすぐ姿を消す様な奴なんだ……。お前といれば会えるだろ！？」

「……あいつと会う方法として一つ提案してやろう。お前に呪いを

掛けてやる。それで、それを知ったアイツはお前の所に来る。オーケイ？」

「な……！？ の、呪いだと！？ ちょ、おい！ なんだその出鱈目な魔力は！」

エヴァンジェリンさんも真っ青な魔力で呪いの準備をする。

「丁度良いや。確か麻帆良の爺さんが警備員欲しがってたんだよ。えーと、マンマンテロテロ……」

じ、じゃあエヴァンジェリンさんが言ってた呪いってこの時……？
ボクの血を吸えば解けるって言ってたけど、ホントなのかな……？

インフェルヌス・スコラスティクス
「登校地獄」

「いやーん！！」

ここで夢は終わった。

「はっ！ しまった寝てた……！？ だ、大丈夫ですかエヴァンジェリンさん！」

「ああ、大丈夫だよ」

ぶっくら棒にそう言うのと、何か思い出している様な顔で。

「今日の所は見逃してやる。風邪は治ったからさっさと帰れよ」

と言ってきた。

有無を言わさないその言葉に思わず「は、はい」と頷いてしまう。
ホントは聞きたいことがあるんだけど……。

あ、でも夢を見てたってばれたらどうなるか分かったもんじやないぞ……。

さっさと帰ろう。

「で、ではエヴァンジェリンさん。果たし状はまた今度の機会に……。で、では」

「……ん？ 何故寝ながら杖を握っていたんだ？」

思わず体が固まった。

「貴様……まさか、私の夢を……！」

そこで一旦途切れ、息を吸う音が聞こえた。
そして。

「一体何を見た！？ どこまで見た！？」

「べ、別に何も……」

「嘘をつけー！！ き、貴様等は親子そろって……殺す！ やっばり今殺す！！」

「うひいー！！」

ちなみにそのエヴァの怒号は、薬局から帰ってきた銀炉たちにも聞こえるほどの大声だったらしい。

Side 銀炉

翌日。エヴァは熱も完全に治って復活した。

更に、坊主に貸しが出来たからと授業に参加。思わず頭を撫でた。その光景を坊主が舐めまわすような視線で見してきた。
いや、なんでさ。

ちなみにこの前のオコジョはアスナの肩に乗ってたりする。

更に言うなら、今日はメンテナンスの日。
停電になる日でもあるのだ。

エヴァはこの前吸血した佐々木を操ってネギを誘いだすとか言っていたけど……。

まあ、俺は学園に忍び込んでくる悪鬼の者をエヴァの戦いの邪魔にならない程度に片付けければ良い訳だ。

尚、学園に忍び込む悪鬼を排除するのは俺だけでなく、刹那と殺し屋である龍宮。珍しくここに残ったタカミチが参戦するらしい。

俺にとっては都合が良い。

排除は全てそいつらに任せて、俺はエヴァの戦いを高みの見物で
もしようかな、とか思っている。

看病と夢と停電当日（後書き）

次回でエヴァVSネギが終わりそうです。

なんだろう、結構長く続いた気がする。

いや、これは主観的に見たからであって読んだ方からすれば普通なのかもしれないけど……w

とりあえず、今回は3000文字ちょっとで終了。次の話は、早ければ明日には投降します。

夏休みだからね。はりきっていきますよ。

決着

……今、俺はとある鉄橋が良く見える建物の屋根の上にいたりする。

理由？ あの茄子頭のせいだよ！

ネギ坊主とエヴァの戦いを全部見ようと思ったのに「持ち場から離れたら給料払わないから♪」なんて言ってきやがった。

どうせ茄子頭のことだから、ネギの修行の一環としてエヴァと戦わせる気なんだろうな。

しかしまあ、仕方がない。

金が無くちゃ、抹茶スウィーツセット買えないし。

まあ、停電復旧の十二時まで、頑張りますかねえ！

S i d e ネギ

つ、強い！ エヴァンジェリンさんはやっぱり強かった。

魔法銃を使って応戦したけど、エヴァンジェリンさんに操られたまき絵さん、大河内さん、ゆうなさん、亜子さんにボクが集めた魔法銃などのコレクションが全部剥ぎ取られてしまった……。

なんとか四人は眠らせたけど、ここからは魔法でしか応戦できない。

どうすればいいのか……。簡単だ。

罠を張った鉄橋までおびき寄せる！

なんとかそこまで逃げ切らなくちゃ！

Side 銀炉

「銀炉、君もちょっとは手伝ってくれよ」

「お前一人で充分だろ？ タカミチ」

最早怠けモード。やる気出ねー。

お、ネギだ。後ろにはエヴァ。

エヴァに追われ逃げていたネギだったが、鉄橋の辺りでエヴァの魔法を喰らい杖から落ち鉄橋の上を滑った。

……坊主の顔からして、ここに何かあんのか？

あー……捕縛魔法か。エヴァもこれは一本取られたって感じだな。だが……六百年の大魔法使いがその程度の罠になんの対策もしていない筈がないだろう。

案の定。

茶々丸のハイテクってヤツで罠を解除した。

坊主は坊主でシヨックって顔だな。しかもエヴァに杖を奪われるとか、それで泣きわめくは……。

その時、川の水面から何かが召喚された。

西の奴らが動きが活発になってきたな。

「タカミチ、やっぱ俺もやるわ」

「ん？ どうしたんだい？ 急に」

「あれ見れば、分かるだろう」

「……ああ、邪魔をされないようにって？」

「そういうことだ」

屋根から瞬動で一気に川へ駆ける。

あいつらの戦った末も見届けたいが、邪魔をする者は排除しなくっちゃならん。

しかも良く見りゃ烏族じゃねえか。良くまああんなもんを召喚するよ、西の奴等は。

「貴様……何者だ」

烏族の一人が問い掛ける。

水面に立つ人間が普通かと言えば答えは否だ。

なら、俺は魔法使い？ いいや。そんな生易しいもんじゃないさ。ならば何だ？ 俺は何者だ？

答えは簡単だ。

「なに、通りすがりの切断マジシャンさ。初見サービス、無料で見せてやるよ。しっかり見とけよ？ タネも仕掛けもある切断マジック。……殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

S i d e エヴァ

川の水面に銀がいた気がするが……気のせいかな？

しかしまさか、神楽坂アスナが来るのは計算外だった。

しかも私の魔法障壁を無視して私の顔を足蹴りした……。

もう何もかもが計算外で規格外で想定外だ。

ちなみに現在、神楽坂の相手は茶々丸がしている。

「エヴァンジェリンさん！これで終わりにしましょう！ラス・テル・マ・スキル・マギステル 来たれ雷精 風の精……」

む、あれは……。

面白い。ならば。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精 闇の精……」
「え……！？」

ふふ、驚いてる驚いてる。

同種の魔法のぶつかり合いなら魔力量の差が勝敗を制する。

「くっ……！！
ヨウイス・テンペスター・フルグリエンス
雷の暴風……！！」
「闇の吹雪……！！」
ニウイス・テンペスター・オブスクランス

ぬ……。さすが、ナギの息子と言ったところか……。

出鱈目な魔力だな……。

だが、打ち勝てない訳ではない！

このまま押しのければ……！

「ハ……ハ…………」

……？

ぼーやの様子が……。進化でもするのか？ あ、そういえば家帰ったらポ○モンクリアしないと……。

「ハックション……！！」

はあ！？

く、くしゃみで魔力が……。

あれは魔力の制御ができてない……？
そういえば、くしゃみで神楽坂アスナの服を脱がしていた記憶が……！

強い衝撃が走ったが、魔法障壁で防げた。

だが、武装解除は強力過ぎてレジストできなかった……。

もう嫌だ。まさか野外で全裸になる日が来るなんて……。

「やりおったな小僧……。ああ、いいとも。それでこそあのバカの息子だ。ホント……貴様等親子は……！」

「ああ、脱げっ!？」

ぼーや、無自覚に私の服を……。

自分の顔が引き攣っているのが分かる。

ああ……もう本当に嫌だ。

もしこんなところをアイツに見られたら……。

「いけない！ マスター戻って！」

「む？」

どうした茶々丸……まさか！

「予定より七分二十七秒も停電の復旧が早い！」

くっ……！ いい加減な仕事をしておって……！！

見るみる内に都市に明りが点っていくのが見える。そして……！

「きゃんっ！」

S i d e 銀炉

「……呆気ないな」

水面には鮮血で赤く染まり、奴等の肢体が川に落ちる。
これで元の世界に返されただろう。
数はおよそ百体。それでも雑魚は雑魚。
切断マジシャンの相手ではない。

「む……。もう十二時か？」

都市の方はドンドン明りが点いていく。

その時、上で一段と眩しい光が点った。だがそれは一瞬。
なんだ？

と、上を見ると……。

「エヴァ……？ まさか時間を忘れて戦っていたのか？」

美しい金髪を靡かせながら、エヴァが降ってきた。

確かエヴァは泳げなかったはずだ。川に落ちたら一大事。
溺れる前に……。

「ふっ……」

足に力を入れ跳躍する。上から坊主が落ちてくるのも見えたが、
気にしない。

てか、いつの間にか杖持ってるし。

しかしあれじゃあ間に合わんな。加速が足りない。さっきの打ち合いで魔力を使い果たしたのか。

上から落ちてきたエヴァを難なく抱き抱える。

ちなみにお姫様抱っこです。てか、何故裸なんだエヴァ……。

「な……？　ぎ、銀……？」

「ああ、そうだよ。まったく……。空から女の子が、なんていうシチュエーション。どこの映画だよ」

浮遊術。

これを手に入れるにはナギの意味不明な説明を聞きながら一週間くらいで手に入れた技術だったっけな。

苦い思い出を噛みしめながらエヴァを抱えたまま空中に足場を作り、一気に上空を目指す。

「さて、と」

なんとか鉄橋の上に着地。

エヴァは着地した瞬間、俺の腕から逃れマントを作り羽織って「見られた……見られた……」となにやら呟いている。

「ぎ、銀兄！？」

「よ、アスナ。てかお前、いつの間に来てたんだ？」

「それはこっちのセリフよ！」

「かははっ。まあ落ちつけよ、アスナ。こんな傑作、なかなか見れないんだしさ」

「もう、意味が分かんないわよ……」

アスナは俺の発言に項垂れている。

でも、女の子が空から降ってきてそれを助けるなんて、滑稽でい
てなかなかの傑作だろ？

ちなみにそのエヴァは今現在坊主と騒いでいる。

「よし、生徒名簿にボクが勝ったって書いておこー」

「な！？ なにすんだ貴様！ やめろ！」

「えー、だってー」

「停電が続いてれば私が勝ったんだよ！」

「あ、そうだ。安心してくださいエヴァンジェリンさん。ボクが立
派な魔法使いになったらちゃんと呪い解いてあげますから」

「それまで何年待たなくちゃなんのだ！ それよりお前の血を吸
えばすぐに解けるんだよ！」

「あ、そうだ。まき絵さん達を治しにいかなくちゃ」

「無視すんなよゴラー！」

「えーと、エヴァンジェリンっていつもこういうの？」

「ええ、銀炉さんが帰って来てからはなかなか楽しい日々が続い
ております」

「へ、へえ……」

微笑ましいもんだな。

アスナが魔法に関わっちゃったのはちょっとショックだけど……。
とりあえずはハッピーエンド、だな。

Side エイミー・クラーク

「……ここが3-Aですか」

「うん、明日から君が通う場所だ。まあ、元気が良すぎるだけのクラスだから、すぐ馴染めると思うよ」

……今、私の隣に立ってる啞え煙草に白いスーツの男。

間違いない。紅き翼……ナギパーティーの一人。でも、ガトウは既に死んでるはず。

じゃあ、この人はその弟子。

名前は確かタカミチ・T・高畑。

私の親の敵………。

絶対に、絶対にその首刎ね飛ばしてやる……！

決着（後書き）

なんだろう。決着が案外あっさり終わった気がする。

さて、エイミー初登場。

立ち場と言うものは最後の文を見てください分かると思いますw

やはり改善すべきはこの駄文ですよね……。

どうしても戦闘的なシーンは描写できない……。

どうしたらいいんだろう？

ダイオラマ魔法球と告白(?)と復讐

朝早く起きた俺は、夜を寝ずに過ごしてしまっただけらしいエヴァと共に、ある場所にいた。

……熱い！暑い！

何故こんなに暑いんだ！

今四月前だぞ！？　なんでこんなに暑いんだー！

というのも、ここはエヴァの別荘だからだ。

更に言うと、エヴァが俺を押し倒して首に口を持っていき「かぷっ」と噛み、血を吸っていて密着度がウハウハなことになってるからだ。

エヴァの別荘、と言ってもここは麻帆良内。それどころか、エヴァのログハウスの中だ。

そんな所に別荘なんかあるわけないだろうと思う方もいるだろう。だが実在するんだよこれが。

正式名称ダイオラマ魔法球。外から見ればそれはただのミニチュアの南国に建つ建物。

だが中に入れば、そこは本当の南国ということだ。

しかもここでの一日は外の世界の一時間。

更にここは外よりも大気に魔力が満ち満ちている。

修行にはもってこいの場所だ。

で、俺はそんなところで何をしているのかと言うと……。

この前言った、《黒雷龍牙》を一点に集めて槍を作るという技法の実験。

の、はずだった。

なのにエヴァはお楽しみと言って俺を部屋に連れていき、建物の中であったベッドに押し倒され、吸血中だ。

い、いや。R-18なことを期待していた訳じゃあない。どうせこうなるんだろぅなぁとは思っていた。だけどちょっとくらい……。

って！ 俺は何を言ってるんだ……。こんなロリババア相手に……。

「誰がロリババアだって？」

「あだだだだっ！ だから痛いって！ 強く噛むな！」

そんなこんなで、今日は一度も実験ができていない。研究すらできていないのだ。

と、やっと吸血から解放された。

「なあ、銀。お前は私の事、その……なんていうか……好きか？」

「な、はぁ?!」

急に何言ってるんだこのロリっ娘。

あれか、これも罠か？

どうせ罠なんだろう？

思春期妖怪弄って楽しんでんだろ？

「じ、冗談なんかでこんなこと聞か！ このバカ！」
「げべらっ！」

ビンタされた。それもかなりの魔力を込めて。
痛……。

「冗談じゃなかったら本気で言ってるのか!？」

「あ、当たり前だ!」

くっそ、なんでこうなるんだよ……。

調子狂うな……。

ていうかどこでそんな伏線張ってたよ?

「ふ、ふん! もういい。さっさと研究でも実験でもすればいいだろ」

そう言っ、部屋を出ていってしまうエヴァ。

どうやら本気で怒らせてしまったみたいだな……。

ロリババア程、扱い辛い女性なんているのだろうか。

まあ、そんなエヴァの行動に精神が揺らぎながらも、浜辺に出て実験に集中する。

まずするべきは《黒雷龍牙》を手に集めることだ。

これはエヴァが編み出した魔法《闇の魔法》の術式固定を元に行っている。

術式固定してから術式を作りなおし槍へと形を変える。

「ぐ……やっぱこれだけの規模の魔法を固定させるのは、辛いな……」

それでも何とか固定させる。

まず第一の難関クリアだ。

こっから槍へと形を変えるのがまた大変なんだよな……。

「……………ダメだ」

術式を作りかえるって言うのがまず無理なのかな。
この際、《闇の魔法》を取得するかな。
取りこんで相手に直に術式解放させれば……。

「何を悩んでいるんだ？」

さっきの会話があったからだろうか。

エヴァは俺と目を合わせない様にして近づいてきた。

「……………なあエヴァ。《闇の魔法》って、俺でも取得できるか？」

「……………何をする気だ、貴様」

目を合わせなかったエヴァだったが、こればかりは聞き捨てならないのか俺の目を見た。

まあ、こうなるよな。

「危険だってことは知ってるさ。だけど、俺だって人じゃないんだぜ？ 人より上に行くものだ。お前と同じでな」

「だからって全く危険がない訳ではない。もしどうしても取得したいと言うなら……………」

「なら？」

「私と付き合え」「ごめんなさい。やっぱり自分で考えます」即答か貴様ー！

はっはっは。

即答しない訳がないではありませんかエヴァさん。

ていうか、お前と付き合えば取得出来ちゃうもんなのかよ。

「そう言う意味じゃない。私と戦えと言っているのだ。あの巻き物^{スクロール}の中でな。その巻き物^{スクロール}を開けるにはラカンの所まで行かなくてはならなくなるが。まあ、開けるのはお前の自由だ。だが……できれば取得しないで欲しい……」

「何故？」

「な、なんとなくだ！ とりあえず、取得するのはお前の自由だ」

「ああ、分かった。ありがと、エヴァ」

「……………ふん」

頬を赤くしながらそっぽを向いて建物の中に行ってしまった。

やっぱ褒められたり礼を言われることに対して耐性がないんだろ
うな。

まったく、素直に受け止めれば可愛げもあるというのに……。

しかし、俺の自由、か。

「エイミー・クラークといいます。よろしく願います……」

翌日、この前茄子頭が言っていた転校生が来た。

茶髪の短いツインテール。幼いながらも整っていて、外国より日本人の様な顔立ち。小柄な体から伸びるしなやかな肢体。

エイミー・クラーク。

茶々丸に頼んでいろいろ調べてもらった。

確かに、両親は紅き翼に敵対し戦死したと書いてあったらしい。

俺はそのクラークという者の記憶がないから、恐らく俺が加わる前に殺されたのだろう。

だからと言って、逃げる訳にもいくまい。

あいつらの仲間だった俺としての責任はある。

タカミチとかアルが殺される前に、処理しておこう。

いやまあ、タカミチとアルなら殺されることも無いと思うけどな。

「それにしても銀兄が魔法関係者だったなんてね……知らなかったわ」

「ボクもまったく気づきませんでした」

「ああ、気付かれない様にしてたからな」

昼休み。

屋上でエヴァと共に弁当を食ってる時、ネギとアスナが来た。

そのまま俺が魔法関係者だったことに対する話をしている。

「さてネギ坊主。お前には少し言いたいことがある」

「え、なんですか？」

「お前、何になりたいの？」

「そ、それは……やっぱり父さんみたいな立派な魔法使いに……」

「……ナギみたいにか。それが何を意味するのか分かって言ってるのか？」

「え……？」

「ああ、確かにナギは英雄と言われた男。尊敬するのは大いに結構。だがな、悪魔でそれは戦争の英雄だ。それを忘れるな」

「は、はあ……」

ま、今の坊主じゃ理解できないだろうけどな。

「む……おい、銀。ニンニク入ってるぞ」

「ん？ あれ、お前ニンク克服したんじゃないの？ ……どっちにしろ好き嫌いはダメだぞエヴァ」

「吸血鬼としての性なのだ、仕方ないだろう……」

「あーもう分かった。ほら、寄こせ」

「うん……」

「て、お前鼻から鼻水垂れてんぞ」

「むう……やはり花粉か？」

「ほら、鼻出せ。ティッシュやるから」

「ん……」

「ど、どうしよう。エヴァちゃんが凄くいい子に見えてきたわ……」

「ええ、ボクもです……」

何を言うか。

いつもはプライド云々言ってるが、本性は良い子なんだぞ。

……なんだろう。妹を持ってる兄みたいな気分になってきたぞ。

アスナや木乃香、刹那よりも手が掛かるからな。

あ、ちなみに刹那と木乃香はまだ俺が魔法関係者だと言うこと知ってます。

仕事の時、刹那とは別行動だし。

いや、でも刹那は気付くべきだと思うんだ……。

さすがにちよつと悲しいぞ。

殺人者としてのプライドというかなんというか……。

いや、そんなつまらないプライドなんかないけど……。まあ、プライドなんて元からつまらないモノだけど。

「ああ、そうだ。エヴァ、今度修学旅行に行くっぱいんだけどお前ってどうすんだ？」

「……私は行けない。学園から出られないし……」

「そうか……どうせなら俺、修学旅行休むけど？ どうせ俺は学園に縛られてる訳じゃないし、いつでも京都には行けるからさ」

「いや、修学旅行は特別なものだ。私の事は気にせず行ってこい」

お前はそれでいいのか？ と言いたくなるような寂しい表情をしながら言われてもなあ……。

「……いいや、十五年もお前のこと放っておいてしまったんだ。……なんならある人物を犠牲にして修学旅行に行かないか？」

「犠牲だと……？」

「そうだ。その人物には交渉と言う名の恐喝しておくから安心しろ」
「ああ、期待しないで待っておくよ」

いやそこは期待してくれよ。

まあ、強力な呪いだからな。

とある人物如きの犠牲だけで修学旅行に行けるとは思っていないんだろう。

「まあ、精々頑張るさ」

その後、昼飯を食い終わったのだが……。

屋上から外へと移動すると壁に隠れているエイミーを発見。

誰かを見張ってる様にも見える。んー……ああ、タカミチを追尾してんのか。

ちよっと声を掛けておくかな……。

Side エイミー

今現在、私が何をしているかというところ……。
タカミチを追尾中です。

これでも追尾技能には自信あるんです、私。……ふふ。

「なにしてんだ？ エイミー」

「うひゃう?! ぎ、銀炉さん?!」

た、確か八雲 銀炉。コイツも紅き翼の一員だったらしい。

なんでこんな所で生徒をやってるのか、不明ですが……。

更に後ろには六百万ドルの賞金首だった闇の福音^{ダーク・エヴァンジェリン}までいるではありませんか!

そのエヴァさんの後ろには神楽坂アスナとネギ・スプリングフィールド。

アスナさんはどうやら魔法関係者みたいです。あの男の息子であるネギと仲良くしてるのが日常から良く解ります。

そして一番の問題はそのネギだ。

ナギの息子。

ナギと言う名の殺人者は私の親を殺した上に息子であるネギまで放っておいた。

人間として許し難い存在。

しかしネギはそれを嫌がるどころか光栄だと思っているらしいです。ね。

親の不始末は子供の不始末です。

そんなことを光栄に思ってるネギも、いつの日か処分しましょう。

「エイミー? なにかあったの?」

「う、うるさいです。ネギには関係ないことです」

「む……」

「まあまあ、落ち着きなよネギ。で、エイミーちゃん? まさか高畑先生狙い?」

なっ?! 何故それを……!

「はっきり言うけど、高畑先生は渡さないわよ……」

「ふん! 高畑先生は私の標的ですよ。あなたこそ、精々巻きこまれない様にしてください」

「な……!?! このガキ……」

「アスナ。多分、お前とは違う意味での標的だから安心しろ」
「え?」

ん? 違う意味? ということでしょうか。

「それより銀。早く行くぞ。授業が始まる前に屋上に帰りたい」

「もういつそのこと屋上に住めよ、お前……」

「いや、風邪ひいちゃうだろ」

「ボケに対して真剣に突っ込むなよ……てか、茶々丸はどうしたんだ? 授業中はいたのに……」

「そういえば、確かにいませんね」

「ハカセがメンテナンスしてるよ。午後には戻るだろ」
「そうか」

な、なんなんでしょうか。

いつの間にか私が置いてけぼりです。

さすがにちょっと悲しくなってくるのですが……。

「あ、タカミチどっか行っちゃったな。どうすんだ? エイミー・クラーク」

ニヤッと嫌な感じな笑いを私に見せる。

くっ……これは私の追尾を邪魔する罠でしたか……。

してやられました……。

「あ、そうだ。エヴァ達は先に戻っててくれ。俺この子にちょっと用があるからさ」

「ん？ ああ、まあいいが……」

わ、私に用……。つまり、裏の話ですか。

いいでしょう。心理戦は得意ではありませんが、受けて立つです。

銀炉さんに連れられやってきたのは人気のないじめじめした場所。

銀炉さんは人払いの結界だと思われるものを張った。やはり裏の話ですか。

「お前の親、ナギに殺されたんだってな」

「ええ、ですから私はあなた達紅き翼全員に復讐を……」

「ああ、していいよ」

「……は？ あなた、今なんて……」

「お前は復讐をする権利がある。そう言ってるんだよ」

驚きました。

まさかここまであっさりと……。

拍子抜けです。

「さて、ここで質問だ」

……え？

「お前の目的は復習。だけどさ、それって殺ただけで収まるのか？
？ テメーの腹の中の毒虫はもうそれだけで我慢できてしまうのか？」

「どういう意味です？」

「だから、殺ただけで納得行くのかよって言ってんだ。お前の親は、恐らく痛みを感じる暇もなく殺されただろう。相手がナギだったからな」

「それで？」

「でも、お前の心にはデカイ傷を付けた。肉体的に言うとな身複雑骨折かな。そんなお前が俺達を“ただ”殺ただけで収まるとは思えないんだ」

何を言ってるんでしょか。

まさか時間稼ぎ？

これはあのアスナさん達が巻き込まれない様に私を捕える為の罠？

「安心しろよ。罠なんかじゃないから」

「信じられません」

「じゃあ、これで信じてもらえるかな？」

そう言っ、て、左手の親指を右手で掴み……

「ぎゅッ」。

「なっ………！？」

「親指の次は人差し指かな？」

ポきりッ。

「で、今度は中指？」

ばキッ。

「あ、ああ……」

「次は薬指かな？」

へきりっ。

「ま……まっ……やめ……」

「最後に小指を不可能な方に曲げてみる？」

パきんッ。

「これで左手は完全に使いものにならなくなったね。うーん、でもこれが最後？ 全身複雑骨折の君に対してこれは軽すぎる。じゃ、今度は右手だね。あ、でも両手がふさがったら全身の骨が折れねえか。じゃあ、次は足かな？」

「ま、待ってください！ なにしてるんですか？！ あなたは！」

顔面が青くなってるのが自分でも分かる。

いや、青くなんていうレベルじゃない。きっと白すら通り越して死人の様な顔色だろう。

思わず、銀炉さんの左手首を掴む。

だって自分の指をこんな簡単に折っていく人がいますか！？
それも笑顔で。

「どうしたんだい？　これは、君が望んだことじゃないのかい？」
「そ……それは……」

確かに、私はこの人達を殺そうとしていた。
けど、苦しめて殺そうだななんて思ってたなんか……！

「……分かっているのか？　“本当の復讐”とはどんなものなのか
ってこと。少なくとも、君が考えてるよりも辛い。なにより君には
まだ早い。まだ九歳の君にはね」

……そんな。

なんのためにここに来たと……。

「だから、復讐なんて止めろ。俺が紅き翼を代表して謝る。謝罪す
る。だから、止めておけ。今のお前が復讐したところで、お前の精
神が崩壊するだけだろう」

「う……うう……」

「ナギはな。十三歳からあの戦争に加わったらしい。その頃からア
イツは死の覚悟をして、殺すことの意味を悟っていたらしい。それ
に比べてお前はどうか？　殺すことの意味もまだ理解できない子供
だ。だから、復讐のためにその手を朱に染めるのは止めておけ」

何故か。

いつの間にか頬から涙が滴り落ちていた。

あまりにショックな出来事。

なにより、私の軽率な行動。

殺すことがどういうことなのか理解できていなかった自分。

それに比べて、私の親を殺した人は？

殺すことを理解したうえで殺した。それなりの覚悟を以て、殺し
たと言った。

殺すことがなんなのか。

殺した後自分に降りかかるナニカ。

私は……なにをしようとしていたんだ……!?

「う、うわあああ!」

いつの間にか銀焔さんの腕に抱かれ泣いていた。

ホント、こんな自分が情けなくて情けなくて……余計に涙が出てきてしまう。

枯れ果てる事のない涙が、流れ続けた。

S i d e 銀焔

殺すことの意味。それは本当は勝手な解釈だと分かっている。

殺すことに意味は無く、理解も人間如きにはできないからだ。

エイミーは復讐の意味を知らなかった。

殺す意味を自分勝手に解釈しようとすらしなかった。

それでいて、殺そうとした。

その自分に気付いたからか。或いは俺が俺の指を折ったという光景を見たショックか。

エイミーの目からは雫が零れていた。

俺の左手首を掴んでいた両手が離れ、俺の胸に顔を埋めてきた。少し、やりすぎたか……?

でもまあ、人間は誰かに抱かれると安心できる。

それは子供にも限られないらしい。俺だって、紫や藍に抱かれていたことがある。

あの時は泣いたり笑ったり……楽しかったもんだ。

少し、強く抱いてやる。

実は今左手の全ての指が凄く痛い。
痛すぎて気絶すらできない。

そんな手で、強く抱きしめた。

「う、うわあああ！」

……安心したから泣いたんだよな？

俺に抱かれたのが嫌だからじゃないよな？

あ、やばい。

なんか俺まで泣きたくなってきた……。

こんな場面にも関わらず、空は綺麗に晴れていた。

ダイオラマ魔法球と告白(?)と復讐(後書き)

後半。完全クビシメロマンチストですね。

いや、ちよつと書いてみたかったと言うか……。

んで、エイミーのこれからの成長を見ていきましようという感じで……w

親の死を受け切れずに復讐を目指したが復讐の意味を真に悟ったエイミー。

これからはどの様にして生きていくのか。そしてもうすぐで修学旅行編です(もう次話からかな? おまけとか挟まなければ次話ですな)。

エヴァの犠牲になるとある人物とは? 一体、誰なんでしょうね。……ふふっ。

あ、あとお気に入り数が最高の31人になりました。

ありがとうございます。

できれば感想なども欲しいのですが……(・|・;)

まあ、できれば感想、または文力評価などくださると嬉しいですw

これからよろしくお願いします。

その後と修学旅行準備

骨折はたった一日で治った。

え、理由？ エヴァが「バカか貴様は！」という罵倒と一緒に精一杯の応急処置をしてくれたからだ。

後は妖怪の再生力とでも言っておこうか。

紫から聞いたことがあるが、俺は他の妖怪よりも再生に少し長けているらしい。

骨折は完治。曲がり辛くなったと言うこともなく、糸を使うことにも支障はないだろう。

あの後エイミーがどうなったかと言うと、泣き疲れて寝ちゃいました。

人払いを解いてからエイミーを背負って保健室に運んだ。

正直言って、マジで泣きそうになった。左手痛くて。

しかし泣く訳にもいかず、気絶すらできない。

小指一本折るだけでも良かったんじゃないか？ という疑問が頭を過ったのは言うまでもない。

保健室には偶然にも養護教諭は留守中だった。

まあ、それは良いことだ。骨折した指を見て何をされるか分かったもんじゃない。

保健室にあったプリントの裏にペンを使って「エイミーが桜通りで倒れていたで運んでおきました」と書いておいた。

数日後。

修学旅行を来週に控えたある日。

「うわー！　楽しみだな修学旅行！　早く来週になんないかなー！」

ネギははしゃいでいた。

それも病的に。

「おい、あれ何があったんだよ」

「んー？　ああ、あれか。この前の休みに町で偶然会ってしまっ
ね。その時にナギがまだ生きているとぼーやが言ってきたんだ。だ
から、何か手掛かりを見つけるなら京都に行けて行ったのさ」

「ああ、そういうこと。確かにあそこはナギが滞在していた場所
もあるからな」

「そういうことだ」

しかし……アレだ。

また自分の立場を忘れてしまわないか心配だな。
後で釘を打っておくか。

S e d o o u t

とある休日。

「やっほー！　良い天気ー！」

「んー、ホント。良い天気ね」

椎名、柿崎、釘宮の三人は原宿に来ていた。

何故かと言うと来週に控えた修学旅行の準備をするためである。

椎名と柿崎のテンションは高く、釘宮がそれに釘を打ってたりする。

ちなみに現在、三人はゴーヤクレープなるものを食べ、後悔してたりする。

「……ん？」

「んー？ どしたの美砂」

「あ、ネギ君と木乃香？」

「う、うん。それもあるんだけど、あっち！」

まず目に入ったのは木乃香とネギの買い物風景。

一見デートの様にも見えるが、こちらも修学旅行の準備兼アスナへの誕生日プレゼントを買っているだけである。

しかしそれよりもインパクトの強いものが……。

「エ、エヴァにゃんとギンロ君？ うひゃー美少女と美少年……お似合いだあ」

椎名の言うとおり、かなりお似合いなのだ。

どちらも日本人離れた美が付く人間なのだ。

まあ、元々エヴァは外国人なのだが……。

「え、ちょ！ あれって恋人同士が良く口にする二人でゴクゴクジューチュウ?!」

意味が分からんネーミングだが、言ってしまうえば一つのジュースを二人で飲みましようというジュースだ。

無論、これは銀炉が望んだ訳でなくエヴァが面白そうとか言っただけの結果である。

「あ、ま、待って！ ネギ君と木乃香もどっか行っちゃう！ ど、どうする?!」

「と、とりあえずネギ君と木乃香は当局に連絡した後、いいんちよにも連絡！ 木乃香の携帯GPS付いてるはずだし……後は当局がどうにかするよ」

「と、当局!？」

「その後はエヴァちゃん追うよ！」

「おー！」

※当局とは職員室ではなく、アスナのことです。
なんていう注意事項を書かなくてはいけなくなるから、ややこしくなる様な発言は控えてくださいよ。

「うるさい！」

「え？」 「どしたの？」

「い、いや、なんでもない……」

……さーせん。

Side 銀炉

「おいエヴァ、あれはなんなんだ？」

「放っておけ。どうせ害にはならんさ」

いや、確かに害にはならないだろうけどさ。

あれ悪意や敵意はなくても悪戯心は満載だと思うんだ。

「そんなことより、早く行くぞ！ 折角外に出られたのだからな！」

「……はいはい。今行きますよ、お姫様」

あ、そうそう。エヴァの呪い解けました。

え、どうやって解けたかって？

そんなんあのチートババアしかないだろう？

境界を操る程度の能力を応用してもらい、呪いと封印を外しても
らっちゃった。てへっ。

まあ、犠牲となる人は言うまでもなく学園長……茄子頭だ。

エヴァの呪いが解け、修学旅行に行ってみろ。魔法先生が黙っち
やいない。

その時、言い訳をしておけ。ということだ。

かなり苦勞するぞ？

魔法先生は自分勝手な正義心をお持ちの様だからな。悪の魔法使
いと言われたエヴァを快く思わない奴が多いのだ。

「ほら、行くぞ！」

「なっ……。お前なあ、尾行されてんのに……」

腕を組まれた。

かなりの密着度。暑いです。てかうハウハです。道行く人に振り
向かれます。

恐らく、随分と仲が良い兄妹だなと思われてるんじゃないですか
ね？

……殺気？ 気のせいでしょう。

どうせあそこにいる三人は、この光景を見て「キャー」とか言っ
てんだろうな。

帰ったら言い訳を考えよう。

「あ、エヴァ。カラオケ行ってみないか？ 人多すぎて疲れただ
ろう」

「んー？ カラオケとはなんだ？ まあ、確かに疲れたが……」

ふふ、別に二人つきりになりたい訳ではない。エヴァをカラオケに連れていきたいというのもあるが……。

どちらかと言うと、あの三人を撒きたいというのが一番の理由だな。

「ここがカラオケか……。で？ ここは何をする所なのだ？」

個室に入ってからエヴァはキョロキョロするばかり。
その姿がちょっと可愛かったりする。

「まあ、基本的には歌を歌う場所だな。でも疲れた時に休むにはもってこいな場所なんだよ」

「ほう……」

「ほら、なんか頼めよ。ここは飯だつて食えるんだ」

「んー……じゃあスパゲッティでも頼もうかな。……確かに、いい場所だな。快適な空間だ」

「だろ？」

「二人つきりにもなれたしな」

「……恥ずかしいことを言うなよ、お前は……」

「お？ お？ なんだ？ 《錬鉄の英雄》《斬り蜘蛛》とまで呼ばれた男も、異性と二人つきりになるのは恥ずかしいのか？ ん？」

口の端を持ち上げながら聞いてくる。

ヤバイ、Sモードになった。

こいつの場合悪戯を言ったりするとき、口の端を持ち上げると言う癖がある。

くっそ。なんで外見お子ちゃまな奴にこんなことを言われなくてはならんのだ。

「誰が外見お子ちゃまだ！」

「あだだだだだっ！　こんなところで噛むな！」

それからいろいろ談笑をしていた時にスパゲッティと冷やし中華が運ばれてきた。

エヴァは行儀良く食べていく。

そういうところが意外だったりするんだよな。

カラオケでは俺が一曲歌っただけだった。

しかも、エヴァはそれを子守唄にして寝てしまった。

仕方がなく背負って店を出る。

……なんと、例の三人もカラオケにいたらしく、俺が出た後すぐに出てきた。

結局撒けなかったということか。……ちっ。

さて、適当に静かな場所にでも行くかな。

「いや、なんでさ……」

静かな場所を求めて早数分。

そこには涙目になりながら箱の様な物を持ったアスナに、ネギと木乃香、そこにいいんちよまでいた。

「あ、あー！ アスナー！ これ、私たちからもプレゼントー！」

さっきまで静かにしていた例の三人が急に茂みの中から出てきた。そしていつの間にか持っていたのか、大量の荷物を全てアスナに渡した。

恐らく先程買っていたのだろう。

……だけどダンベルとかはさすがに無いだろ……。

「ほら、アスナ。俺からもプレゼントだ。明日誕生日だろう？ ちよつと早めのお祝いだ」

右手に持っていた袋を渡す。

中には、一応可愛らしい服が入っている。

実は言うところ、エヴァを連れて妹分であるアスナの誕生日プレゼントを買いに来ていたのである。

決してデートなどではないのだ。

更に言うなら、そのついでに修学旅行の準備だな。

「この分だと、木乃香とネギ坊主もそうだったみたいだな？ 柿崎達」

「「「え……？」」」

「尾行するならもっと気配を消せよ。ばればれだったぞ？」

「……ばればれ？」

「そう、ばればれ」

いや、そんなポカンとした顔すんなよ。

ホントにばれてないと思ってたのか。

「銀兄も私の誕生日覚えてたんだ……」

「なんだあ？ 俺が妹分であるお前の誕生日を、俺が忘れてるのも思ってたのか？」

「……ううん、ありがとつ。銀兄」

「……おう」

さてまあ、エヴァを背負いながら帰りますかね。よし、とりあえず今日はハッピーエンドだな。

その後、家に帰ってからのエヴァのテンションには茶々丸もついて来れなかった。

勿論俺も。

外に出られたのがそんなに嬉しかったんかね？

……嬉しかったんだろうな。

晩御飯中、エヴァはずっと喋り続けた。

ちよっと頬の筋肉が緩みながら、その話を聞いていたらいつの間にか夜中の二時になってしまったけど……。

どんだけ楽しかったんだよ。

その後と修学旅行準備（後書き）

とりあえず原作どおりに進めていこうと思っていたのだが、このシーンまで書く必要はなかったかな？と思ってたりする。

まあ、今夜か明日辺りには修学旅行編突入です！

文章評価やご感想、お待ちしております……。いやマジで。

悪戯とフェイトと……まあ、ロリバ「誰がロリババアだ！」

遂に修学旅行当日となった。

エヴァは朝からハイテンション。九時集合だと言うのに五時には起きてしまい、俺と茶々丸もそれに巻きこまれることとなった。

今日のスケジュールとしては駅を乗り継いで京都駅に向かい、全体行動。

午後の二時から四時まで清水寺を見学。

それから四時半に清水寺を出発し、五時には旅館に着くことになっている。

んで、いろいろありましたよ……。

いや、現在進行形で。

電車の中でカエル大量発生。

電話で茄子頭からネギの所為で西からの嫌がらせがあるかも、なんて言ってたけど……。

やることが子供だ。

西なら木乃香も狙ってくるはず。

木乃香は学園長の血を継ぐ膨大な魔力の持ち主だからな。

西が取りかえそうと躍起になるのは当たり前だ。

さて、そんな訳で呆れ半分のお疲れ半分の溜息をついている隙にネギ坊主の親書が盗まれたらしい。

……親書と言うのは、まあ今回ネギに任された任務の様なものだな。

学園長から渡された親書を西の長に渡せば任務完了と言うわけだ。
まあ、西と東の仲介役ということだ。

と言っても、西の長である詠春にとって東の長である学園長は義父だったりする。

故に仲介だとかは意味を成さない。

はつきり言って西の過激派が勝手に動いてるだけだしな。

んで、その親書だが……西の式である燕に盗られたらしい。
一応俺も見に行ってみるか。

「刹那？」

「あ、銀炉様。どうかしましたか？」

「んー、いや？　なんか変な鳥が飛んで行ったなーと思ってね？
凄いやなあ、最近じゃあただの紙切れまで鳥みたく飛べるんだぜ？
不思議だよなー。いやホント不思議。不思議すぎて理解追いつけないよ。んで、刹那。お前こそなにしてんの」

「え、えつと……ちよつと」

「ちよつと鳥を処分でもしたのか？　ネギ坊主も大変そうだな？
あれじゃあ、詠春に親書渡せないかもな？」

「え……な、なんで銀炉様が親書のことを……？」

「さあ？　自分で考えてみろ。歴史を探れよ。もちつと頭使え。分かんねーからってすぐ頼んな。それじゃあ大切なお嬢様も守れないぞ」

……まあ、刹那にはばらしといってもいいか。

「……銀炉様。なにを言っているんですか？」

「んー？　どこぞバカの戦友が俺だって言ってるんだけどー？」

「どこぞのバカって……戦友……？ え？ いや、けど……」

「お？ 分かつちゃった感じ？」

「え、いや！ まさか！ だって、鍊鉄の英雄は当時十三歳……あ、そういえば銀炉様、なんで成長……してないのですか……？」

今更かよ！

そう突っ込むべきだよな？ ここは。

まあ、真剣な場面だから突っ込まないけど。

「俺が人間じゃないから。そう言えばいいか？」

「………じ、じゃあ……《鍊鉄の英雄》《斬り蜘蛛》《最狂者》

……え？ ほ、本当に、そうなのですか……？」

「信じられないって顔だな。まあ、信じる信じないはテメーに任せんよ、刹那。それより後のネギ坊主、いいのか？」

「へ？」

「多分、お前が西からの刺客じゃないかって疑ってるぞ」

「な、なんで……」

「カモミールだよ。あのオコジョ。ネギにいらねー忠告するもんだからさ」

「おい、何を話してるんだ？」

「ん？ ああ、エヴァか。いやなに、ネギ坊主は大変だって話だよ。ほら刹那、戻ろう」

「あ……は、はい！」

いや、急に畏まるなよ……。

さて、清水寺に到着。

「ふはははははは！ 見ろ茶々丸！ 清水寺だぞ！！ おい、誰か

落ちてみる！ 清水の舞台から！」

「では拙者が……」

「おい止めとけ……」

騒ぎ過ぎだエヴァ。

そして楓、清水の舞台だか何だか言うのは良いけどよ、本当に飛び降りようとするなよ……。お前は無事だろうけど（忍者だし）、その後のネギ坊主のことを考えてやれ。迷惑を駆けたと新田教員に怒られんぞ。

しかしまあ、ここからも西の妨害だと思われるものが幾つかあった。

まず落とし穴。

いいんちよと佐々木まき絵が落とし穴に落ちたらしい。

そこに電車の時と同じカエルが出てきたというのだから、西の妨害であることは間違いない。

んで、音羽の滝。

あそこの縁結びの滝の上に酒があった。

日本酒は好きだから、すぐ気付いたのだが……気付いた時には既に遅いというのがベタな展開な訳でありますよ。

まあ、飲んだやつは酔いつぶれちゃってね……。

そこで新田来ちゃうし。それでネギ坊主あたふたしちゃうし。

「どうやら誰かの悪戯で滝から酒が流れていた様です。酔ってる人をバスに詰め込んで早めに旅館へ行きましょう」

という俺の発言でなんとかなったけどね。

ちなみにその際、ネギ坊主が刹那を警戒していたのは言うまでもない。

生徒を疑うなよ、坊主……。

ということでホテル嵐山のロビーにて。

「やっぱりあの刹那って奴が西のスパイだって！」

「えー、でも刹那さんと仲良いけど、そんなこと無いと思うわよ？」

「そ、そうだよカモ君。やっぱり生徒を疑うのは良くないよ」

「だけどよお……」

こんなところで堂々と喋るなよオコジヨ……。

「刹那が敵か味方か……。簡単なことだよオコジヨ」

「え？　　どういことだ？　　銀の旦那」

「テメーとは銀なんて呼ばれるほど慣れ親しんだ覚えはない。……狩るぞ？」

「ヒィッ……！　　す、すみません旦那……」

「刹那、出てこい」

「は、はい……」

「「え？」」

「やはり銀炉様にはばれましたか……」

当たり前だ。

さつきから夕風がひよこひよこ見えてんだもん。

あれで気付かない奴って言うのもなかなかないぞ。

「んじゃ刹那。自分の立場を言ってみようか」

「えっと、木乃香お嬢様を守る京都神鳴流剣士。一応先生達の味方です」

それに食い付いたのはネギ坊主でもカモミールでもなかった。

「え、じ、じゃあ。刹那さんも魔法関係者なの!？」

「え、ええ。そう、ですね……」

「なんで教えてくれなかったのよ!」

「ええ? いや、いや。それは……」

アスナ、顔が怖い……。

その時。

「ひゃあああゝ!!」

温泉の方から気の抜ける悲鳴。

「今のは……木乃香か?」

俺がそう言った頃には既に刹那は走って温泉に向かっていた。

「……んで? 今度はなんだ?」

「猿の式が……」

今度は猿か。

カエルの次は猿。

西の邪魔にしては幼稚すぎやしないか?

ならこれは西の邪魔じゃない。

誰かが個人的に邪魔をしてきている?

いや、邪魔をするメリットがない。

なら……やはり木乃香か。

個人的な行動でも木乃香を手に入れば膨大な魔力を好き勝手出来る様なもんだしな。

一度刹那とか坊主と話合いをしておこう。

今回はあの茄子頭の考えてる通りにはならない。

本当に本気の実戦経験になるな。

と、言うことで刹那に旅館に入ることが出来る所の殆どに札を貼っておいてもらうことにした。

ネギ坊主は外の見回り。

俺はホテルの屋上から待機。

外に逃げるものなら即座に追跡、ということだ。

エヴァ？ ダメだ、ありゃ使いものにならん。

なにか頼もうとした瞬間に「面倒事をご免だ」だぜ？

ここは旧知の友人として……な？

と、夜風に当たっていると、念話が来た。

相手はオコジョ。内容は、木乃香が連れ去られた。連れ去った奴はデカイ猿の着ぐるみ。

……でかい猿ってなんぞ？

まあ、とりあえず気配探りながら追いかけるか。

S i d e ネギ

くっ……！ 木乃香さんが連れ去られた！

それもあんなあっさり……。刹那さんが貼ってた式神返しのお札

を潜り抜けるなんて……！
ていうか、駅の中に逃げた……？　それも人払いの結果らしきもの
のがちゃんと貼ってある。

じゃあ、これは計画的な行動か。

「お、追いついたぞ！　そこのお猿さん！」

やっと、電車の中で追い詰めた……。

外見がお猿だからって手は抜いちゃダメだ……。
そう思った瞬間。

「お札さんお札さんウチを逃がしておくれやす」

お猿さんが出したお札から大量の水が……！

この水の中じゃ呪文詠唱できない……。無詠唱でなんとか……。あ。

「斬空閃！！」

せ、刹那さんの剣撃で電車のドアが……。す、すごい……。

「さあ、観念しろデカザル女！　お嬢様を返してもらうぞ！」

「っふん、なら付いてきなはれ。返してほしけりゃ力づくで取り押
さえてみい！」

あ、また逃げた……。！？

くっ……。駅の外に逃げられ……。たと思ったけど、どうやらそこに
待っててくれたみたい。

でも安心するのは早い。なんで待ったのか。待つことで何かしら
のメリットがあるのか。

待ち伏せ？　あり得る。

協力者だっけきつというはず。

「刹那さん！ 気を付けてください！ 何者かが待ち伏せしているかもしれない！」

「え……あ、はい！」

S i d e 銀炉

「へえ……あんなことも考えられるのか、坊主。少し評価を改めた方がいいかもしれねえな」

「ふん、君が褒めても嫌味にしか聞こえないと思うけどね」

「まあそう言うなよ」

なんでこうなった。

いやほんとなんでこうなった。

今回の木乃香誘拐で力を貸している人物がいた。

そいつがこの俺の隣で一緒に傍観しているアーウエルクス。

「まさか、こうやって隣に座ってくちゃくちゃお喋りすることになるたあ、思いもしなかったな」

「そうだね。僕も君も前は敵同士だった訳だし」

三人目のアーウエルクス。本人はフェイト・アーウエルクスと呼んでくれと言っていたが……。

なんだか、妙に人間くさくなりやがったな。

やり辛いったらありやしない。

しかも外見なんか子供だしな。ネギに合わせてんのかね？

「ていうか、はっきり言って君と戦いたくないからこの身を表に出したんだけどね」

「へえ？　どういう意味だよそれ。戦いたくないならゴキブリみてーにひそひそしてりゃいいじゃねえか」

「そういうのは苦手ではないけど嫌いでね」

ああ。本当に人間くさい。

油断したら解体しちやいそうだ。

おっと、危ない。あの猿女、また札を使ったな。

大門字焼き……。

随分とでかいな。

しかも、フェイトからの情報によると神明流剣士が控えてるみたいだし……。

「あー……ありやあそろそろ手え出した方がいいか？」

「ああ、そうだね。君の好きにすればいい。僕は君がいる間、手だし出来ないからね」

ああそうかい。なら好きに行かせてもらうか。

炎はネギ坊主の魔法で吹き飛ばした。

タイミングをはかって投影した剣を飛ばそう。

「……………お、いいねえ坊主。風の魔法の矢か」

あれは束縛系の魔法だからな。木乃香にも傷を付けることなく捕らえられる。

と、猿女が木乃香を盾にする。っふん、意味のないこと……を……はあ？

「おいおい、坊主。そりゃねえよ」

「……せっかくのチャンスだったのにね」

フェイトも呆れる程のネギの判断。

まさか木乃香に当たらない様に矢を軌道変更させやがった。

あのバカ……。

「んじゃ、そろそろ行ってきますかね」

「ああ、存分に暴れてくるが良い」

「お前、雇われの身だからってそりゃ酷くねえか？」

「君の口から『酷い』なんて言葉を聞けるとはね。あれだけの大量虐殺をしておいて……」

「過去のこととは、忘れてくれよ。んじゃあ、行ってくる。精々ががんばれよ、フェイト」

「ああ、君もね」

その言葉を背にビルの上を駆け抜けていった。

見ると、そこには木乃香を担いでいる女がいる。

「そうやなあ、木乃香お嬢様には呪符やお札で力をうちの操り人形にでもなって、精々利用させてもらおうわ」

ブチッ音が聞こえた。

「俺の妹分に手を出し、挙句の果てに利用だと……？ 貴様、正気か？」

俺の声が、静かな闇に響き渡る。

「――トレース投影、オン開始」

イメージするのは、

百通りの呪詛を込めて作る呪いの剣群。

「――ロールアウト工程完了。バレット全投影、クリア待機」

五十以上の剣が空中に現れる。

その全ての剣は木乃香に突き刺さってはいけない。

故に、全てがただの牽制の為の剣。

ただ、牽制に使うには勿体ない魔力を持っている。俺の魔力を食わせた故の魔力。

一振り一振りがBランク並の宝具に見えてもおかしくない。

「――フリーズアウト停止解凍、ソードバレルフルオープン全投影連続層写!!!!」

降り注ぐ。ただただ降り注ぐ。

空中を斬り、地に突き刺さり、地を砕く。

「あ……ああ……」

女は猿ではないが、木乃香を持ってる以上コイツが誘拐犯。なら殺シテモ構ワナイヨネ？

「木乃香を離せ女。離さないと言うなら、心の臓を穿つぞ」

「は、はっ！ なにを言うてますの？ 知ってますえ？ あんたらは木乃香お嬢様を盾にすれば、攻撃できひん」

「ひ、卑怯です！」

ネギ坊主。ここはあたふたする場面ではない。

「そうか、残念だ」

「――トレース投影、オン開始」

イメージするのは黒塗りの弓と歪な形の剣「フルンデイング赤原獵犬」。射手が健在かつ狙い続ける限り、標的を襲い続ける。

絃を引き剣に魔力を叩きこむ。

渾身の魔力を込めれば、マッハ十の速度で対象へ飛んで行く。

「さあ、これが最後の選択肢だ。木乃香を離すか、木乃香ごとその身を滅ぼされるか」

「ぎ、銀炉様！ お嬢様を殺してしまっただけは本末転倒……そこまでしてあの女を殺す必要など――！」

「黙ってる刹那」

視線で威圧する。それだけで刹那はその場で動けなくなった。

やはりまだ経験不足だな。

賭け事は人生の基本だろうに。

「あともう少しで三十秒経つな」

紅い雷の様な魔力が剣から放出する。

最早マッハ十どころではない。

このまま放たれれば、この剣は一瞬にしてあの女を貫くだろう。

「さあ。離すか死ぬか。選べ」

「くっ……………!？」

「その男に折角選択肢を貰っているんだ。ここで君が生きてるのは奇跡だよ。天ヶ崎千草」

……………何故今出てきた、フェイト。

「なっ！ あんた新入り……………あの男が何者か知っとるんか？」

「……………さあね。それは兎も角、近衛木乃香を離せ。いつでもチャンスはあるんだから死に急ぐことはない」

「ちっ……………」

舌打ちをしながら女とフェイトは木乃香を置いて去っていった
フェイトの言っていた神鳴流の護衛は結局姿を現さなかったな。

「お嬢様！ 銀炉様……………あなたはなんてことを……………！」

「そう睨むな、刹那。あの時の最善は相手を脅すことだ。実際、アイツが木乃香を離さなかったとしても木乃香が巻き込まれないよう対処する気だった。確かに俺は多くの人を殺してきた。だが、そんな俺でも妹分を殺す様に見えるか？」

「そ、それは……………」

「どうやって対処する気だったんですか？」

ネギ坊主が真剣な目で聞いてくる。

まあ、坊主の場合はどんな魔法を使う気だったのか気になってるだけだろうけど……………。

「糸で束縛……………或いは風の矢で拘束だな。ところでネギ坊主？ なんて風の矢の軌道を外した？」

こればかりは気掛かりでならん。

「だ、だって木乃香さんに当たっちゃう……」

「風の矢に攻撃性はない。当たっても木乃香ごと相手を束縛できる。束縛した後に木乃香を助ければ良かったじゃ、ないのか？」

「あうう……すみません」

「まあ、初めての实戦みたいなものだったからな。でも、これから自分の使う魔法の特性とかをちゃんと考えて、活かしていけよ」
「は、はい！」

「う……んう……？」

お、っと？

木乃香が目を覚ましたか。

「あ、れ？　せっちゃん？」

「良かった、このちゃん。無事で……」

「うん……？　そういえばウチ、なんでこんなところで……」

「それは俺が説明するよ。ほら、さっさと帰るぞ」

「うん………？」

木乃香の肯定と疑問を持った表情が微妙すぎる。

まあ、そんなことはどうでもいい。

今現在問題なのは相手側の神鳴流剣士の存在だ。フェイトが言うには、かなりでかいもんがあるって話だが……。

「（エヴァ、聞こえるか？）」

「（んー、銀炉か？）」

「（ああそうだ。……後で手助けを頼むかもしれないが、手伝ってくれるか？）」

「（めんどい）」

「（そうかそうか、残念だ。俺の切り札の一つ、見せてやろうと思
ってたのに）」

「（……行く）」

「（よろしい）」

まあ、部屋に戻ってから言えば良かったことかもしれないが、早
めに伝えておいて良いことに越したことはない。

ちなみに旅館に帰ったら浴衣姿のエヴァが誘ってきた。

なにを、とは言うまい。

まあ、察してください。

結論、ロリババアの考えてることは到底理解できません。あのチ
ートババア以上に。

悪戯とフェイトと……まあ、ロリバ「誰がロリババアだ！」（後書き）

まずひとつ、更新遅れて、
すいまっせーん！

いや、まじすいまっせーん！

しつこいけどマジですいまっせーん！

いや、本当にすいません。

ここ三日、風邪引いちゃった。

更に言うと、新たな二次小説書いちゃった（まだ投稿してないけど）。

まあ、これからも更新速度は蛞蝓並になりそうです。

そんな俺だけど、許してえっ！！！！

あ、そういえば総合PVだっけ？ あれが40000超えましたw
実はPVがなんなのか理解してない俺だけど、とりあえず皆様のお
かげだと言うのはなんとなく分かっています。ありがとうございます
ます！

キレたり飲んだりキスしたり

次の日、俺は普通に一日を過ごした。京都満喫というものだ。

ザジと茶々丸とエイミーとエヴァ。異色だ。異色すぎる。刹那？
木乃香の護衛行っちゃったよ。

まあ、そんな訳でいろいろな意味で注目された日の夜。坊主は嘆いていた。

「もうダメですー！ 僕オコジヨにされちゃいますー！」

「ええ、恐らくオコジヨでしょうね。朝倉さんにバレタのですから、それくらいは覚悟した方がいいです」

「そうね、もうアンタ故郷帰ってオコジヨ決定ね」

「あううう！？」

刹那とアスナ、なんか冷たい。

刹那から見ればネギは頼りにしていた存在だったんだろうな。木乃香の護衛に関して。

しかしこの体たらく。まったく、情けない。

「お、こんなところにいた。まったく、探したよう？ ネギ先生」

「あ、ああ朝倉さん！？」

朝倉和美の登場である。

その胸の谷間にオコジヨが隠れてるのが気配で分かる。
周りは気付いていないから良いか。

「へっへっへー、実は私、ネギ君のエージェントになりました!」

一瞬、場が凍りついた。

「……は？」

最初に声を上げたのは誰だっただろう。アスナか？ 刹那か？ 坊主が？ それとも俺か？

「だから、この朝倉の姐さんは兄貴の味方っつーことですよ!」

「黙れ下等生物。知ってるか？ 妖怪は人間を食うし、オコジョも食べれるんだ」

「ヒイツ!？」

「に、人間を食うって……。ていうか、やっぱり銀炉君も魔法関係だったんだ?」

「朝倉和美、魔法をなんだと思ってるか、答えてもらおうか?」
「へ?」

朝倉の問いには答えず、逆に質問を返す。

「魔法、ねえ……。やっぱり、便利なものなんじゃないの? それに、ファンタスティックで面白そうじゃん?」

怒鳴っていい? いいよね? いいですよね三段活用。

「戯け! 便利な物だ? ああ、存分に結構。確かに魔法は便利だろうな。だがしかし魔法に関わることがどういふことなのか、お前は理解してるのか!? 下手をすれば命に関わるんだぞ……!」

「あ、え? で、でも、ほら。魔法って、さっきネギ君は轢かれる

直前のネコを守ってたよ?」

俺の突然の怒鳴り声にかなり委縮しながらも反論できる精神だけは買ってやろう。

なにせ今ので刹那とアスナは完全にお黙りモードだ。ここで口を出せば死ぬと、本能で理解しているのだろう。

まあ勿論、妹である二人を殺すだなんてしないけど。勿論木乃香もな。

「坊主がどうやってネコを助けかは知らない。だがな、魔法とは言えやはりそれは物理的な何かなんだよ。脳に直接作用するものもあるが、殆どは風や雷、炎や氷。そのどれもが人を殺せるんだ。どうせ坊主は風が得意だから、風の障壁でも張ってネコを助けたんだろうな。だがな、その風でトラックは吹き飛んだりしなかったか?下手をすれば、運転手は吹き飛ばされた衝撃で頭を打って死んだかもしれないぞ?」

その言葉に朝倉は心当たりがあるらしく俯きながら考える様な表情になる。

部屋の角に置いてある大きめの壺を発見。それを指さしながら朝倉に更なる問いを重ねる。

「ふむ……そうだな。朝倉、あそこにある壺でお前を本気で殴ったら、お前はどうかと思う?」

「……死ぬ。死ななくても、重症を負うと思う」

「そうだ。たかが壺でも人間は死ぬんだ。たかだか壺だぞ? そんなたかだか壺なんかに人間は勝てないんだぞ? 魔法はそれをはるかに超える衝撃を持っている。魔法関係者同士なら、障壁を用いればなんとか衝撃に耐えられるだろうな。だがお前は? 一般人だな。お前は障壁を張れるか? お前は魔法から逃げられるか? 或

いは魔法と対等にやりあえるナニカを持っているのか？」

「……………」

「俺は魔法というより妖怪関係者だが……。魔法関係者の中には俺みたいなものもある。俺は人間を食える。勿論、お前も食える。どうだ？ お前のその左小指。千切って食ってやろうか？ そうすればこの裏の世界がどんなものかも分かるだろう？」

「あ……………う……………」

反論しようとしているのだろうか。小さく声が漏れる。

だが恐らく正当な反論が見つからないだろう。それは呟くとも言えない程小さな声だった。

「魔法に関わるということは命に関わることなんだ。死ぬ覚悟も殺す覚悟もない人間風情が踏み込んで良い領域じゃないっ！」

低い声で唸る様に言う。

その言葉に何故かアスナもびくりと反応する。

ああそうか。アスナも、死ぬ覚悟も無ければ殺す覚悟もないのだろう。当たり前だ。

記憶の改竄。それによって、幼いころ見てきた死体の山や苦痛など、覚えているはずがないのだから。

「なにをしているのだ、銀」

「……エヴァか。なんだか、今日は少し気分が悪い。月でも見てから部屋に戻る」

「そ、そうか……。カードゲームでもして待ってるから、早めに戻って来いよ」

「ああ、分かってるよ」

エヴァの頭を撫でる。

反抗されるかと思ったが、エヴァは俺に成されるがままだった。目がネコの様に細くなって可愛いとも思った。

だが、同時に考えた。さっき自分で言ったこと。『殺す覚悟』。コイツは、一体どれだけ殺す覚悟をしてきたのだろう。身勝手に自己中心的な自称正義の味方さんに追いまわされ、焼いて焼かれ、どれほどの地獄を味わってきたのか。エヴァと共に行動をした時、俺も一度……いや、合計すると二度か。追われる立場になったことがある。だが、あの程度のこと。地獄だなんて呼べるはずがない。そこら辺の劇薬などでは、その地獄の足元も見えないのだろう。

そしてなにより俺には殺す覚悟はない。いや、殺してきた。人間を。

だが、俺は既に人間とは別であり、なにより人間は餌にしか見えないこともあった。

ナギと別れ、金に困った時は人間を食っていたからな。勿論、戦争で死んだ人間の血肉だが。

まあ、そのことがバレてババ……いや、紫にとやかく言われたのは言うまでもないのだが。

さて、ホテルの屋上で何故かフェイトと月を眺めてたりする俺は口を開いた。

「なんかこういう描写最近多くね？」

「タメ発言は良くないよ八雲銀炉。読者が困るだろ」

はいそーですね。

「それで、お前の目的ってのは結局なんなわけ？ あ、酒飲む？

昨日手に入った日本酒なんだが」

「杯はあるのかい？」

「もち」

「それじゃあ……」

盃を二つ取り出し、酒瓶を傾ける。

どっから取り出したって？ それは禁句だ。そして気にしたら負けだ。

「ほらよ」

「どうも」

なんだろう。とても平和な構図が完成してしまった。

しかし、今日は織月か。ま、これも風情があって良い。

そういえば、明日には詠春のところにも顔を出そうか。剣で対等だったのは、アイツが初めてだったしな。

「で、僕の目的がどうのこうのって話だけど」

「ああ、そうだったな。忘れてた」

「……僕の目的は変わってないよ。だから、きっと君ともまた敵対するだろうね」

「今も敵対してるはずなんだがな。なんだよこれ。敵同士で杯を交わすなんて聞いたことねえ。……にしても、大きな目的であり随分と小さな目的だよな」

「……どういう意味だい？」

「そのまんまの意味だよ。だってあれだろ？ めんどくさいから世界を一つ壊しましょう。人々には夢だけを与えましょう。……頭で考えろよ。もっといい方法くらい、見つかるだろう」

そういう俺を、フェイトはどう見たのだろうか。

強い視線で俺を見る。ただ、見るだけ。なにも言わない。

酒瓶を傾けて四回目。唐突に、フェイトが口を開けた。

「……君から見たら、魔法世界は愛しいかもしれないね」

「そりゃあ、な。沢山殺してきた分、沢山助けてきた。その中には俺を兄だと言って慕った子供もいた。逆に、俺を自分の子供の様に扱ってくれた大人もいた。恨まれ好まれ……そうやって俺は魔法世界を過ごしてきたんだ。愛しくないと言えば、それはきつと、嘘になるんだろうな」

「まるで他人事のように言うんだね」

「そうでもないさ。俺がこれまでにやってきたことを、他人のせいにする訳にもいかないしな」

殺してきたという事実だけは、絶対に。

「……まあ、精々頑張れよ。応援はしねえけど、声援なら送ってやるよ」

「……それがどう違うのか、僕には理解出来ないね」

そう言ってフェイトは水のゲートで帰っていった。

俺もそろそろ部屋に戻ろう。エヴァがカードゲームをして待っているとかが言ってたし、なんか不戦敗とか言われて罰ゲームを強いられるも困るしな。

……あれ、杯と酒がない……。フェイトの野郎、気に入ったなら

言ってくれば良かったのにな。

仕方ない。また良い酒でも見つけてフェイトを誘うかな。

な、なんだ。この不穏な気配は――！

ホテル内に入った瞬間、背中にぞくぞく、と嫌な感じがした。それは正しく、背筋が凍るというものだった。

（Side Out）

朝倉和美は企んでいた。魔法を知って、早くもその幻想を壊されて尚、朝倉和美は企んだ。

アルベール・カモミールへの協力。と称した賭けだ。

食券を賭けた、クラスメイト同士での戦い。

その名も、「くちびる争奪！！ 修学旅行でネギ先生とらぶらぶキッス大作戦！！」。

ルールは簡単。戦場は旅館内。制限時間は特になし。ネギの唇を奪った班が優勝。優勝賞品はカード。

班、と言っても代表として二人を選抜しなくてはならない。

一班代表、鳴滝史伽・鳴滝風香。

二班代表、古菲・長瀬楓。

三班代表、雪広あやか・長谷川千雨。

四班代表、明石祐奈・佐々木まき絵。

五班代表、綾瀬夕映・宮崎のどか。

六班代表、エヴァンジェリン・ザジ。

これが、波乱のイベントとなることは、誰しも分かることだった。そして……追加ルール。『銀炉の唇を奪った班は特別賞として、食券百枚とカードを贈呈』。これのせいで、銀炉の休まる時間はなくなるのだった。

（銀炉Side）

「……な、なんだ？ 佐々木。明石。……その不敵な笑みは……」

まず最初に俺が遭遇したのは佐々木と明石だった。なんだろう、嫌な予感がひしひしと……。

「うりゃー！ 覚悟ー！」

「おりゃー！」

「ふっ、はっ……っつと」

「「うぎゃー！」」

枕を持っている……ああ、何らかのイベントか。まったく、新田教員に怒られても知らないぞ……。

あ、俺がなにをしたかと言うと、すつとばしました。廊下の果てまでいってらっしゃいだ。勿論、風の魔法で怪我はないようにしてある。

さて、今のうちに逃げよう。

逃げた先には宮崎と綾瀬がいた。

なにやら綾瀬が顔を赤くしていたりするが……。

「大人しそうなお前らまで佐々木たちとグルか……」

思わず項垂れる。

「グル？　　どういうことですか。まき絵さんとは敵同士です」
「へ？」

敵？　　じゃあなんだ？　　今回のイベントはやっぱり競争かなにか、
か。

「……今開催されてるイベントの内容を訊いても？」

「貴方かネギ先生の唇を奪ったら優勝。優勝賞品としてカードが贈
呈されるそうです」

「……それを主催したのは誰か、言えるよな？」

「朝倉さんですが……」

「オーケイ。ちよつとごめんね」

「「ふえ!？」」

瞬動で二人の間を抜けて……「あんのブン屋あああああああ
!……!」と叫びながら俺は走り去っていった。

夕映Side

「大丈夫です、ネギ先生はこの部屋に居るはずですよ、うん……」

やれやれ、のどかが告白した日の晩にこんなイベントを開くだな

んで、嬉しい誤算です。

これでのどかはきちんとした理由を以てネギ先生にキスできるはずです。

……え？ 私はネギ先生とキスをしたいのかって？ いいえ、あり得ません。のどかはネギ先生のことを好きだそうですが、私にはどうも好きになれそうにないのです。

あ、いえ。今のは語弊を招きそうですね。性的に好きになれないという意味です。人間としてはとても慕っていますよ？

私はどちらかと言うと銀炉さんのほうが……。

はっ！ 私は何を言って……？！

ま、まあいいです。とにかく、のどかのためにネギ先生の部屋に来たわけなのです。

……そういえば、先程銀炉さんと会いましたが……何やら瞬間的に駆けていきましたが……。しかも叫んでました。「ブン屋」って。あれは他のお客さんの迷惑になるので止めた方が良く思うです……。

そして、ネギ先生の部屋に入って私を待っていたのは、とんでもない……我が目を疑う光景でした。

（Side 銀炉）

くそ！ どこだ！ あの射命丸を人間にした様な女は！

ということを探し回って数分後。
道に迷った。

さっきまで綾瀬たちがいた坊主の部屋の前に戻ってしまった。

……坊主が生徒相手にナニカしてないか確認しておくか。まだ九歳だし、そんなことしないと思うが。

「……なっ……」

部屋の扉を開けると、坊主が綾瀬の股を広げ、その隙間に入りキスを迫っている光景だった。

いやなんだ。

「このエロ葉味……ん？　なんだ、この違和感は……」

変な違和感。ネギ……の样だけど、何かが違う。偽物？

「綾瀬！」

「あう！？」

とりあえず綾瀬の手を引いて抱きよせる。

「お前、名を名乗れ」

「ネギです」

「……お前は偽物か？」

「ネギです」

偽物だな。

「綾瀬、一度部屋から出てろ。コイツを処分する」

「え、あ。は、はい！」

さて、綾瀬が部屋を出たのを確認。さっさと処分したいのだが…。

「ちゅー！」

「ええい、黙らんか偽物！」

こいつ、戦闘意識がない。というよりキス魔になっている。なんてこった。

坊主のキャラが壊れていく。いや、これは偽物だからキャラがどうとかいうこと自体馬鹿なことなのだけれど。

「さて、『病蜘蛛^{ジグザグ}』のお時間だ。さっさと失せろ、偽物」

そう言って、ホテル（ていうか旅館か）から借りた着物の袖から糸を取り出す。

そして指をくいと指揮者の様に上げてから、

「これで終いだ」

終つと指を下げた。

瞬間、そこにいたネギは紙切れになった。なんの比喻も無く、紙切れに。

「なるほど、西の式か。まさか敵方の罠でもあるまい。これは刹那に説明を乞うことにしよう」

「あ、あの……銀炉さん？」

「ん？ ああ、悪は滅んだぞ」

「そ、そうですか……」

「だが奴が滅んでも、第二第三のネギがやってくるだろう」

「どこの魔王ですか！ どこの！ ていうか、さっきのはなんだったんですか……」

「そういう話なら部屋の中でどうだ？ そんなところで立ってないで」

「そ、そうですね。それじゃあ、失礼するです」

うゝむ……なんだか、普段から見てる綾瀬とは何かが違う。ま、いいか。

「うわぁ!？」

「うお!？」

綾瀬が足を躓いた。うん、それは良い。いや、実問題あまり良くはないが、こんな偶然が起きたことの方が、今は大問題だった。

「「んん!？」」

えゝ、なにがあったかと言いますと。綾瀬が扉の枠組みに足を躓かせ、それを助けようとして綾瀬のクッションを果たした。そこまでは良い。ああ、良いとも良いですとも。

問題は、その次。

俺がクッションの役割を果たしたのは良いのだが、その反動で俺は綾瀬に押し倒されあまつさえ唇と唇が重なっちゃったんですねはい。

「……す、すまん！ 綾瀬！ 大丈夫か!？」

「は、はう……あう……はうゝ」

「おお!？ 綾瀬が茹でダコに!？」

Side Out

その頃、各部屋では。

「ええ！？ 銀炉君と夕映が！？」

「うそうそうそ！？ほんと！？」

「ああ、狙ってたのにいい！！」

等々騒がれてたりする。

銀炉 Side

数分後。

「だ、大丈夫か？」

「は、はい……大丈夫です……」

何故か坊主の布団で宮崎が寝ている。その横でペタンと座る綾瀬はどう見ても大丈夫じゃない。

顔が真っ赤なのが引かないし、なによりずっと下を向いている。

「すまないな。初めて、だったよな」

「は、はいです……。あ、いや、でも初めてが貴方で良かったというか、……って！ 私はなにを！？」

「よし落ち着こう綾瀬。落ち着くためにも話を変えよう。さっきのネギの偽物の話だ。オッケイ？」

「オ、オーケーです」

「よし。んで、さっきの偽ネギだけどな、正体はこれなんだよ」

そう言って俺がヒラヒラと見せるのは紙切れ。

と言っても、俺が糸で切断した際にシュレッダーにかけたようになっってしまったのだが。

「式……ですか。確か、東洋に古くから伝わる術だと聞いていますが」

「ああ、そうだ。まったく……これもブン屋の仕業か？」

「恐らく……」

独り言を言ったつもりだったが、聞かれた様だな。

しかし、いつまでもこうしてる訳にもいくまい。

昨日の今日で来るという確率は低いだろう。だが、来ないという確率は零じゃない。なら、警備に当たったほうが良い。……なにが来るのかって？ 勿論、あの猿女御一行だ。

「さて、俺はもう行くぞ。宮崎が起きたらさっきのは夢だと言ってやれ」

さっきの、というのは宮崎が見たものだ。

綾瀬が言うには、坊主が五人いたと言っていた。それを見て宮崎は気絶したらしい。

それ即ち、あと四人は偽物がいるかもしれない。

宮崎が見た中に本物が混ざっていれば残り三人だが……それはないだろう。

もし本人がいたなら、宮崎の看病をしているはずだし。

っふ、今日は警備と言うより、薬味の偽物探しになりそうだ。刹那がいたら刹那にも協力してもらおう。

「あ、あの」

「うん？」

部屋を出ようとした時、綾瀬に呼び止められた。

「なんだ？」

「えっと、綾瀬ではなく、夕映と呼んでほしいです……。って！
私はまたなにを！？ ああ、もう私は阿呆ですか！？ い、今は
忘れてください！」

「なにを焦っているのかは知らないが……。新田教員が来る前に、
さっさと部屋に戻れよ、夕映」

なんとなく微笑む。

「は、はう……。！／／／」

ああ、また夕映が茹でダコに……。！ ていうか倒れた！？

と、とりあえず、宮崎と同じ様に布団で寝かせておくことにした。

警備として廊下を歩いてる時、とても見覚えのある小さな金髪の人形を発見した。

「よ、エヴァ」

「んー。なんだ、銀か」

「どうした。カードゲームをやるんじゃないのか？」

「なに、面倒なゲームを強いられてな。仮契約ゲームだ」

「……は？ 仮契約、ゲーム？」

「そうだ。今この旅館は四方に巨大な仮契約の陣が敷かれていてだ

な。お前かぼーやの唇を奪うとカードが貰えるというものさ。私はそれに強引に参加させられたのだ」

「それはまた……大変、だな……」

実のところ、今エヴァの声がとても遠くに聞こえる。

いや、だって、え？ 仮契約？ 唇を奪うってことは、あの仮契約？ 待て、となると、夕映とキスしちまったってことは……。

「おい銀、どうした」

「イヤ！！ 何でもないデスヨ！？」

「……何かあったのか？」

「いやいや、なにもないですッテ。ところで、お前から見れば獲物な俺を前にキスしなくていいのか？」

「んー、だってここでお前と仮契約したって、お前がマスターになっちゃうじゃないか。……だが、そうだな。お前と仮契約するのは、確かに良いかもしれない」

楽しい悪戯を思い付いた様な顔でそんなことを言うエヴァ。

正直、そんなことを言われると、別荘での出来事を思い出してしまう。

「俺は得意なことがなにもないから、良いアーティファクトは出ないと思うぞ？」

「アーティファクトの問題ではない。お前と主従関係になることが大事なんだ」

ああ、なにか危険を感じる。なんというか、このロリババアは、主従関係になった暁に俺になにをさせようとしているのでしょうか。母さん、もといババ……紫さん、助けてください。

その後、旅館内では主犯である朝倉和美。更にそのイベントに参加したものは全員朝まで正座をさせられたそうだ。更に言うと、宮崎とネギが仮契約してしまったらしい。

俺も綾瀬……いや、夕映と仮契約しちゃったから、ここは強く言えないんだよね……。

「むふ」

なんだ小動物。その顔は。

キレたり飲んだりキスしたり（後書き）

またもや遅れましたなあ更新。がんばらなくては……。

とりあえず、すいまっせーん！

まじすいまっせ（ry

夕映ともくつつけたいなあと思った結果がこれだよ！

とりあえず、できうる限りで主人公をハーレムにしたいと思っ
いたりいなかったり……。

ユニーク6000突破！ pv46000突破！

これから愛読してくれると嬉しいです！ そして感想が来ないこ
とに少々ショックを受けてたり！

……まあ、いいんだけどね……。

亀更新だし……。

八つ橋と戦闘と戦闘と

今日は一日班別で自由行動。俺達六班は、刹那は密かに木乃香の護衛へ向かっている。あの明らかに人間じゃない雰囲気を持ったクラスメイトさんは朝起きた時にはすでにいなくなっていた。つまり、自由行動になる前から班行動を無視しているということである。ある意味恐ろしい少女だ。

そうなるとエヴァと茶々丸、エイミー、そして俺だけになるわけだ。

「茶々丸、ここから一番近い甘味処はどこだ？」

「はい、すぐその角を曲がったところに……」

「ふむ、ではまずはそこから行くでしょう」

「いや、待ってください」

「なんだ？」

「まずは八つ橋を買いましょう。八つ橋を買わずして京都へ来た意味あらず、八つ橋知らぬは京都を知らぬと同義と言います」

「……まあ、一理あるな。では八つ橋を買って甘味処でお茶をしながらゆっくり食べるでしょう」

「八つ橋を売っている場所は……すぐ近くですね。真っ直ぐ進めば見えてきますよ」

と言うわけで京都を満喫中です。

実のところフェイトと共にお茶をしたいとも思っていたのだが……それをエヴァが許すかと言えばそれはないだろう。見知らぬ人や気に入らぬ人が介入してくるのを極端に嫌うからな。

さて、八つ橋を今食べる分と帰ってから食べる分を買い、来た道戻って角を曲がり甘味処を探す。

甘味処ではヤケに注目された。まあ、それもそうか。エヴァと茶々丸は制服なのに対し、俺は和服だ。浮くに決まっている。

菊の様な模様が入った濃い緑。何故これを着ているのかと言えば、最も動きやすいからだ。なんと言っても長年……それこそ数百年と和服を着てきたのだから。戦闘となってもこういう服の方がやりやすい。勿論坊主に許可を取っている。新田教員には注意されたが、なに、軽くあしらってやったさ。

「ん……」

甘味処で八つ橋、団子、おしるこを食べた俺達はくつろいでいた。エヴァなんか俺の腿に頭を乗せて寝てしまってるくらいだ。所謂膝枕。

正直エヴァみたいな美少女を膝枕するのは勇気がある。周りの視線とかね。

男からの殺気を孕んだ視線とか怖いんだわ。俺でもね。

「あ、そうだ銀。次はシネマ村にでも行かないか？」

「なんでまた……」

「なんでって、そこでは着替えを有料ではあるが貸し出しをしているらしい。そこで色々着替えをして巡ろうではないかということさ」

「なるほど。確かに、お前の和服姿は綺麗だろうな」

「ふ……当たり前だ」

なにをそんなに自信满满そうな顔で俺の膝に顔を埋めますか。

その光景を舐める様な目線で茶々丸とエイミーが見てくる。いや、なんだ。

「ふむ、さすが日本の妖怪。なかなか似合ってるではないか」

「妖怪だからって和服が似合うとは限らんだろ」

「ん？ そうなのか？」

「そーなの。……お前も似合ってたんじゃないか。元より可愛いお人形さんがもっと可愛くなったんじゃないか？」

「そんなに褒めるな。私にも恥ずかしいという感情があるのだ」

「へえー。ロリババアにも恥ずかしいなんて感情があるんだな」

「……そんなに殺されたいのか、貴様は？ まったく、馬鹿にしおつて」

「いえいえ馬鹿にするだなんて滅相もございませんよお姫様」

「なんで早口なのだ！」

「え、えっと、私はどうでしょうか」

「ああ、お前は元より日系だからな。似合ってるよ、エイミー」

「ああ、ありがとうございます」

「勿論茶々丸もな」

「ありがとうございます、銀様」

……なんだろう、エイミーのキャラが変わっていかないか？ いや、元がこれなのか。

まあ、復讐なんかを考えてる女の子じゃなくなったわけだし、元の性格に戻ってもおかしくないな。

「あ、オイ銀！ 私の鞆をさっきの店に忘れてきてしまった……」

「はいはい。……茶々丸、あんたのマスターだろ。少し頼むぞ」

「はい」

「お、おい。どこ行くんだ銀！ 話はまだ終わってないぞ！ おお

！？ なんだ茶々丸！ 離せ！ 離せー！」

全力で駆けだす。なんで走り出したのかなんて理由は単純明快。

視界の端でなにやら不穏な気配を感じたからだ。

全力で駆ける事数分。そこに出た。あり得ない程の人ばかり。ここまで来ると、人がゴミの様にしか見えない。

「さて……《――^{トレース}投影、^{オン}開始》」

両手に握るのは二振りの刀。

そして見据えるのはとある御屋敷の屋根の上。

木乃香と坊主が人じゃないものと対峙している所だ。

そこには昨日の猿女までいる。

その人じゃないもの――恐らく鬼――は弓矢を構えている。

その御屋敷のすぐ近くの橋では刹那ともう一人が戦闘中らしい。刹那の顔を見れば、これが演技であることはまずない。更に言えば、刹那と対峙してるもう一人の女剣士。恐らく、フェイトが言っていた神鳴流剣士だろう。

……まずすべきは何か。刹那を後退させ、木乃香を助ける？ それとも、俺が木乃香を助けに行くか？

……どうやら、そのどちらでもないらしい。

「……君は厄介だから、あまり戦いたくないんだけど……」

「空気を読もうぜ、お互いによ」

フェイト・アーウェルンクス。

三人目のアーウェルンクスにして、ヤケに人間くさい少年。

その少年の手には、巨大な岩で作られた岩の剣が握られている。

「おい、こっちでも何かやってるぞ!」「おいなんだよコレ。ゲリラパフォーマンスか?」「キヤー! がんばってー!」

「さて、ギャラリーも気付いたことだし……曲は俺等が奏でる剣撃の音。舞台は京都。さあ、踊ろうぜ」

「いいよ、始めよう。僕としても、君と殺り合えることは楽しみでもあるんだ」

俺とフェイトの間にだけ流れる不穏な空気。こちらに気付いたギャラリーは息を呑んでその成り行きを見守る。

「――ふっ」

「はっ――」

動き出したのはほぼ同時だった。だが、相手の剣は大層丈夫らしい。俺の二振りの剣は容易く粉碎、いや、霧散した。

「……《――^{トレース}投影、^{オン}開始》、『^{ナインライフスブレイドワークス}是、射殺す百頭』」

投影するのはフェイトの持つそれが岩の剣なら、それは岩の斧剣。外見的に似ているが、フェイトの持つそれとは違う。俺が持つのは英雄ヘラクレスが所有していたとされる宝具。神秘性の格が違う。それを腕が千切れそうな程の速度で九連撃、相手に叩きつける。

「本当に厄介だ。砕いても砕いても出てくるその剣達は……」

「おいおい、そりゃ俺のセリフだぜフェイト。厄介だよ、お前。なんせ俺の剣を容易く砕く上に、全て防いじゃうんだからな」

そんな話をしながらも奏でる剣撃は巨大なものだ。重い音が重な

り合う。

結局、全て防がれた。まあ、予想はしたがな。

幾度かの牽制をした後、俺達は互いに距離を取る。

「俺達って端から見れば異常者だよな。こんなデカイ剣振り回してんだから」

「実際異常者であることに変わりはないよ。……さあ、続きだ」

フェイトはそれを両手で刺突の構えをとり、そのまま突っ込んでくる。

……しかしそれはどう見ても刺突に向かない武器。つまり、フェイント？

俺は斧剣を刺突を防ぐ位置に置く。しかしそれは左手一本で支えるのみ。腕を強化して使用しているが……正直言うと、重い。元々の妖怪としてのスペック＋強化でもこれなのだ。その重さはかなりのもの。だがそれを気にすることが出来る様な状況でもない。

右手に、ある剣を作り出す。

《――投影、開始》
トレース オン

心の中で、聞きなれた言葉を紡ぐ。

基本骨子の想定を念入りに行い、ここに今、幻想を剣と成す。

「ふっ！」

俺の予想通り、フェイトは体を捻じる様にして無理矢理刺突から袈裟懸け斬りに切り替える。

そして俺は『是、射殺す百頭』ナインライフスブレイドワークスを霧散させる。

「あああつ！」

上からの袈裟懸けに対し、俺は下から斬りあげる様にその岩の剣を受け止める。『是、射殺す百頭』を霧散させたことで空いた左手も使い、両手で剣の柄を握る。

「くっ……本当に厄介だ……」

「喋るな、舌を噛むぞ」

拮抗状態をいつまでも保っているのは正直こちらとして良くない。こちらが行動制限をされる前に、相手以上の力を以てして叩き潰す必要がある。

なら、なにをすればいいのか。

思い付く言葉は『真名解放』。宝具の真の力を解放すること。まあ、膨大な魔力が必要なのだが。

剣の重心を変えてフェイトの斧剣をいなす。
そしてその美しい剣を袈裟懸けに構え――

「さあフェイト、耐えて見せろよっ！
『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}！」

剣を振るいながら真名を解放した。瞬間、周りが光に包まれる。
光の柱が、斜め上に向かって空を突き刺した。

視界が回復していく。見ると、フェイトの体が右肩から両断されている。その断面には、水。

「幻覚か？」

「……今日はここまで……次に会えるのを、精々楽しみにしておくよ」

「ああ、そうしとけ。……さて、俺も逃げるか」

あの光のおかげで周りに目くらまし効果を与えてくれている。ここで消えれば、CG系のパフォーマンスだったと思ってくれるはずだ。

跳躍し、木造建築の上へ着地。そのままエヴァが鞆を忘れたという店に向かった。

「おい銀！ あれはどういうことだ！」

「銀さん、何かあったんですか？！」

あれ、エイミーから銀なんて呼ばれてたっけ俺。まあいいけど。

「いや、坊主たちが厄介事に巻き込まれててな」

俺が最後に見た光景は、怪物が持っていた矢から木乃香を刹那が身を挺して護っていたところだった。その後の刹那が気になったが、まあ、坊主もいるし大丈夫だろうと思ったのだが……いかな。今思うと坊主に任されるというのが既に問題だ。

「そんなの見てれば分かる。私が言ってるのはそうじゃなくて、さっきの光の柱のことだ」

「ああ、確かに私も気になります。かなり強大な魔力が込められていましたけど……」

「アレは……まあ、宝具と呼ばれるものの力さ」

「宝具、だと？」

エヴァが訝しげにこちらを睨むが、まあ、細かい説明は追々な。
さて、刹那がどうなったか。そして坊主は上手く立ちまわれたのか。見なくてはいけない、な。

「さて、俺は詠春の所に行こうと思う。お前らはどうする？」

「む……私はお前についていくぞ。当たり前だろ」

「なんだ？ 昨日は『面倒事はご免だ』とか言ってたくせに」

「うるさい」

「私もついていっていいですか？」

「ああ、別に構わない」

「ありがとうございます」

茶々丸には訊く必要もないな。エヴァが来るんだ。それについてこなくては従者では無い。

「さて、詠春に会うのも久しいし、なにか菓子でも買っていくか」

さて、適当に近衛本家、西の総本山に向かっている所で如何にもな罾が張られているのが分かった。しかも僅かながら坊主の魔力が残留している。

……はあ。手間をかけさせる。

「エヴァ、お前は先に詠春の所へ行ってる。俺は罾にかかった奴等を助けてから行く」

「私はお前についていく、と言ったはずだが？」

「……エミリー、君は「私もついていきますよ？」……ああもう好きにしろ」

しかし、こんな罨に引っ掛かる様な坊主が本当にあの場を納めたのか？ いや、恐らく奴さんが退いたのか。じゃなけりゃ説明にならない。

幾段か階段を上り、ある鳥居をくぐると、嫌な違和感と先程までと違わぬ数えるのが面倒になる程の鳥居が出迎えた。

「さて、こっからだな。今和服を着てることだし、一応、雰囲気を大事にしていこうか？」

そうそう、エヴァが和服を豪く気に入ってしまったが故に、今現在には買ってしまったている。

赤を基調にし、赤を薄くした色の桜の花弁が鮮やかに彩っている。
エイミーは紺色を基調にし、水色の椀が散っている。
茶々丸は黄色を基調として、白い百合が咲いている。

「……どっから取り出した」

「なに、ちよっとした裏技だよ」

投影だ。

そして俺が一体何を投影したのかと言えば、四つの狐面だ。

赤と白の二色で彩られた伝統的なもの。

「ほら、付けろ。こういうのは雰囲気が大事なんだ」

「……これ、お前が『殺し』をするときに付けてたヤツだろう？
いいのか、こんなところで付けて」

「……俺的にはその情報をお前がどこで知ったのかを知りたい」

「裏会の情報くらい知ってても当たり前だ」

そう、俺が人を殺す時にはある言葉と共に狐面をつけると伝説で告がれている。

こんな伝説。あのバグキャラであるラカンに比べたら、なんとも言えない程小さなことなのだが。

「まあ、とりあえず付けろ」

「はあ……分かったよ」

「……………装、着！」

……なんだエミリー、そのノリは。

（Side Out）

罫にはまったネギは苦戦していた。フェイトと犬上小太郎、そして神鳴流剣士、月詠。

刹那と合流したネギとアスナはそれぞれ西の長がいる総本山を目指すべく、階段を上っていたのだが……東洋魔術の罫により無限ループ空間に閉じ込められてしまったところだ。

小太郎にボコボコにされるネギ。フェイトにハリセンで挑むアスナ。月詠と技のぶつかり合いを見せる刹那。

そのどれも苦戦していた。服はもうボロボロ。体には幾数の傷。そんな時に、階段から誰かが上ってくる音がする。一般人だったらどうしよう。そんな不安が場を支配した。だが、そこに現れたのはどう見たって一般人ではなかった。

狐の面を被り、濃い緑の着物を風に靡かせる男が中央に当然の様に、自然と、毅然と、立つ。

その右隣りには綺麗で長い金髪を赤い着物と共に靡かせた少女が並び立つ。

男の左隣り。紺色の着物で着飾り、栗色の髪を両サイドで縛った少女が揃い立つ。

その少女の後ろに、基調を黄色の和服を着ている、どこか人間染みた……いっそのことロボット染みた人間とも言えよう存在が控えている。

その誰もが狐の面を付けている。いっそのこと滑稽とも呼べそうなそのパーティーのリーダー。つまるところの銀炉は、大袈裟に両手を広げて言った。

「殺される覚悟はできてるか？ 泣いて地に伏せ命乞いをする準備は？ ならば鬼ごっこの始まりだ。鬼は俺でお前が人間。さあワルツを踊ろう」

それは彼の記憶にあるセリフだった。かなりぼんやりとだが……。それを言ってる間にも、銀炉は動き始める。右手に、黒い刀身を持つ刀を投影して、駆ける。

彼が持つ刀は月華夜行。妖怪を、人間を、月をも斬り伏せる夜叉の刀。その刀身は切れば斬る程に朱に染まり、殺し過ぎればそれは赤黒くなる。最終的には真っ黒のになると言われる。誰が使った、という記録は一切残っていないのだが。

銀炉は瞬動を行使し、一瞬でフェイトに近づく。

「解体してやるよ。お前の命が続く限り、殺し続けてやんよ」れんあい

「なるほど、その狐の面……。僕を殺そうと、そういう魂胆かい？」

「さあな。この面を付けるときは、殺人鬼になると誓ってるから、強ち間違いじゃあないかもな」

狐面を見たフェイトはシニカルに笑いながら言った。

本来無表情な彼を知るものが見れば驚くであろう、楽しそうで皮肉な笑み。

その笑みに、俺は笑わずに答えた。

フェイトは笑った。

俺は笑わなかった。

そう、笑わなかった。

「ふん」

袈裟懸けに振り下ろされるその刃を、フェイトは岩の剣を以てして受け止めた。

だがそれもほんの刹那。その岩の剣はまるでバターの様に両断された。

「……まさか、一撃で壊されるとはね」

そう言いながら岩の剣を再構築していくフェイト。

月華夜行の切れ味は、あのデュランダルにも匹敵する。

「出来る限り。力いっぱい^{あい}に壊してやるよ。そして最後には、殺して解して並べて揃えて、晒してやるよ。《欠陥人形》」

「それはそれは……、ならば、僕もそれに応えよう。さあ、殺り合おう。《殺人鬼》」

そうして夕は夜へと移り変わっていく。

八つ橋と戦闘と戦闘と（後書き）

今回は早めに投稿。

うん、頑張った。

次回戦闘モードですね。

……ん？ 展開が原作といろいろ違う？ 仕方ないじゃん、漫画読まないで記憶に頼って書いてたらこうなっちゃったんだから。俺自身、後から漫画読んで吃驚だよ。

ああ、そうそう。月華夜行はオリジナルです。俺が勝手に想像で作りましたはい。

銀炉パーティーVSフェイトパーティー（前書き）

実際の所フェイトパーティーじゃないけどね。西のお猿さんこと千草さんのパーティーなんですけどね。そこら辺気にしない感じをお願いします。

銀炉パーティーvsフェイトパーティー

エイミーが『白き雷』を乗せたパンチを繰り出すも、小太郎は簡単にそれを防ぐ。しかし、感電という形でダメージがいくのは当たり前なことだった。

（ちっ……。なんやなんや。防御ができないっちゅーことは避けるしかないんか！？）

避けるしかない。確かに避けるしかダメージが通らない術はないのかもしれない。

だが、エイミーのスピードは小太郎に勝っていた。受け止めるならまだしも、避けるのは至難の業だ。

白き雷を拳に乘せる。これは昔、銀炉が使っていた戦術でもある。銀炉の場合、雷を操る程度 of 能力使用だったが、詠唱なしの魔法としてこの世界で語り継がれてきた。エイミーは試したのだ。魔法を拳に乘せるということ。案の定、一年の研究をした後に試したところ、白き雷を乗せるというよりも、纏わせて戦うという方法を作ったのだ。

更に、エイミーの動きはきちんとした流派がある。

しらとり
白鳥流。

過去、現在、未来。恐らくその全ての中でも、これだけ幅のある流派は存在しないのかもしれない。

白鳥流は、いろいろな流派の良い所を集め、混ぜ合わせた結果と言えよう。

それに比べ、我流。それも、まだまだ無駄のある動きの目立つ小太郎。その実力差は圧倒的だった。

その正体がエイミーだと気付かぬまま、ネギは魅入っていた。その華麗な踊りとも言えるかもしれない戦闘技術に。それと同時に悔しさが濁流の様に押し寄せる。

さっきまで拳一つ入れられなかった小太郎を、少女がボコボコにしているのだ。無理もない。

しかし、流れるような拳が一瞬止まった。

（きた！ チャンスや！ 女を殴るんは趣味やないけど、ここで返さんかったらもう勝てへん！）

小太郎は、無理矢理な形で拳をエイミーの顔に入れようとしたが、一人の少女によって、また防がれる。

茶々丸だ。

銀炉から言われたこと、それがエイミーの支援だった。それも、エイミーがやられそうなときにだけ動け、と。

「ありがとうございます、茶々丸さん！」

「いえ、見てるだけと言うわけにもいきませんので」

（ちっ……。なんなんやこいつ等！ この狐の面。あの、最強集団のやつらか！？ これがやつらだったとしたら……。あかん、殺される……。！）

その最強集団という者達に関しては、後に語る暇があれば語ろうと思う。

そして小太郎は一度距離を取る。遠距離でもできる攻撃として狗神を行使しようとするが……。

エイミーの縮地に近い瞬動。小太郎は後ろを取られ、更に白き雷を纏った手刀にて、意識を手放すことになった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精 闇の精 闇を従え吹けよ常夜の氷雪 『闇の吹雪』！」
「ふん」

エヴァの魔法に対し、ほぼ無傷。それもそのはずだ。フェイトの魔法障壁は出鱈目に張り巡らされている。更に、エヴァはここ十五年、魔法をほぼ行使してこなかった。手加減をしようとすればしすぎてしまう。例えば手加減しないで撃つても、正直倒せる気がしない。だから、これは時間稼ぎだ。

銀炉がどこにいったのか、と訊かれれば既にそこにいますよとしか返せない。

ここは竹林。

極限師の、最高の舞台だ。^{ステージ}その竹林を縦横無尽に駆け回り、糸をジグザグに張り巡らせている。

エヴァの時間稼ぎが無ければ糸を仕掛けるのもままならない。それ程、フェイトは強力な者なのだ。

「僕は、真祖の吸血鬼より、あの殺人鬼と戦いたいんだけどな」
「なに、安心しろ。私は貴様とあのバカとの殺り合いの舞台を作っているに過ぎない」

「そうか。なら、早々に終わらせよう ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う毒の吐息を 『石の息吹』」

瞬間、煙が場を支配した。

石化呪文。

それを理解したエヴァは即座に戦線離脱。マントを靡かせ上へ上へと逃げる。

「銀！」

「ああ、もういいぞエヴァ。『風王風華』」

魔法で風を起こして石化の煙を散らす。

「《――投影、開始》」

その手に握る剣は、選定の剣。『勝利すべき黄金の剣』だ。
それを手に、竹林を足場にしてフェイトへと近づく。

「ふん」

「はっ」

岩と鉄が交じる。

フェイトが持つのは遂さっき見せた岩の剣。

銀炉は一度力を抜き、フェイトに弾きとばされる。そしてその剣を矢の様に射出した。

「む」

フェイトは岩の剣を盾にし、それを弾こうとする。が。

「『ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想』！」

それがフェイトの剣にぶつかった瞬間爆発した。

銀炉の狙いはその次の攻撃だ。

爆発は目くらまし。その次の瞬間の攻撃こそ、銀炉の目的。

指をくいと上げ、

終っと下げた。

銀炉が使った糸は特殊な陣を組み込ませ、魔法障壁というものを無効化させる糸だ。

終、と下げた瞬間、糸はそこら中の竹を斬りながら爆発の中心にいるフェイトを目指す。

そこら中から、ひうんひうんひうんと空気を裂く音が近づいてくる。

そして爆風にも耐えながら糸は爆発の中を通り過ぎた。

「……手応えがない？」

訝しむ様に爆発した中心を見る。

その後、糸を回収。上を見る。

「ふん！」

「ちっ」

舌打ちをしながら、空中で体を捻り、ギリギリで避ける。

フェイトが使ってきたのは、またしも岩の剣。

「なんというか、やっぱ終わりが見えねえな。なあフェイト！！」

《投影、開始》！

「む……それは……」

「テメーなら知ってるかもな、フェイト。じゃあ、その心臓、貫き受ける！ 『刺し穿つ死棘ゲイ・ボルクの槍』！」

「くっ!？」

フェイトは魔法障壁をできうる限りに展開。更に自身の心臓の前に岩の剣を置き、防御として使用する。

が、

「『刺し穿つ死棘の槍』はあらゆる物理や常識を覆し、因果を逆転した呪いの朱槍！ それ如きで、テメーの心の臓は護れねえよ!」

そう、刺し穿つ死棘の槍は因果の逆転。それを突く前に、必ず相手の心の臓に刺さるという結果を作り出す呪いの槍。その力は、本来投げ穿つ投擲武器なのだが……。使い道として対軍が突き穿つ死翔の槍。刺し穿つ死棘の槍が対人となっている。

そして、その朱槍はフェイトの障壁を穿ち、岩の剣を砕き、心の臓を突き刺した。

「ぐっ……はっ!」

「っへ。手応えあり。……だが、こんなもんで殺せるほど、テメーは優しくないらしいな」

「……っふ」

まったく。また幻覚か。

フェイトの姿は、水となり消えていった。

「おい銀。今の武器、ゲイボルクと言っていたな」

「……クーフリーンが持っていた朱槍だ。今のはレプリカだが、恐

らくオリジナルに近いくらいに完成度は高いはずだが？」

「それが貴様の『力』というわけか？」

「さあな。ほら、エヴァ。そろそろ刹那が危ないみたいだぞ。助けに行かなくちゃ」

「……後で詳しく訊くからな」

そう言って、二人は階段のある所へ戻っていった。

刹那は刹那で苦戦していた。エイミーと茶々丸は小太郎を倒した後は傍観しているだけだった。

何故、あの狐の面を付けた人は助太刀してくれないのか、不思議に思いながらも、夕風を振るう。

相手は神鳴流剣士。負ける訳にはいかない。

同じ神鳴流剣士として。

なにより、

木乃香お嬢様の護衛として！

「斬岩剣！」

「にとーれんげきざんてつせーん！」

おっとりした口調の割に合わない、早くて重い斬撃。更に、相手である月詠は二刀使い。扱い辛いながらも、鍛錬を積みめば小回りの効く、良い装備だ。

それに対し、刹那は夕風一本。しかし、最強の一本だ。なにせ、あのナギの戦友。詠春が大戦時代使っていた愛刀。

その詠春から受け継いだのだ。負ける訳には、どうしてもいかなかった。

「はあああ!」

「うふ、いいどすな。もっともつとやりまひよう、せんぱい」

更に言うと、月詠は戦闘狂だった。戦闘こそ生き甲斐。戦場こそ居場所。なにより相手が流す血、自分が流す血こそが、月詠の楽しみだった。

「はっ! しまっ」

「隙ありどすえゝせんぱゝい」

刹那は月詠の次々と来る連撃をギリギリでいなしていたが、限界が来た。

刀を弾かれ、心臓が丸出しも良い所だった。

「そこまでしてもらおうか、戦闘狂」

「邪魔せんでくれませんか? 殺人鬼」

刹那にはそれが不思議に見えた。

狐面を付けた男がそこに立っているだけ。なのに、月詠は邪魔をするなど言った。

立っているだけで、邪魔?

「そうはいかないな。フェイトが去っていった今、貴様等に勝ちは無。違うか?」

「……………勝ち負けなんてどうでもええんです。ウチがやりたいのは死合だけ。死のうが生きようが、負けようが勝とうが、ウチにはなんの関係もありまへん」

「なら、動けばいい。死んでもいいのなら、今すぐ肉片に成り果てればいい。違うか?」

刹那は未だになにが起こっているのか分からない。
混乱する頭をなんとか冷静にして、月詠を見る。

そこで初めて気づく。月詠を束縛している、糸に。

「ちゃいますよ？　ウチが言うとするんは死合い。自殺とはちゃいますもん」

「なるほど、故意的に死ぬ気は更々ない様だな。なら、俺が殺してやるよ」

狐面の男はそのまま糸を――

「月詠さん、退くよ。本当に今死んでしまったら、計画に支障が出るからね」

振り下ろせなかった。

狐面と零距离で立つのは、さっきまでアスナが相手をしていた白髪の少年。

見ると、振り下ろされる筈の手は、フェイトの手によって抑えられていた。

「え〜〜。まあ、フェイトはんがそう言うんなら仕方ありまへんな。……次は、あんたとも死合いたいわ、殺人鬼」

「……次がないことを願うよ、戦闘狂。お前とは、まだまだ殺り合いたいけどな、欠陥人形」

「っふ、そうだね。まあ、君がそのネギ・スプリングフィールドの味方をするのなら、どうせすぐ殺り合えると思うけど……」

そう言って、フェイトと月詠は水のゲートを使い消えていった。

銀炉パーティーvsフェイトパーティー（後書き）

はい、どうも。がんばりました。三日連続での投稿。頑張ったどころ！

もうすぐ夏休み終わっちゃうからね……。

あ、白鳥流は一応オリジナルな方向で。

そういえばお気に入り数が100超えました！

お気に入りしてくださった方、本当にありがとうございます。

それにしても、どうも戦闘シーンがあっさり終わってしまっている気がする。

誰か戦闘シーンのアドバイスとかくれませんか？

あとついでに感想とかくれませんか？

いや、ホントお待ちしてるんで、お願いします。

驚愕と過去と覚悟と

（銀炉Side）

あの後、狐面を付けた俺達が誰なのか、ネギ達は分からない様だったのでネタばらしした。

当然、驚かれたけど。

てかそれ以前に、なんで狐面なんか付けてんの？ という話になった。今回は雰囲気を大事にな思考が働いたからとしか言いようがない。

坊主だけ、なにかを考える様な顔をしていたが。まさか、な。坊主が『裏会』たる者たちのことを知っている筈がないし。

「おい銀。あれはなんだ？」

「ん？」

ちなみに、今はあの罫をフェイトに解いてもらい、そのまま総本山へ出向いてるところだ。

坊主たちはどうも罫に気付かずずっと走っていたらしく、疲労はピークに達している。

てか刹那、お前は気付けよ。

そしてエヴァに指摘された方から、なにやら騒がしいものが近づいてくるのに気付いた。

見ると、階段を上ってきている3-Aの一部の面々が目に入った。いや、なんでさ。

「……なんだろうね、アレ」

「現実を見たくないといった感じだな？ 銀炉」

「当たり前だろ！　なんだあれ！　なんでここばれてーるの！？」
「落ち着いてください銀さん。なんかキャラが崩壊してます」

そりゃキャラも崩壊するよ！　逆になんでエイミーは冷静にあれを見てられる！

なにあれ！？

なにがどうなってどうしてこうなった！？

俺の目に映った3-Aの一部のクラスメイト。

何故か宮崎のどか。綾瀬夕映。朝倉和美。早乙女ハルナ。近衛木乃香。

早乙女以外は魔法に関係が濃い面々だった。

宮崎はネギと、夕映は俺と仮契約してるわけだし。朝倉和美は魔法を知っている。木乃香に限って言えば、あの詠春の娘だ。早乙女が場違いすぎる。

「……解^{バラバラ}々にしてやっていいか？　アレ」

「落ち着け、ストレスが貯まるのも分からんでは無いがまず落ち着け」

俺のともでも発言に汗を掻いているエヴァに突っ込まれる。

そしてそのことにやっと気付いた坊主は、あたふた。というか、みんながみんなあたふた状態。

そしてあたふたしてる間にも、早乙女たちは俺達のいる所まで着々と近づいてきている。向こうも既にこちらに気付いているのだろう。朝倉……あのブン屋がなにかニヤニヤしている。

夕映は俺を見た瞬間に顔を赤くしながら目線を逸らした。そりゃあ、不可抗力ではいえ……いや、不可抗力だったからこそキスをした羞恥心と言うものがあるのだろう。宮崎は宮崎で坊主を見た瞬

間に顔を背けた。坊主も同じく。

「やほーアスナー」

「あ、アンタ達、なんでここに……」

「んー、それがね。朝倉が刹那さんの鞆の中にGPS機能付きの携帯を忍ばせていたからなのであーる」

早乙女が何故か自慢げに話す。二本のアホ毛……というか触角を揺らしながら。

「せーっくなく？」

「ひっ！？ い、いや銀炉様！？ そんな幽鬼の如く目で見るのは止めてください！」

「そ、そうよ銀兄。怒るならそこにいる朝倉でしょ？」

「それはそうだがなあ……はあ、なんというか、疲れた」

実のところを言うと、疲れたというより呆れた。

あのブン屋、魔法が命関わるってことを未だに理解しちやいねえ。

「兄様？」

木乃香がなにやら心配そうに俺の名を呼ぶが、踵を返す。

「俺は先に行く。詠春に頼んで寢床を用意してもらおう。さっさと寝たい」

「あ、待て銀！ 私も行くぞ！」

「勿論私もです」

「無論私もです」

なんだろう。本当にエヴァ・茶々丸・エイミー・俺というパーテ

イーが完成している気がするぞ。

「久しいですね、銀炉」

「ああ、そうだな。……タカミチの時も思ったが、なんというか、老けたな」

「はは、お互い、歳を取りました。貴方は、まだ若い容姿ですけど……。それにしても、まさかエヴァンジェリンの呪いを解呪して来るとは……。驚きましたよ」

「驚くこともないだろう。あいつの呪いの約束は元々三年だった。しかしナギは解呪をしにくることもなく、結局エヴァは約束の五倍の時をあの麻帆良に縛られていたんだからな」

「ええ、まあ、それもそうなんですけど……。まさか、あのナギが力任せにかけた呪いを解いてくるとは思いもしないでしょう……。？」
「まあな」

俺は今、詠春と一対一での会話中だ。詠春はなんというか……。大人しくなった？

いや、元よりドンチャン騒ぐような性格ではなかったのだが、より一層その大人しさに磨きがかかった気がする。

「……いいな、こういう庭を持てるというのは」

俺が言う庭、というのはこの部屋から見ることでできる純和風な庭のことだ。

「おや、銀炉はお金にはそれ程困っていないのではないですか？
京都に一つ、別荘を作ってみては？」

「いや、いい。金は全部あの隙間ババアに没収された。それに、幻想郷に戻ればああいう庭がある屋敷が、冥界にあるからな」

「そうですか。冥界？ まあ、気になりますけど、良しとしましょう。紫さんも、元気そうですね。なによりです。それより、あなたの言うことが本当ならそろそろ木乃香も戻る頃ですかね？」

「ああ、そうだな。そろそろ出迎えてやれ。俺は少し寝る」

「では私の部屋をお使いください。布団の場所は……」

「大丈夫だ。どうせ襖の中だろ」

「ええ。では、おやすみなさい」

そうして俺と詠春は部屋を出ていき、俺は就寝することにした。

＼エヴァ Side＼

銀が詠春と話をすると行ってからかなり時間が経った。

廊下を歩いていると詠春が歩いているのが見えたから、恐らく銀はすでに寝てしまったのだろう。

案の定、詠春に訊いたら、銀は寝てしまったらしい。

元より、あいつのストレス発散法は『寝る』だ。寝れば全てを忘れられるし、なにより夢を見ることができるといふことだそうだ。まあ、人間でなくなった、私や銀の様な長寿の生き物の特権だな。いつまで寝ても歳を取らないというのは。

詠春の話に因れば、銀は詠春の自室で寝ているとのこと。

銀の寝顔を久しぶりに拝むというのも良いかもしれない。ログハウスでは銀の寝ている姿は見ても寝顔をじっくり見る様な醜態を晒すわけにはいかなかったからな。

エイミーと茶々丸は、今現在あの馬鹿共（2-A）と一緒に飲ん

だり食ったり騒いだりでもしているだろうし。銀の寝顔を一人占めできる唯一の時間だ♪

「銀ー、入るぞ？」

小声で一応許可的なものを取りながら部屋の扉を開ける。扉と言
うか、襖と言うか。和風な部屋の出入り口は、なんとも表現し難い
ものだ。

「むう……。コイツの事だから、気配とかでばれると思ったが……
案外起きないものだな」

それほど、ぼーやのことでストレスを感じているのだろうか？
私がストレスの原因、なんてことはないよな？ あ、やばい。な
んかありそうで怖い……。

銀の顔を覗きこむ。外見相応の子供らしい寝顔だ。母性本能と言
うものをくすぐられて、ちょっとこそばゆい。それと同時に、別の
感情も出てくる。

なんといえはいいのだろうか……。分からないが、恐らく、アレ
だ。……甘えたい。

銀は昔、裏会で私を預かってくれた時、良く言っていた。精神は
肉体の影響を受ける、と。

私の場合、それに抗いたくて、その頃からこんな風に強がるよう
に生きてきた。だけど、やはり体は十歳なのだろう。だから、ちょ
っただけ……、

「ちよっただけ、一緒に寝ても良いよな？」

はっ!？

思わず口に出してしまった……。だがまあ、銀はどうせ寝てるんだろうし……。大丈夫だろ。

布団を持ち上げ、体を滑り込ませる。

むう……。顔が近い……。それに銀、少し汗臭いな。風呂に入ってから寝ればいいものを……。それにしても顔、近すぎないか？ 銀の寝息と私の息が交わるくらいに近い。

いや、私から離れればいいだけの話なのだが……。そう思考するだけで行動に移せない自分がいる。

それにしても、これだけ近くで顔を見ると銀の意外性が見えてくるというものだ。

ていうか、顔が女っぽくないか？ いや、線が細いだけか。顔も整っているし。

女っぽいというより美少年なのだろう。銀に美少年なんて言葉。似合わないすぎるけど。

——ガサガサ。

「ええ！？　ち、ちょ！　ぎ、銀！　幾らなんでも……」

抱きつくのは、どうかと……。

いや、待つんだ私。銀は寝ている。そう寝ているんだ。そうだ、寝ている。

それにこれは銀から抱きついてきたんだ。

久しぶりのこの温もりに抱かれるのも、悪くはないだろう。

（銀炉Side）

いや、さすがに驚いたな。エヴァが自分から一緒に寝てもいいか、なんて言ってくるんだもんなあ。寝た振りして過ごしたけど。しかし、エヴァとこうして寝るのも、あの時以来か……。

《裏会》。ナギとは言うまでもなく仲間だったが、そのナギパーティー以外でも、俺はある組織に入ったのだ。そこは《十五夜》とも呼ばれている組織。十五番隊まで存在する裏の裏の組織。

俺は今、その三番隊隊長だったりする。裏会の知名度と言えば、裏の裏まで関わった人であれば知らぬ人はいないくらいだ。逆に、ちょっとした裏までしか関わっていない者はその実態を知らない。

裏会とは簡単に言えば殺し屋だ。

組織だからな。ルールというものがあつた。

一つ、殺しは自由だが、仲間の誇りは殺すな。

二つ、いろいろな危険を伴う商売などに関わる場合、総隊長に連絡し、許可を取れ。

三つ、仲間を裏切るな。

これだけだ。後は基本的に自由。仲間を裏切ったものは、生きることが許されない。

つまり、来る者拒まず出る者殺す、ということだ。

隊長格は皆基本的に長寿の生き物だ。隊長になる資格の一つでもある。

そこで、一度だけエヴァを引き取ったのだ。ナギが、崖から落ちていったエヴァをギリギリで助け、俺がそれを引き取ったという形になったのだ。

ある意味、裏会は都合の良い場所だった。なんせ、真祖の吸血鬼

が十人以上もいるんだ。エヴァも、そこでの生活はなかなか楽しんでいたらしいな。

だが結局、エヴァは自分から出ていくと言った。理由を訊けば、「私は迷惑を掛けるばかりだ……。だから、出ていく。できれば、銀も一緒に来てほしい」。そう言った。

裏切るというよりも、仲間のことを思っただけの行動。総隊長はそれを尊重してあげると言った。だが、俺と一緒にいくことは許されなかった。

当時、俺は十番隊の副隊長。とても期待されていたらしい。ナギと仲間だったことも大きかったしな。

それでも食い下がったエヴァだったが、結果は変えられず。

組織の拠点である《会場》は、総隊長の気まぐれで場所を転々とする。

時には海に浮かぶ小さな島。時には大草原。ヤバイ時には海中のときまであった。転移することではしか出れねーじゃん！ という多くの意見により早々に他の場所へ移動したのだが。

つまり、エヴァは一度ここを出ると、こちらのことを探れない。当時は森の中だったが、一度出れば、そこに戻っても会場はなくなっている可能性があるということだ。

時折、任務中にエヴァに会うことがあった。だが、任務が終わると同時にエヴァとはすぐに別れた。どうせ別れるなら、早々に別れた方が良く、そう思えたから。

今思えば、総隊長に『ルール以外は基本的自由なんだからエヴァについていてもいいですかー？』と言えば済んだ問題だったのだが。

ナギがエヴァを封印した、なんて言った時にはビビったよ。すぐ極東の島国まで足を運んだからな。

その時初めてエヴァの制服姿を見た訳だが……それがあまりに似合いすぎてナギは大爆笑。俺も思わず微笑んでしまった。

三つのルール意外には基本自由な裏会だったおかげか。エヴァと数日、過ごした。この学園に慣れるまで、という感じだったな。

それからは裏会に数十年間休みますなんて言ってから旧世界に飛び立った。タカミチと、アスナと共に。

アスナを麻帆良に通わせると決めていたタカミチはすぐに麻帆良へ行った。当時まだ六歳。一年生だ。

詠春にお願いして、木乃香と刹那もこちらに通わせるようにした。アスナに早く友達ができるように、ってね。手始めに二人と友達になれっていう意味だった。

こちらの目論見通り、三人はすぐ仲良くなった。いいんちよ、と呼んでいる女の子と喧嘩して帰ってくることも多かったけど……。そして三年になる頃、タカミチに一言伝えただけで、アスナ達に別れを言うこともせず、幻想郷に帰ったというわけだ。

さて、と。エヴァは完全に寝てしまったらしいし……どうしたものか。

そうだ。夕映と宮崎……あの二人には、いろいろ確認を取らないとな。

エヴァが起きない様にゆっくり布団から出て、気配を辿って皆がいるところを目指した。

気配なんか辿らなくても普通に皆がいる場所が分かった。だって、騒がしいし。

どこの宴会だ。

障子を開ける。

騒がしかった部屋が、何故か静まった。

「え、なに？」

「むふー、銀炉君。いやー、君もやっぱり男の子だったんだね！」

「なんの話だ、早乙女」

「なについてそりゃないよー。誤魔化しはノンノンだよ？ 銀炉君？」

「お前は調子に乗るなブン屋。で？ 俺が誤魔化したって、なにを？」

「エヴァちゃんのこと、だよ？」

……ああ、そういうことか。

まったく……。中学生男子はそういう思考が多いとは聞くが……
女子も、それは変わらないのだな。

「なにを勘違いしているのかは知らぬが花だ。敢えて聞かん。だが
な、エヴァとは何もししていない。それだけははっきり言えることだ」
「ちえっ。つまんないのー」

なにがつまらないのか、俺には理解出来ん。

「夕映、宮崎。少し来い。それから、早乙女もだ」

「ふえ……？」

「は、はいです」

「ん？ 私も？」

「それとネギ坊主もだ。……早乙女は、ちょっとした覚悟を持って
来い」

「へ？」

呆氣に取られた顔の早乙女を置いて、俺はさっさと歩きだした。

宮崎、坊主、早乙女、夕映を連れてきたのは詠春の部屋。

エヴァはまだ寝ている。なんとも可愛らしい寝顔だ。

「さて、ネギ坊主と宮崎、夕映は大体予想ついてるだろうな？」

「……はい。ですけど銀炉さん、ハルナさんは……」

「早乙女は宮崎と夕映の親友だ。いつかばれるより、ばらして注意を促した方が効率的。そう思わないか？ 坊主」

ううむ、とネギ坊主は考え込んでしまう。

「なになに、なんの話？」

早乙女は困惑顔。まあ、そりゃそうだろうなあ。

「早乙女、宮崎、夕映。魔法って信じるか？」

「……魔法……。存在するの？ 魔法が？ そりゃあ、確かに魔法があるなら良いけど……信じられるかどうかで言えば答えはNOだね」

「私もそう思うです」

「わ、私も……」

「……そうか。まあ、それが普通の反応だな。夕映、あの下等小動物からカード貰わなかったか？」

「やいやい！ 誰が下等小動物だ！」

「わあ！？ ネ、ネギ君のオコジョが、喋った……？」

「あ……」 「ダメじゃないかカモ君！」

今更注意しても遅いだろう。

「え、えっと。カードってこれのことですか？」

そう言いながら、制服の内ポケットの中からカードを取りだす夕映。

そこには一冊の分厚い本を持ち、制服の上に黒の外套を着て、魔女っ子の様な帽子を付けている夕映の姿が描かれていた。

「アデアット《来れ》って言ってみろ」

「アデアットア、来れ」

「おお!？」

下等小動物が驚く声を上げる。

カードに描かれた通り——黒い外套に一冊の本、魔女っ子帽子——の姿になった夕映が、そこにいた。

なかなか可愛らしい姿である。

「こ、これは……」

「それが一種の魔法だな。仮契約した時に与えられるマジックアイテムというわけだ。どうやって使うかは、追々調べるとしよう。さて、早乙女、宮崎、夕映。これで信じられたかな? 魔法の存在」

早乙女の方を見ると、興味津津と言った表情で頷いていた。

「うん、これを見て信じるなって言う方が無理だよ……。それにしても……夕映、のどか。君達はこんな美味しい話をいつから?」

「い、今知ったです」

「ほんとに?」

「ほ、本当です!」

「夕映の言ってることは本当だ。さて、本題だ。宮崎はネギ坊主と話合ってもらおう」

「話合う、ですか？」

「そうだ。魔法に関わるか、否か。自分で決めろ」

そして俺は夕映と早乙女の手を取り、少々強引に部屋から出た。

（Side Out　ネギと宮崎のいる部屋）

「えっと、のどかさん。まずお伝えしなくてはいけないことは、魔法には危険があるということです。僕も銀炉さんに教えられるまで気付きませんでした。魔法は、人を殺せる、ということを」

ネギが言ったことに、のどかは静かに息を飲む。

それもそうだ。

ネギが言ったことは全て事実なのだ。

魔法は人を殺せる。

「のどかさんは、どうしたいですか？」

「き、急にそんなこと言われましても……」

「ですよね……。僕から言わせてもらうと、魔法こじちに来ることはおススメしません。銀炉さんが言っていました。『殺す覚悟も殺される覚悟もないやつは、来てはいけない世界』だと」

殺すことができれば、魔法に関わることはできない。そう言うっても過言ではないだろう。

「先生は、そんな世界にいるんですね……」

「ええ、そうです。だけど、僕は殺す覚悟も、殺される覚悟も、ありません……。でも、僕は魔法から逃げることは、恐らくできません。父さんを探すことが、僕の生きる理由ですから」

「……私は、良いと思います。殺す覚悟とか、殺される覚悟とか……難しくって分からないけど……。先生には、殺す覚悟がなくても良いと思います。そんな先生が、私は大好きなんです」

ネギはその発言に思わず顔を紅潮させる。それは宮崎も同じで、「あわわ」といいながら顔を俯かせる。

……知ってる人は知ってると思うが、宮崎は先日、ネギに告白したのだ。

その際、ネギはお友達からと言う答えを出した。まあ、十歳の子供なのだから、それが当たり前なのだけれど。

「そ、それじゃあ、のどかさんは……」

「はい。先生についていきます」

こうして、宮崎のどかは魔法に関わる覚悟を決めた。

＼庭の見える廊下＼

「まず確認を取りたい。お前らに魔法に関わる気はあるのか？」

「あるよ」

「お、同じくです」

あまりの即答に、銀炉は頭を抱えなくなった。

「そうか。ああ、まあいい。良いとも。だがな、魔法がなんなのか、

きちんと理解してほしい。理解できないのならば、早々にこちらから強制退場させて貰うからな」

「魔法が、なんなのか、ですか？」

「そうだ。魔法というものがなんなのか。……多分、お前らが思ってる魔法は夢と不思議、希望が溢れるファンタシーなものだと思う」

それに迷いなく頷く二人。

「だがな、実際は全然違う。もっと殺伐としていて、命を失う可能性だってある」

「命って……ホントなの？」

「ああ、本当だ。例えば、火」

そう言って、銀炉は指に炎を点らせる。

ちなみに銀炉の魔法発動媒体は指輪だ。

「この火をお前らの服に付けたら、火傷を負うな？　じゃあ、もし魔法によってその体が炎に包まれたら、どうなる？」

「……………」

「……………」

「分かったか？　魔法は命に関わる。無論、魔法に関わらなくても良い。その場合は、記憶を上書きして魔法のことを忘れてもらう」

記憶を上書き。

要するに、

記憶を消す。

「私は、それでも魔法に関わりたいです」

「……ふう、夕映がそう言うんじゃ、親友である私も関わらないわけにはいかないな」

「……分かっているんだな？」

「覚悟はできてるです。私は、ただ……」

そこで言葉を詰まらせる夕映。

この言葉を繋げるならば「私は、ただ銀炉さんと一緒にいたいのです」だ。つまり、夕映は銀炉のことを……。

「分かった。まあ、魔法から身を引きたいならいつでも言え。今のお前なら、簡単に身を引けるからな」

そう言って、銀炉はエヴァの寝ている詠春の自室へ戻っていった。

（銀炉Side）

結局関わるんだな。

まあ、予想はしていたさ。

部屋に戻ると、そこには寝ているエヴァだけがいた。坊主と宮崎はもう戻ったみたいだな。

さて、なんか汗臭いから風呂にでも入ってこようかね。

驚愕と過去と覚悟と（後書き）

今回無理矢理に設定を組み込ませた結果がこれだよ！

これ、その内矛盾が発生するね。既に矛盾してる可能性あるね。まあ、矛盾なんてなんぼのもんじゃない！

それより脱字誤字タイピングミスのが怖いです。

それと裏会と某結界漫画の裏会は一切関係ありません、マジで。

つつーわけで、感想お待ちしております。

今思っただけど、2－Aじゃなくて3－Aじゃん。ということで訂正しました。

裏会にいる吸血鬼人数、訂正しました。

おまけとうかなんというか（前書き）

おまけ的な感じで本編とはまったく関係ない話になる予定です。
ていうか俺の頭がぶっ壊れた結果です（笑）。

おまけとうかなんというか

覚悟の確認を終えた俺は、今風呂に入っている。近衛家の風呂は本当に広い。

正直、驚いた。

いやはや、今日はいろいろあったからな。広い風呂に入ると、どこか開放的でストレスもどこかに消え去ると言うものだ。

そんなときだった。悪魔が来たのは。

ガラガラガラと音を立て戸が開いた。そこにいたのは……。

「エ、エヴァ……!？」

「な!？　ぎ、銀……」

……なんでさ……。

エヴァはまあ、言っちゃえば裸だったからか、そのままゆっくり戸を閉めていった。

帰ったのかと思ったが……どうやらタオルを装着したらしい。また戸を開けて、今度こそ大浴場とも言えるだろう広い風呂の中に入ってきた。

ついでに言う俺の分のタオルも持ってきて入ってきた。

「はあ……なんというか……」

「な、なんだその顔は。お前が風呂に入っていたのが悪いのではないか!」

んな滅茶苦茶な……。

「そっちこそ、俺の服とか置いてあるのに気付け！」

「なに？ 私の方が悪いと言うのか！？」

当たり前だバーカ。

「ふ、ふふ。良いだろう。ああいいとも。ふふ、そんなに顔を赤くして。十歳の体である私に欲情でもしたか？ 淫乱妖怪」

「うっせ！ ロリババアの裸なんざ見たってなんとも思わん！」

断固として！

「誰がロリババアだ！」

「あだだだだだ！！ 痛てーよ！ てかこんな状況で嘔むな！
体の密着度を考えろ！」

「なんだ、やっぱり欲情しているのではないか」

「違う！ 断じて欲情はしていない！ お前なんかに欲情したりしたら俺はアレだ、思春期変態淫乱ロリコン妖怪に成り下がっちゃう」
「もう十分その位にまで成り下がっていると思うが？」

なにを言うか。そんなことは絶対にないぞ。

というか、最近エヴァが積極的な気がするぞ。昔はあんなに素直で可愛かったのになあ……。

今だって背中から抱きついて来てる形だし。

「今何か失礼なことを考えてなかったか？」

「考えてない考えてない。てかお前、寝てたんじゃねえのかよ」

「起きたらお前がいなかったから……」

「あーはいはい、寂しかったんだね。うんごめんよー、一人にして」

後ろから抱きついてきているエヴァを引き剥がし、頭を撫でる。

「なっ……!?!」

反論が来るかと思ったが、逆にエヴァは言葉を失ったらしい。

そりゃあ、一応年下の俺にこんなことされれば言葉も失うだろうけどさ……。

「はあ、まったく……。大人しくしてれば外見相応で可愛いものになあ」

「どういう意味だ、どういう! ツ、ひゃう……」

「なんだ、ちゃんと可愛い声で鳴けるじゃん」

「き、貴様……! うひゃ!?!」

俺がなにをしてるのかと言えば、まあ、「舐めてる」だな。

人の肌というのはなかなか美味なものだ。人間感覚で言う、飴だな。

しかも舐めてる場所が首。吸血鬼でもない俺が首を狙う。それ即ち、その首を食い干切るということだ。

まあ、エヴァ相手にそんなことしないけど。

肌に舌を這わせた瞬間にエヴァの体がびくんと反応する。

「かはは、皆に恐れられた真祖の吸血鬼が、こんな無様でいいのか?」

「な!?! んあっ……。お、お前……後でその血、吸い尽して……ッ!」

「これはこれで、傑作だな」

「ひゃう……んッ、はぁ……はぁ……」

エヴァの息が荒くなってきた。

ありやりや、この雰囲気は……。その気になっちまったか？ エヴァ。

エヴァは上目遣いでこちらを見てくる。ああ、こりゃその気になっちまってるな。完璧に。

俺はエヴァの頬を撫でながら、唇へ――。

そして、唇から舌したへと……。

風呂の中だというのに、唾液と唾液が交わる音が良く聞こえる。

ああ、もういいや。理性よ、さらば。

……と、行きたいところだったんだけどなあ。

「んふ……んんっ……あふ……んん！」

最後にエヴァの口内を強く刺激し、唇を離す。

「……ん。エヴァ、ここまでだな」

「な、何故だ！」

「耳を澄ませれば分かるよ」

「……ちっ。邪魔が入ったか」

「そういうこと。まあ、続きはまた後でだ」

ちなみに邪魔、というのは刹那とアスナがこの大浴場に来たということだ。

いやー危なかった。

あのまま続いて本番まで行ったら多分気付けなかったと思うし。

「転移して部屋にいくか？」

「馬鹿者、お前は裸で部屋に行くつもりか？」

「ああ、そっか。じゃあ、あそこの岩に隠れて、二人が入ってきたら転移して着替えるか」

「……まあ、それしかないだろうな」

と言うわけで岩の後ろに隠れ待機。二人が入ってくるのを待つ。しかし、良い気分じゃないな。妹分である二人の入浴を覗き見してるみたいで。

それから数秒後、アスナと刹那が入ってきたのを確認してから転移をし、着替えをする。

「おい、なんでそんな服なんだ……」

「いいではないか、私の趣味に文句があるか？」

ゴスロリ。

ないわー。似合ってる。いや、いつも通りの姿なのだが……。

ロリって言葉が入ってる服装が趣味って、それは自分がロリっ娘なことを認めて「誰がロリババアだ！」

「あだだだだ！！ 誰もババアなんて言っただねえよ！！ 噛むな！」

……なんだか、休まる時間が無いなあ。

固有結界

あれから寝ていた俺だが、いつになく騒がしかった筈の部屋がいきなり静かになったのを不審に思い、エヴァを一人残し、アスナ達がいるはずの部屋を見に行った。

「……フェイトの仕業、なんだろうな」

そこには石化されたハルナたちがいた。
やれやれ……ん？

「夕映がない……？」

フェイトが逃がした？　だが逃がす理由が分からない。なら、自主的に逃げたのか。それとも便所に行ったりして運よく助かったか。そのどれかだろうな。

それから廊下などを見に行ったが……。

「やはり、老いたな詠春。え？　どうしたんだよサムライマスター。油断したのか？」

最早石と成り果てた詠春を見て、言う。

過去の大戦を勝ち抜いた強者がこれでいいのか？

まあ、フェイトがいつの間にか結界を抜けて襲撃したというわけか……。

「(ぎ、銀炉さん！ 聞こえるですか！？ 聞こえるなら返事をしてくださいです！)」

これは……夕映？ だが、どうやって……。ああ、パクティオーカードか。

しかしカードによる念話の使用方法などはアイツに教えていない。近くに坊主か下等小動物がいると考えていいな。

「(ああ、聞こえるよ。どうした？ なにがあった)」

「(そ、それが……部屋に急に白髪の少年が来て、朝倉さんが私を逃がしてくれたのですが……)」

そうだったのか。

むう、意外と予想が外れたな……。ま、いいか。フェイトが来たって辺りは当たってるし。

「(それですね、増援を願いたい、とネギ先生が……)」

「(増援、ねえ……。坊主からの願いだというのなら、それは無理だな)」

「(な、何故ですか！？)」

「(学園長に知らしめるためだよ。アイツ、お前らのことをネギの教育機関にするためにこのクラスを編成したんだよ。なら、坊主は一度負ける必要があるのさ。そういうもんだろ？ 強さを知るにはまず負けろってな。ここで坊主が一度大怪我したりすれば、学園長もいろいろ考え直すと思うしな)」

「(…………)」

「(だけど、お前からのお願いだって言うなら受けてやっていいぜ？)」

「(え？)」

「（お前は俺の可愛い可愛い従者さんだからな）」

「（な！？ か、かわ……っ！？ そ、そんなこと言ってる場合じゃないです！ ……では、私からのお願いです。今アスナさんと刹那さんが数知らない鬼たちと戦ってるらしいので、そちらへ向かってほしいです）」

「（オーケイ。分かったよ。……死ぬことだけは絶対にないようにな）」

「（ええ、分かってるです。では、お願いします）」

……まあ、そういうわけだ。鬼が召喚されたのなら、その魔力を辿ればアスナ達のところに辿りつけるわけか。

しかし、アスナと刹那がねえ……。妹がピンチなのに、なにが坊主の教育のためだよ……。いやになる。

ああまったく、めんどくさい。

（刹那Side）

「はあああ！」

また一体、鬼を斬り還す。

だが周りを見るとまだまだ鬼はいる。気の遠くなる話だと思う。アスナさんの持つハリセンは何故か鬼を一撃で還す力を持っているし……動きも良い。本当、何者なのか問いたいところだ。

「私たち、結構良いコンビじゃない？」

「ええ、そうですね」

アスナさんと背中を合わせ、周りの鬼達と対峙する。

「刹那さん、帰ったら剣道教えてよ」

「え！？　で、ですが……私もまだ未熟なので……」

いきなり剣道を教えてなんて言われても……。

そんな会話をしてる時だった。

鬼が一斉に攻めてきた。四方八方から、上からは烏族が攻めてきている。

ダメだ。一体ずつ切ってもこの量じゃ間に合わない……！

そう思い、目を閉じた。だが、いつまで経っても痛みがこない。

代わりに、呟く様な小さな声と共に一瞬だけ閉じた瞳に光が差し込んだ。

目を開けて、そこに現れた信じられない者を、私は凝視した。

「ふう、間に合ったな……。よ、刹那。アスナ。遅れて悪かったな」

そこには、黄金の剣を両手に持った銀炉様がいた。

（銀炉Side）

鬼達が一点の場所を目指し一斉に動き出した。そこには刹那とアスナがいる。

「《――投影、開始》」

右手に『^{エクスカリバー}約束された勝利の剣』。保険として、左手に『^{カリ}勝利すべき黄金の剣』を投影し、刹那とアスナの場所へ、鬼達の中心へと、飛び降りた。

そして約束された勝利の剣を構え、

「『^{エクスカリバー}約束された勝利の剣』」

真名解放。自分の腕力を頼りに、振り回す。

勿論、アスナや刹那には当たらない様に気を付けながら。

「ふう、間に合ったな……。よ、刹那。アスナ。遅れて悪かったな」

驚愕に顔を染める刹那とアスナに軽く挨拶してから辺りを見渡す。
結果的に言うのと、やりすぎたか？

辺り一面なにもなくなった。マジで。

奥の方に上位の鬼がいるが……。それもたったの数体だった。

「な、なんや！？ 化け物がおるぞ！！」

「わしらがおかしいなと言うんもおかしいやろ。……と言いたい所だが、確かにこれは化け物やな……」

まあ、実際妖怪ですし。

「さて、こんばんわ。……早速だが、殺される覚悟はできてるか？
泣いて地に伏せ命乞いをする準備は？ ならば鬼ごっこの始まりだ。鬼はお前らで俺も鬼。さあワルツを踊ろう」

ううむ、決めてみたのは良いものの、セリフがおかしいな。

なんだ、鬼はお前らで俺も鬼って。追いかけるヤツばっかで追いかけられるやついねーじゃん！

いや、まあ、いいんだけどさ。

そんなことを考えている、正にその時だった。

「壮観、だな。こりゃ……」

どこからか光の柱が現れた。神々しいという表現が最も合う。そこに姿を現したのは……。

飛驒の大鬼神。リョウメンスクナノカミ。とんでもない巨体に二つの頭、四本の腕を持つ大鬼神。

確か、過去に封印が解かれたことがあったらしい。その時はナギを含めた紅き翼メンバーでやっと再封印できたと言う代物だそうだと。と言っても、ナギが一人で暴れただけだろうけれど。

「（エヴァ、起きてるか？）」

「（……お前、どこにいるんだ。せめて私に一言声を掛けてだな……）」

「（そう拗ねるなよ、姫。今さ、飛驒の大鬼神が復活しちゃったんだよね。俺が雑魚鬼達を片付けてる間に坊主たちを守ってくれねえかな？）」

「（嫌だ、めんどい）」

「（言ったはずだぜ？俺の切り札の一つ、見せてやろうと思ってるってさ）」

「（っは、良いだろう。それなら良い。……そんなこと言って、つまらん切り札だったらとことん血を吸ってやるからな）」

「（ああ、なら、期待に応えられるように頑張るとするよ）」

そこで念話を切った。

「さて、舞台は飛驒の鬼神復活の地。奏でる曲は糸の切り裂く音。さあ、踊ろうぜ。鬼共」

剣を霧散させ、狐の面を投影、顔に付ける。

瞬間、俺は殺人鬼にならなくてはいけない。ある意味、裏会のルールだ。

狐の集団とも呼ばれちゃってるからね。狐の面を付ける時こそが本気。

そして、俺は幾つもの糸を指に装着。

そして俺は指揮者の様に指をくいと上げて、
終っと下げた。

それだけで、一体の鬼を残して全ての鬼と烏族を還した。肢体を千切られた上、首を刎ねて尚生きられる生き物なんているはずがない。

そして、全ての糸を一体のリーダー格だと思われる鬼の体に縛りつけた。

「……まったく、ほんまもんの化け物やな、兄ちゃん。楽しむ間もなく殺されてしまうたわ。まあ、次に合う時には酒でも飲もう」

「ああ、そうだな。その時には、とっておきの酒を持ってきてやるよ。じゃあ、暫し眠れ」

手を大袈裟に振るうと同時に、鬼は体を崩した。そう、腕も足も手も膝も腰も腹も首も。^{バラバラ}解々になった。

あの後、刹那とアスナはパクティオーカードの力で転移していた。

俺も影を使って転移。したのは良い。ああ、いいとも。

……なんでアスナは上半身裸なんだ？

まあ、理由を聞こうとしたら睨まれたから、聞かなかったが。

「……坊主、その手は大丈夫なのか？」

坊主の手は石化されている。何故なのか、と問えば帰ってくる答えはフェイトにやられた、なのだろう。だからここでの問いは安否の確認だけだ。

「はい、大丈夫です」

「そうか、ならしい」

ああ、いいとも。

だが、エヴァ、やりすぎた。

「ふははは！ どうだ！ これが私の力だ！！」

「それにしてもノリノリねえ、エヴァちゃん……」

アスナの言うとおり、ノリノリだった。恐らく、ネギに負けた（？）のが本当に悔しかったのだろう。ここで力の差を見せつけておきたかったんだろうな。

だからって、リョウメンスクナノカミを氷漬けにするなんて……。これが、真祖の吸血鬼の力か。裏会のやつらを彷彿させる……。

裏会の真祖と言えば、二番隊の隊長。アレはおかしい。真祖は死なない。ああ、死なないとも。だが、傷はつく。つくはずなんだ。

だと言うのに……。彼は三つのミニガンを相手に、そこに平然と立てるのだ。傷がつかない。硬い肉体。外見は可愛い子供。エヴァ

みたいだが、彼はすでに千年の時を過ごしている。だからって、ミニガンを喰らい続けて平然と、シニカルな笑みを張り付けて立っていられる真祖は彼だけだろう。

更に言えば、十一番隊の隊長。アレはアレでおかしい。鋭く飛び回り、優しく……だけでも確実にダメージを与えていく（彼女曰く、蜂の様に舞い蝶の様に刺す）。

じわじわといじめていくのが大好きなサド女なのだ。

閑話休題。

兎も角、このままでは俺の出番がなくなるなあ……。

「おい、エヴァ。そのままにしといてくれよ、その鬼」

「……なんだ、来ていたのか。そうだな、お前の切り札を見るのにこのまま殺してしまつては元も子もない」

そう言ったエヴァは氷を崩すこともなく、ただそこに浮いていた。周りを見渡すと、上空で俺等を見ているフェイト。森の中を走ってきていたのか、息を荒くした夕映がいた。そしてスクナの肩部分に、猿女こと天ヶ崎千草と木乃香がいた。

「さあてと……、まずはお疲れ、夕映」

「い、いえ。来てくださってありがとうございます」

息も絶え絶えに礼を述べる夕映に笑顔で答える。

そして、

「おい刹那。木乃香を守るんだろう。俺の力は、このままだと木乃香を傷つけてしまう。白い翼、そろそろ見せつけてやれよ」

俺が知ってる刹那の秘密。鳥族と人間のハーフ。

刹那はそれをひた隠しにしていたが……いつまでもそう言うわけ

にもいかんだろ。

今、この場で木乃香を助けられるのは刹那だけだ。

「で、ですが……」

「ここにお前を嫌うヤツなんかいねーよ。存分に、翼を伸ばして来い。俺から見たあの翼は、凄く綺麗だったぜ」

「……………銀炉様には、全部見透かされてる気がしてなりません。では、行ってきます」

そういつて、刹那は白い翼を広げ、とんで行った。

ネギ坊主とアスナ、夕映は驚いていたが、気にすることもないだろう。

そして刹那が木乃香を救出したのを確認。しかし、木乃香の魔力による制御から放たれたスクナは恐らく暴れる。なら、その前に潰してしまおう。

封印？ めんどくせー。詠春に任せればいいさ。

「さて、始めるとするかな……」

——体は剣で出来ている——

I am the bone of my s

word.

——血潮は鉄で、心は硝子——

Steel is my body, and fir
e is my blood.

——幾度の戦場を超えて不敗——

I have created over a th
ousand blades.

——ただの一度も敗走はなく——

Unknown to Death.

——ただの一度も理解されない——

Not known to Life.

——彼の者は常に一人、剣の丘で勝利に酔う——

Have withstood pain to create many weapons.

——故に、生涯に意味は無く——

Yet, those hands will never hold anything.

——その体はきつと剣で出来ていた——

So as I pray, unlimited blade works.

そこにいた魔法関係者は誰もが驚いたことだろう。

なんせ、これだけ長い詠唱をしたのに、魔力が練られることがないのだ。皆が思ったはずだ。

——不発か、と。

違う。これであってる。魔力を練る必要も、精霊に頼る必要もない魔法。……いや、魔術。

最後の詠唱を終えた瞬間、炎に包まれた。

固有結界。

そこには全てがあって、全てがない。

火の粉舞い散る空には、複数の歯車。

無限に広がる荒野には、無限の墓標。いや違う。剣だ。無限の剣。これが、俺の切り札の一つ、『無限の剣製』^{unlimited blades}だった。

本来の術者は俺じゃないのだが……。もうその人物の顔を思い出

することはできない。

「こ、これは……」

ネギ坊主が驚いた表情で声を上げる。

なにに驚いたかと言え、この空間だろう。だが、それと別に、無限に突き刺さる剣達も驚きの対象だ。

その一振り一振りが、とてつもない魔力を持っている。

「これが……銀の切り札……」

「そうだ。これが俺が持つ力。術者の心情風景で現実世界を塗りつぶす大禁忌。……さて、飛驒の大鬼神。貴様の目に映るのは無限の剣。剣戟の極地……恐れずしてかかって来い！」

——グオオオツオオオオオオオオオオオオ。

エヴァの氷が砕け、鬼神が活動を再開する。

その腕を振り下ろし、突き刺さる剣達を蹴散らした。

しかし、その蹴散らされた剣は空中で動きを止め、その刃をスクナに向けた。

「いけ」

俺が小さく言うのと同時、その剣達はスクナに突き刺さる。

ブローケン・ファンタズム
「『壊れた幻想』！」

スクナに突き刺さった剣が爆発する。

スクナは苦しそうに呻くが、関係ない。

「《――投影、開始》」

手にするのは呪いの朱槍。

「飛驒の大鬼神、しっかり受け止めろよ……。」
『ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍』
「――」

体を弓の様に撓らせ、槍を矢のように射出した。

クーフリーンは足でこれを投擲したと言うが……俺には真似できない芸当だ。

そしてその射出された『突き穿つ死翔の槍』は吸い寄せられるようにスクナの心臓を抉りにかかる。

スクナはそれを防ごうと両腕をクロスさせ心臓に刺さらぬようにした。が、そんなものは無意味だ。

『突き穿つ死翔の槍』はそのまま、鬼神の腕を粉碎し、心の臓を穿った。

心臓に、一本の槍が通ったとは思えない大きな穴が空いたが……。しかし、それで動きが止まる様な鬼でもないみたいだ。

鬼神は、口をがぱつと開けた。

その口に魔力を圧縮した球体が現れる。そして、それはそのまま。こちらに光の柱となり、放たれた。

かなりの魔力。恐らくスクナの最大攻撃ではないだろうか。並の魔法では即座に弾かれて終わりで。

「《――投影、開始》」

だから、あの剣をもうもう一度投影した。アレ以外、これを防げる物はないかもしれない。いや、《あの盾》なら防げるかもしれないが……。しかし、盾を使って剣を投影できなくなつては元も子もない。相討ち覚悟。

だがアレは、魔力を凄く使う……。あれを振りまわした結果として、魔力が半分以上消えたからなあ……。
だけど、やるしかない。

「『約束エクスされた――』

――勝利カリバーの剣！――！――』

あ、やべ。すっげー魔力込めた結果がこれか……。やっぱ連続使用なんかするもんじゃねーなあ……。

スクナの光の柱は、難なく消せた。スクナも消えたらしい。

じゃあ、ちよっとくらい休んでも、いいかな。

そうして、俺の意識は遠ざかっていった。

固有結界（後書き）

なんだか、文が拙い……。

もう夏休みが終わりに近いです。もう終わりです。人生的に。

はあ……。。

さて、まあ、誤字脱字の訂正・感想などお待ちしていますので、お願いします。

起きて寝て修学旅行終了

目が覚めた時。そこは詠春の自室だった。

俺が寝ている隣では刹那とエヴァ、茶々丸がいた。

「……今日は、銀炉様に言わなくてはいけないことがあってここに参りました」

え、なに。起きた瞬間真剣になんなきゃなんないの？

「私が烏族の一人だとばれてしまったとあれば木乃香お嬢様のお傍にはいられない……。烏族の掟として、私は帰ろうと思うんです」

「でもそれを俺に言っただけは、帰る気はないんだろう？」

「なっ……？」

「そもそも、烏族の掟と木乃香。お前にとって重いのはどっちだ？ん？」

あれ、なに。説教？

無自覚なうちに俺が刹那に説教してる形になってる。

なんでだろう。

てか、俺はなんで寝てんだっけ？ いつ寝たんだっけ？ ああ、

考えるのがめんどくさい。

「ですが私は！」

「刹那。俺が思うにだな……。いや、俺の私情はどうでもいいか。

……お前はどうかしたいんだ？」

「どうありたい……。ですか？」

「そうだ。お前は烏族として生きたいのか？ 木乃香の護衛として生きたいのか？ 木乃香の親友として生きたいのか？」

「そ、それは……」

「おし、じゃあこの話お終い！」

「ええ！？」

「茶々丸。なんかお茶的なものないか？」

「はい、ここに」

準備良いなあオイ。

「んじゃ、いただきます」

ズズズとお茶を啜る音だけが部屋に残響する。

……………。

「ええ！？ 本当にお終いですか！？」

「ああ、お終いだ。ほら、迎えが来るぞ」

「え……？」

「せっちゃん！ 大変や大変やー！ 旅館に置いてきたウチらの式がストリップ初めてしもうたー！」

「ほら刹那さん！ 式とかは刹那さんが詳しいんだから早く！」

「……まったく、仕方ないですね」

そして、刹那とアスナと木乃香は旅館の方に向かっていった。

「ふう……エヴァと茶々丸、お前達は良いのか？ 行かなくて」

「ああ、別にいいよ。私は式とか置いてきてないからな」

「私もマスターと同じくです」

「そうか」

「そう言うお前は？」

「こんなこともあるのかと、既に式は回収済みだ」

「……いつの間に……」

ちなみに新田教員に「京都で迷子になってしまったので近衛木乃香の実家にて預かってもらうことにしました。地図が見つかり次第そちらに帰ります」と電話で伝えてある。新田教員からはいろいろ言われたが、「本当にすいませんでした」の一言でなんとか許してもらえた。

それにしても、傑作だ、と思う。いや、戯言か。

烏族と人間のハーフで迫害を受けるなど。種族違えど心有り。まあ、平等なんて馬鹿げたことは言わないが……。

「エヴァ、家に帰ったらあの時の続き、しようか？」

「……ああ、頼む」

かはは、随分と女の子らしくなっちゃったなあ。

旅館に帰るとエイミーに言い寄られた。

「どうして私も連れていってくれなかったんですか！」

「いやー、ごめん。忘れてた！」

「忘れないでくださいよお！」

忘れてたのは作者であって俺じゃあないぞ？

「まあ、ついて来てたとしても面白いことなんか無かったと思うぞ？」

「そうでもないだろ。あの固有結界とかいうのはなかなか壮観だったぞ。」

「お前は何故そう無駄にそんなことを言うかな？ ん？」

「お兄ちゃん困らせて嬉しいか？」

「いや、弟か。」

「固有結界ってなんですか！ 私にも見せてください！」

「あー、あれね。結構魔力食っちゃうんだよ。疲れちゃうんだな。ということで御休み」

「寝るなー！」

「そうだぞ銀。これからナギの隠れ家に行くことになってるんだ。寝てないでさっさと行くぞ」

「はあ……分かりましたよ、お姫様」

「おや、やっと来ましたね」

「そう言いながら煙草を吸っているのは詠春。今日は私服姿だった。ちなみにこちらのメンバーはブン屋、エイミー、夕映、宮崎、早乙女、アスナ、木乃香、刹那、坊主に茶々丸、エヴァと俺だ。」

「煙草あかんよ」

「何気にファザコンな木乃香である。」

子供らしくて可愛いと言えば可愛いのだが。

「エヴァー、おんぶしてくれー」

「いや、ムリだろ……身長差からして」

「はは、眠そうですね、銀炉。昨日はお疲れさまでした。なんでも、あの力を使ったそうではないですか」

「ああ、使ったよ。意外と魔力食われちゃったけどな」

そんなどうでもいい話をしながら辿りついたのは久方ぶりに見る建物だった。

「木乃香、アスナ君、刹那君、エイミー君。後銀炉も、ちょっとこっちへ……。あなた達にも聞いてほしい話なので」

俺にまで聞いてほしい話って……。

「これは……？」

「サウザンドマスターの盟友達です」

そこにあっただのは紅き翼メンバーの集合写真。いやはや、懐かしい。

そしてなんで夕映は隠れて話を聞いてんだ？

「わひゃー、お父様わかい」

「……あれ、これって銀兄!？」

「ほ、ほんまや……。なんで兄様がここにおるん?」

「え、えっと、それは……」何故言い淀むんだ刹那。

「あれ、アスナさん達知らないんですか?」

エイミーが意外そうにアスナを見る。

まあ、意外だよな。坊主と一緒にいるのにそれを知らないって。っていうか、坊主も知らねえんじゃねえか？

「まあ簡潔に言えば、俺も、ナギ達と暴れまわってた一人ってことだ」

「「……え、ええええええええええ！？」」「」

いや、そんなに驚くことか？

「だってそしたら銀兄って……何歳！？」

「まだ五〇〇とか六〇〇じゃねえかな？」

「あんた何者よ！」

「妖怪だと言った気がするんだが……」

「はいはい！ 記念写真撮るよー！」

なんかブン屋が来た。

「あー俺パスな。そういうの苦手なんだ」

「私もな」

ということで、俺とエヴァと茶々丸、詠春以外は皆一階に下りて記念撮影中。

しっかし……。

「木乃香にも、魔法ばれちゃったんだってな」

「ええ、お義父さんにはめられましたかね？」

「だろうな。今のところ、たぶんジジイの計画通りだと思うぜ？

あのクラス編集見れば分かるけどよ、誰と仮契約しても良いマジックアイテムが出る様に仕込まれてやがる」

「ふむ……やはり、そうですね」

しかし、これで修学旅行も終わりだな。なんだか、妙に疲れたと言うか、なんというか……。

その割には案外あっさり終わったと言うかなんというか。

「はい、皆さん、修学旅行は楽しかったですかー？」

「「「イエッー！ー！ーイ！」」」

え、なにこのノリ。俺はもう疲れてクタクタなだけど？ どこにこんな元気があるんだ、このクラスは。

俺の隣にいるエヴァなんか半分寝てんぞ。エイミーも茶々丸の膝枕で寝ちゃってるし……。

まあ、俺等が疲れてんのはいろいろあったからなんだろうけど……。

帰ってからが面倒だなあ……。エイミーには固有結界を見せてくれて頼まれてるし、エヴァとの約束もあるし……。ああ、寝よう。別に苛々してる訳ではないが、寝てしまって忘れた方がいいのかもしれない。

「エヴァ、寝たいなら肩貸すぞ？ 代わりにお前の頭を枕にさせろ」

「……………」ぽてっ。

限界が来たのだろう。返事もなしに、なんとも可愛らしい音を立

てながら俺の肩に体重を預ける。軽い。いつも思うのだが、真祖の吸血鬼は体重も変わらないのだろうか。

さて、と……。羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……。。

起きて寝て修学旅行終了（後書き）

なんかあっさり終わっちゃったYO！

他の二次創作ネギま作品と自分の作品を比べるとなんとも言えなくなりますね。なんだか良く分からない現実というか才能と言うか、そういうのに打ちひしがれてます。

次はなんだっけ？　なんかネギがエヴァの弟子になろうとするんだっけ？

どうすつかねえ……。展開的に、銀炉かエヴァか。どっちの弟子にするべきか……。未だお悩み中です。まあ、基本的には原作沿って行こうと思ってるんですがね？

感想お願いしますマジでお願いします。感想無しでお気に入りが増えていくのって何故か恐怖です。なんででしょう。いや、お気に入りが増えていくのは有り難いですよ？

と、とりあえず評価とか感想ともお待ちしてます！

弟子ともふもふとスキマ妖怪

修学旅行も終わり、日曜。なんとも言えない脱力感に苛まれる。そんな昼。

何故かエヴァと共に寝て、いろいろ搾り取られ、そのまま寝てしまったのは覚えている。いや、覚えていてしまった。そのせいだろう、この脱力感。そしてこの脱力感のもう一つの理由が……。

「はぁ……………」

「む？　なんだ、起きたのか」

「起きちゃいけなかったのか？　いや、起きなかった方が俺的には良かったのだが……………」

「……………なんでアンタ等一緒に寝てんのよー！」

「うるさいぞ神楽坂」

そう、何故かアスナとネギが来ていた。遂さっきまでエヴァも寝ていたらしく、つまりこの二人には一緒に寝ているところを見られたということだ。

良かった。後処理とかちゃんとしておいて本当に良かった……。

「で？　なんだ坊主。お前がここに来るなんて珍しいな」

「あ、そ、その、エヴァンジェリンさんに話しがあって……………」

「む？　私にか？」

花粉症でかゆいのか、鼻を掻きながら眉毛を八の字にする。

「は、はい。あの、僕を弟子にしてくれませんか！」

ここに馬鹿がいた。

「断る」

「はう！？」

当たり前だ。エヴァの性格を理解していればその返答……という
か即答くらいは予想がつくはずだがな。

「そもそも私は弟子などっていないし、習うならタカミチにでも
教えを乞えばいいではないか」

「タカミチは出張が多くて……。じ、じゃあ銀炉さん！」「だが断る」
はうええ！？」

「ち、ちょっと二人とも……。ネギだってこんなをお願いしてるん
だから弟子にくらい……。」

……アスナは少し軽く見過ぎだな。いろいろ。

「いいか、アスナ。弟子にとるということは、師匠になるものはそ
の弟子の人生の半分を担ぐということになるんだよ。軽視していい
ものではない。俺みたいな人食者などもってのほかだ。だからこう
いう場合は魔法のエキスパートのエヴァが師匠になってくれるだろ
う」

「なぜそうなる！？」

「俺は雷系は苦手なんだよ」

「銀が得意なのは雷と闇だろ！？ 私は闇と氷。お前の方がアイツ
に近い戦闘を教えられるんじゃないか？」

「あの、アイツって……？」

……？ あれ、こいつが弟子になりたいとかって言い出したのは

……

「ナギの野郎みたいな戦い方をしたいからじゃねえのか？」

「……！？ た、確かに……そ、そっか。そういえばエヴァンジェリンさんも銀炉さんも父さんと知り合いだった！！」

忘れてたんかい！

思わず突っ込んでしまった……。

「あ、あの。本当に僕を弟子にしてくれませんか？」

「……エヴァ、どうするよ」

「ふむ……。嫌だ、めんどい」

やっぱそうなりますよね。うん、分かってたよ。

「確かに父さんの戦い方とか知りたいです。ですがそれ以上に、エヴァンジェリンさん達の戦いを見て決めたいです！ 戦い方を学ぶなら、あなた達の弟子になるしかない！」

「……ほう、つまりなんだ。私の強さに感動したと……そう言いたいのか？」

「はいっ！」

……おい、エヴァ？

「ふむふむ……そーかそーか。……だがなぼーや。私は悪の魔法使いだ。私にものを頼む時は、それなりの代償が必要だ。………まず足は足を舐めろ。話しはそれからだ」

おーい、エヴァー。戻ってこーい。

ああ、ダメだこれ。完全に褒め殺されてる。
そう思った瞬間、

「アホかー！ 何子供にアダルトな要求してんのよー！」
「へぶう！？」

アスナ……そう簡単に障壁を抜いてハリセンで突っ込むな……。にしても似てるなあ、アリカと。アリカはビンタだったけど。

「エヴァー、大丈夫かー？」

「大丈夫じゃない、ほっぺが痛い」

「おうおう可哀そうに。折角のぷにぷにほっぺが……」

そう言いながらベッドの上で当分動けないであろうエヴァの代わりに俺がこの場を纏める事にする。

「ネギ坊主。テメーに課題を出してやる。それをクリアしたら弟子入りを認めてやんよ」

「え、ホントですか！？」

「ああ、本当だ。で、その課題なんだが……」「銀に勝て」……は？
「課題だ。銀に勝てば弟子入りを認めてやる」

……………。

「ええええええええええ？！」

「ちよ、エヴァちゃん？！ 幾らなんでもそれは……」

「そうだぞエヴァ。俺はナルシストではないが自信家だ。坊主が俺に勝てるようなら弟子入りさせる必要もあるまいよ」

「むう……じゃあ制限時間内に銀に有効打を当てられたら、どうだ？」

「それもなかなか……難しいと思うけどな」

「だがそれくらいの実力がないと弟子にしてもつまらんだろ」

なるほどなるほど。エヴァにとっての弟子は単なる暇つぶしか。

「はぁ……まあ、有効打じゃなくとも俺に一撃でも当てればいいよ。本当は茶々丸を出そうと思ってたんだがな……」

「なに？ 茶々丸に出そうとしてただと？ ロボットまで守備範囲か。凄いなお前は」

「お前の耳年増度の方が凄いだろうが、このロリバ「誰がロリババアだ！」あだだだだだだ！ お前のその噛み癖なんとかしやがれ！ 痛てーんだよ冗談抜きで！」

てか、なに考えてんだコイツは。数えて十歳の少年の前で……。いや、意味が分からないだろうから別にいいんだが。アスナには意味が正常に伝わっちゃまった様だな！

「アスナ、勘違いすんなよ。このロリバ「噛むぞ」……サドステイクエロリババアの戯言だからあああだだだだだ！ ？ げる！ 頭が？ げる！」

「お前はいつの間にマゾになった？！ エロリババアとはなんだ？！ まったく！」

マゾヒストになった覚えはねえんだがな……。どうしてもこう……面白い方向に話をだな？

「はぁ……。まあ、とりあえず、だ。今度の土曜の深夜十二時。それがテスト開始時刻だからな」

「は、はい。では……」

……やっと思ったか。

「……気のせいかなスナの中に微弱な魔力反応があった気がするんだが……」

「ん？ 別に気にせんでもいいだろ」

まあそれもそうだな。大体の魔法は無効化しちゃうわけだし。

「それにしても、昨晚は酷い目にあった……」

「……茶々丸、少し買い物に行ってきたくないか？」

「はい、マスター」

……おい、エヴァ。

何を企んでやがる……。

「……ふふ、これで二人きりだぞ？ 銀」

甘える様な声を出しながら、俺に抱きつくエヴァ。ああ、始まった。

「はあ。銀の体温は何故か落ち着くな」

猫の様に目を細めながらそんなことを言うエヴァ。

仕方なく、空気を読んで抱き返すことにする。

「銀」

「なんだよ」

「温かいな、お前は」

「……それ、昨日も言ってた」

「そうだったか？ いや、まあいいじゃないか。それに、ここでは本性を現したらどうだ？」

「……まあ、そうだな。一番楽な姿ってのが一番いいもんな」

幻想郷ではいつも気にしてなかったけど、こっち来てからずっと隠してたからな。耳と尻尾。

ちなみに、狼(?)の姿にもなれるぞ。その時は何故か毛が銀になるんだけどな。何気にそれが名前の由来だったりする。炉はついでで付けたとか言ってたぞ。あのBBAが。

「あの時と変わらず、尻尾もふもふだな」

「あんま弄んな」

「だが断る♪」

鼻歌を歌いながらご機嫌なエヴァ。

正直言って尻尾を弄られるのは好きじゃない。なんかこう……変な感じがするから。

橙にも良く弄られてたなあ。その度に尻尾の力だけでお手玉みたいに遊んでやったものだ。エヴァもそうやって遊んでやろうかと思ったが、さすがに怒られるだろうと自重した。

「もふもふ♪」キャラが崩壊してきてるぞエヴァ。

「なんなら銀牙になってやろうか？」

「ふむ、今夜寝るときに枕になってもらおう」

「……別に構わないけどよ……」

ちなみに銀牙っていうのは俺の狼形態の通称だ。

まさか本当に枕にされるとはな……。

銀色の狼となった俺は今現在エヴァと寝ている。うむ、も○のけ

姫みたいだ。

さっきまでより一回り大きくなった銀の毛を持つ尻尾を掛け布団代わりにしてエヴァは一定のリズムで寝息を立てている。

尻尾を通してエヴァの体温や脈が伝わってくる。ついでに言うとすべすべな肌の感触も、だ。

しかし、この銀牙の姿で寝るのも久しいな。

さっさと寝てしまおう。

……羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……あ、やばい、羊肉食べたくなってきた。

翌日、いつも通りの朝を迎え、有意義に校内でサボタージュをしてるところに、それは来た。

「久しぶりね、銀炉」

「……なんか用か？ 紫」

「一昨日の晩はお楽しみだったようね。あの吸血鬼のお嬢さんと」

「……いつから見えていやがった」

「初めから♪」「ですよねええ！」

頭が痛い。強制認識阻害結界魔法でも張っておけばよかったか……？

いや、こいつに結界なんてあって無い様なものか。

「そういえば、あの幽々子のところの庭師に良く似た子。なにかあったのかしら？ 随分と幸せそうにしてたけど」

「まあ、いろいろとな。で？ なんで出てきた？」

「貴方に頼みごとよ。今度の長期休みの時、幻想郷に戻ってきなさい」

「何故だ」

「貴方の組織の人達が帰ろうとしないの。あと十年くらい留まるとか言ってるのよ？ 迷惑も良い所よ」

「あいつら、今度は幻想郷に拠点を置いたのか……」

相も変わらず規格外な奴等だ。結界はどうしたよ。結界は。

「お前の能力で強制退場してやったらどうだ？」

「無理よ。櫻木さくらの能力は知ってるでしょ？ 幻想郷が灰燼に

帰すところなんて見たくないわ」

「総隊長は何してんだよ……」

櫻木さくら。それが総隊長の名前だ。外見は活発な女の子。名前の通り旧世界の日本出身。その身は成長することがない。真祖の吸血鬼だとかではない。確か、実験台にされたとか言ってたな。不老不死だか不滅だかになるための。

外見は子供っぽいが中身は炎を統べる最強者だ。総隊長の持つ二刀一対の『万物熔かす《紅蓮・炎美》』に勝る刀は恐らく存在しない。

俺もかつては（今もだが）闇を統べる最狂者と呼ばれていたが、やはり総隊長には劣る。はつきり言っただけ勝てる気しねえ。二番隊長のシエルにだって勝てねえし、へたすりゃ十五番隊長のルーにだって勝てる気しない。裏会は怖い怖い。

紫が言ってるのは、その総隊長が扱う二刀が持つ《地獄の業火》と《至極の猛火》にはどんな結界も効かないということを目指している。結界など簡単に熔けてしまうからな。

その炎を防ぐ手立てと言えば、同じかそれ以上の火力を持つ技で

押すしかない。

その炎と相対できるくらいの火力を持つ刀と言えば、俺の『魂喰らう《闇蛇・黒椿》』くらいなものなのだが。

俺が持つ唯一本物の刀だ。

後は投影の限界に近い『流刃若火』くらいか？

「まあ、今度のゴールデンウィークにでも行ければ行く。無理なら夏休みだな。それまでは我慢してくれ」

「そう。ならいいわ」

「なんだ？ 不気味なくらいに素直だな」

「ええ、ちょっと最近大変なのよ。アンタに文句を言う気も失せるくらいに。アンタが帰ってこないもんだから霊夢とか藍とか橙が不機嫌でね……。私にまでその影響が降りかかってくるし……」

「……謝るからそんな目で見ないでくれ。寒気がする」

「あと閻魔も怒ってたわよ。帰ってきたら死刑だって」

「うわ……マジ帰りたくねえー……」

「ずっと帰ってこなかった罰よ。しっかり受け取んなさい」

「へいへい」

しかし、なんで俺が帰って来ねえだけで不機嫌になるんだかなあ。

エヴァもそうだったみたいだし、まるで意味が分からん。

てかこの場合罰を受けるべきなのは俺を強制的に外の世界（それも魔法世界）に落としてくれやがった紫じゃないか？

「細かいことを気にしたら負けだと思いなさいと昔から教えてる筈よ」

「そんな教育された覚えはないわ！ てか心を読むな！ そして細かいことなんかじゃねえ！」

まったく……。戦場のど真ん中に落としておいてなにが細かいことだよ……。

閻魔に地獄に落とされたらどうすんだ。

「もう十分地獄逝きは決まってると思うわよ。あんな組織に入ってるわけだし」

「テメーが魔法世界なんて場所に放り出さないでくれれば、あんなおっかない組織入らねえで済んだんだよ！」

本当に怖いんだぞ。

拠点に帰った途端五番隊隊長に「戦えー！」と追い回され、振り切ったと思えば二番隊隊長にお菓子を求められ、お菓子を渡したかと思えば六番隊隊長が御洒落のなんたるかを勝手に喋った上に氷漬けにしてくる、いや本当なんです。氷が溶けたかと思えば今度は三番隊の皆で宴会。ドンチャン騒ぎ。休まる時なんて一瞬も無いと言っているだろう。

「兎も角、ゴールデンウィークの時でも夏休みでもいいから来て頂戴」

「お前のスキマ使わないと行けねえだろ」

「ああ、それもそうだったわね。それじゃあゴールデンウィーク、或いは夏休みの初日にまた来るわ。それでいいでしょ」

「了解」

……はあ、今から考えるだけで滅入る話したと思う。拠点に帰れば五番隊に追い回されるのは目に見えている。それを振り切った後はさくらさんに説得だ。あの人は変な所で頑固で我儘だから、そう簡単に退いてくれるとは思わんが。

弟子ともふもふとスキマ妖怪（後書き）

紫の性格が定まらん！　そしてエヴァファンの人はこれ見てぶち切れそうですね。自分で書いというてなんですが、俺も一瞬銀炉を殺してやろうかと思ってしまいましたよはい。

さて、ここで俺が考えている大まかな原作ブレイクを上げておきましょう。

まず魔法世界に行くか行かないかですね。

行かない場合は、紅き翼メンバーは幻想郷にいうことになります。

その代わり、ネギ強化が恐らく無くなります。そして殆どが裏会の人達の大暴れで終わりますはい。

なにかいい案はないでしょうか……。

そもそも魔法世界に行かないとライフメイカーとかどうすんだよってね。

ナギの行方とかもどうするってんだよってね。

あー本当にどうしよう。

弟子試験と抱き枕

日曜午前零時。

今俺は、ネギの弟子入り試験たるものをするために世界樹広場に
来ている。

こちらのメンバーはチャチャゼロ、エヴァ、茶々丸だ。

「それにしても、この場合はエヴァが師匠になんのか？」

「まずそれはないな。お前が提案したのだからお前が師匠になるべきだ」

「いやいや、魔法のエキスパートであるお前が師匠になるべきだろう。俺は魔法使いのあるべき姿なんて知らないし、なにより、《立派な魔法使い》には良いイメージがないんだよ」

「良いではないか。《悪の魔法使い》にでもしてやれば」

「ナギが泣くと思うぞ、それは」

いや、ナギは泣くと言うより「上等！」とか言って勝負を吹っ掛けるか。

泣くとすればアリカの方か？ いや、アリカはアリカで「自分で選んだ道ならそれで良い」とか言いそうだな。……いや、さすがにそれは無いか。

「お、来たな」

エヴァが言うと同時に広場にやってきたネギとその他大勢がやってきたって待てやこら。

「おいネギ坊主、その……なんだ。お前は真剣にやる気があるのか？」

「はい、勿論です！」

「じゃあまずはそのギャラリーをなんとかしろや！」

「はあ……なんか着いて来てしまつて……」

いや追い払えよ！

そこにいたのは佐々木まき絵、和泉亜子、明石祐奈、大河内アキラ、アスナ、刹那、木乃香、夕映、宮崎、早乙女、古菲、龍宮、長瀬、エイミー。そして何故か小太郎。

はあ……まあいいか。一部一般人もいるけど殆どが魔法関係者だし。

「忠告しておくが、これからするのはただの虐めだ。見たくない奴は帰れ」

「ぎ、銀兄……？ 虐めって……」

「虐めるっていうのが一番しつくりくる表現だろう。そうそう、木乃香と夕映、宮崎に早乙女には丁度良いな。こちら側の世界がどういふものなのかを知りたいチャンスだ。……さあ、位置につけ坊主。俺は夜行性だから良いが、そっちのお嬢さん方は肌とかが辛いだろうからな」

「は、はい！」

ギャラリーも離れ、準備は万端。

さて、始めるとするか。

「いいな坊主。時間制限は一時間以内。俺に一撃でも与えられなければ弟子入りは無しだ。……なにやら秘策があるようだが、それが俺に効くと思ってるのか？」

「はい、思ってます。一撃与えるだけなら、十分だと僕は考えてい

ますが……」

「そうか。まあ、せめて慢心しろ。躊躇しろ。その分、俺は時間ある限りにお前をいたぶってやる」

「では、始めるがいい!」

エヴァのスタートの合図と共に、俺は動いた。

（Side Out）

先に動いた銀炉は、瞬動でネギの後ろを取る。

そのままネギの服を掴み放り投げた。そしてまた瞬動、空中に放り出されたネギを捕らえ、地面に叩きつける。

「キャアッ!」

「痛っ……。な、何今の……」

ギャラリーが騒ぐも、聞く耳持たず。地面に着地し、叩きつけられたネギを見据える。

「……………（この程度、か）」

秘策があったと言っていたが、それも出す暇もなく終わりか。

「な、なんや今の流れ……。目で追えんかった……」

「うむ、拙者も同じくでござる……」

「くっ……。ネギ坊主。ダメアルか?」

「まさか、あそこまで圧倒的だとはね。私も一度やってみたくなたかな……」

戦闘を知る者は冷静にそれを見ているが、一般ギャラリーはただただ騒ぐ。

「黙れ」

銀炉のずっしりとした思い言葉にその場に緊張が走る。

「言ったはずだ。これはただの虐めだと。見たくない者は帰れと。勝手についてきた貴様等にとやかく言われる筋合いはないはずだが？」

「で、でも相手は子供なんだよ!？」

「なんだ明石、坊主の事情も知らず勝手に着いてきたくせに、文句があるのか」

「あるに決まってんじゃん!」

「ほう、なんだ? 聞いてやろう」

「だ、だからネギ君はまだ子供なんだよ!? それなのに、あんな加減なく……」

「手加減なら十二分にしてやったはずだが? 俺が加減なしでやれば、人間の頭なんてトマトみたいなものだ」

明石はその言葉に「意味分かんない」と反論しようとした。だが、できない。さっき起こった出来事。子供とはいえ、一人の人間を空高く放りあげた挙句の果てに瞬間的に空中に移動してネギを地面に叩きつけた。

その一連の出来事が、銀炉のセリフに現実味を持たせていた。

「それに、坊主はまだやる気があるみたいだしな」

「……はい、当たり前です」

「さて、もう十分休んだだろ。行くぞ」

ネギが立ちあがったのを見届けてから、銀炉はまた動く。

銀炉は瞬動では無くただの正拳突きを繰り返す。ネギはそれを回る様にかわし、遠心力を殺さぬままに拳を当てる。が、それは簡単に防がれる。

「……なるほど、中国拳法か。それが秘策か？ 坊主」

「はい、そうです」

それで古菲がここにいる訳か。と銀炉は納得する。

それを防いだ銀炉はネギの体を蹴り飛ばす。

「ぐあっ……！」

「おら、休ませねえぞ？」

蹴られた反動で足がよろめきそうになる。そこに追い打ちをかける様に銀炉が殴りにかかる。が、それはネギの誘いだった。

「うお……。なるほどカウンターか」

「くっ……」

殴りにかかった右手をネギは掴みそれを引き寄せながら肘打ち。だがそれもまた銀炉の空いてる手によって防がれる。

「おら、もういっちょ吹っ飛べ！」

銀炉はネギの手を逆に掴み、逃げない様に固定。そのまま膝打ち（ニー・リフト）を繰り返す、ネギはまた空中に放り飛ばされる。

「(……この程度か。つまらん)」

「ナンダ、御主人。随分ト苛々シテルミタイダナ」

「ん？ ああ、当たり前だ。中国拳法、それも未完成だ。それだけで銀に一撃を与えるのは十分だと言ったのだぞ？ 慢心にも程がある」

「ソレ以上ニ銀ノ旦那ガ馬鹿ニサレテタノガ許セナイト言ウワケカ」
「なっ！？ ち、違うぞチャチャゼロ！」

「それにしても銀炉さん。マスターの影響を受けてか、かなり悪者なセリフを言っておられますが……」

「私か！？ 私のせいなのか！？」

こんな茶番が端で行われている間にも銀炉の攻撃は止まない。
空中でネギを捕らえた銀炉はそのままもう一度打ち上げる。そして虚空瞬動でネギを待ち伏せし、蹴りを腹に加えてまた地面に叩きつける。

「ガハッ！」

ネギの肺から強制的に空気が吐かれる。それにも関わらず銀炉は更に追撃する。重力も相俟って威力十分の拳だ。それを腹にまともに食らったネギは、意識を手放した。

「ネギ！！」

「これは、酷いでござるな……」

「酷いも何もないな。加減はしてあるし、外傷も殆ど無い筈だ」

「……………」

「アスナには兎も角、お前らに睨まれる筋合いはない筈だが？ 明石祐奈。どうだ、文句があるなら言ってみろ」

「ネギ君こんなにして、なにがしたいの！？」

「俺がしたくてした訳じゃあない。そいつが弟子入りたいというから俺が弟子入りの試験をしてやったに過ぎん。傷も付けていない。痛みも一時的なもの。どうだ？ 随分と優しく遊んでやったつもりだがな？」

「だからって！」

「ああもう、煩い。そんな感情論を唱えられても不愉快だ。少し寝てろ」

「あ……………」

殺気を中てて明石を眠らせる。ついでに他の一般人二人もだ。

「試験は失格。これにて解散だ。……古菲、俺と戦いたいなんて思わないことだ」

「うっ！ ば、ばればれアルね……」

銀炉は世界樹の近くにいたエヴァに見向きもせずそのまま階段を下りていった、

その後を慌てた様子で追いかけるエヴァと茶々丸。チャチャゼロは茶々丸が抱えている。

そして気絶してるネギを膝枕する佐々木とそれを取り巻く早乙女達。夕映は銀炉を追いかけるかネギの様子を見るべきか悩んだが、最終的にネギの様子を見ることにしたらしい。

気絶した三人はアスナ達に担がれ寮に運ばれ、この日の夜は終わっていった。

＼銀炉Side＼

「不愉快だ」

「銀、なにをそんなに殺気立っているのだ？」

「アイツ、俺に一撃当てるのにあれで十分とか思ってたんだぜ？
不愉快にもなるだろ」

まあ、他にも理由ならいろいろあるのだが。

俺はリビングでココアを飲みながら不満を口にしていく。

「そもそもアイツは何がしたかったんだ？ 師弟ごっこでもやりたかったのか？ そもそもなんだ、あの『着いて来てしまいました』って……魔法秘匿する気ねえだろアレ」

そこ、その一般人の前で堂々瞬動してたのは誰だと言わない。

「銀、とりあえず寝てしまったらどうだ？」

「んー……そうだな。エヴァ、一緒に寝るか？」

「む……なんだ？ 随分と積極的だな。また、その……やるのか？」

「そう言う意味じゃねえよ。抱き枕になれって言ってるんだ」

「なっ……！？ 誰が抱き枕だ、誰が！」

「別に良いだろ？ 昨日の晩は俺が枕になってやったんだから」
「ぬぐぐ……それを言われると……」

おし、もうエヴァの意見には聞く耳持たん。今日は強制的に抱き枕になってもらおう。

「ぬあ!?! なにするんだ貴様!」

「なにつて……お姫様抱っこ?」

「んなこと分かっておるわ!　なんでそれをしているのかと訊いておるのだ!」

「そんなんお前、エヴァが慌てふためく姿を拝むために決まってるじゃないか」

「……後で絶対クロス……」

なにか不穏なセリフが聞こえたが気にしない気にしない。
てか顔を赤くしながらそんなこと言われても怖くない。

エヴァを無理矢理ベッドに押し倒し、更に抱きつき逃げ場を確保。
これで今夜は俺の抱き枕に決定だ。

「暑苦しいぞ銀!」

「いいじゃねえかよ、一晩くらい。……そうだ、今度のゴールドンウィークか夏休みに俺の故郷に帰ることになってんだ。そこに裏会が拠点を張っちまったらしくてな?　迷惑だから他の場所に移す様に説得してくれて頼まれてさ。どうだ?　一緒に来るか?」

「……行く」

「よし。後から『やっぱ行かない』とかは無しだぞ」

「分かっている。だから、その……なんだ。もっと強く抱き締めろ」

「……へいへい。分かりましたよ、お姫様」

要望通り強く抱きしめ——メリメリ「ぐぼえ!?!」。

……なにやら嫌な音と声が聞こえたが気にしない方向で行くこと

にしよう。

「加減というものをしろ……このバカ者―――！」

弟子試験と抱き枕（後書き）

ちよつと考えたんだ。

幻想郷行つてから魔法世界行けばいいんじゃない？

ネタバレじゃないよ。提案だよ。

なんか今回銀炉が悪役になってるネ！

いやいや、別にエヴァとの関係を恨んでこんなことしたわけじゃないよ？ いやホントだよ？

そしてやっぱり戦闘の所は単調だったり短かったりと……。駄文ですな。

では感想とかお待ちしてます。できればアドバイスくれると嬉しいです。

別荘での一日

エヴァと共に迎えた朝。何故だかそこにネギがいた。
つて、またかよ!?

「んで、なんだ。今度はどんな用件だ? 言ってみろ」

「は、はい。僕に戦闘技術を教えてください!」

「却下だ。それじゃ、エヴァもまだ寝てるし……俺はこのままエヴァの寝顔観賞会に入ろうと思ってるんだ。てなわけで帰れ」

「えええ!?!」

朝からうるさいぞ坊主。

というかエヴァが服を掴んで離さない。どうにかしてくれ。いや、いいんだけどさ。

「あ、あの! 本当に教えてくれませんか? 僕、強くなりたいです!」

「なんでだ?」

「へ?」

「お前の今の仕事は教師だ。教師は強くなる必要ないだろ」

「そ、それでも……。僕が巻き込んでしまった人達を護れるように……」

へえ……。そんなこと考えてんのか。これは意外だ。だがな。

「それなら昨日なんで一般人を連れてきたんだよ……」

「なんども追い払おうとしたのですが、時間に間に合わなくて……」

「『眠りの霧』はどうした」

「あ……」

「何故最善の処置を取らない？」

「そ、それは……」

「忘れてましたってか？ ふざけるのも大概にしておけ。俺はお前みたいなガキの面倒見るのはいやなんだよ。生真面目なくせに何も知らない。なにも知らないくせに知った風に言う。お前みたいな奴が、結局他人を巻き込んでいくんだ」

「で、でも！ それなら尚更！ 僕に、いろいろ教えてくれませんか！？」

「知らん、自分で勉強しろ。まずは常識ってヤツを学ぶんだな」

無論、これは八つ当たりだけどね？

そこに茶々丸がやってきたのに気付かなかったのは、相当頭に血が上ってたからなのかもしれん。

「銀炉さん。お客様が……」

「誰だ？」

「刹那さんとアスナさんと夕映さんと宮崎さんとエイミーさん、それから木乃香さんです。それから小太郎さんも……」

「用件はなんだって？」

「自分を護る力が欲しいと、言っておられました。約一名は銀炉さんと『戦いたい』と言っておられました……」

「なら良い。こっちに通せ」

「?! ぎ、銀炉さん！ アスナさんや小太郎君達は良いんですか！？」

ああ、なんだか段々ウザくなってきたな。

「お前の目的は皆を護ることだろう。そんなの自分の力で手に入れる。お前のせいで巻き込まれ、どうすれば自分を護れるかも分からん奴になにも教えるなと言う方が酷な話しだと思うがな」

夕映は俺が巻き込んだようなものだし……。今更帰れとは言えんだろ。

小太郎は面白そうだからだ。他人のために強くなるというのはただの自己満足。

しかし小太郎はただ単純に誰のためでもなく「強くなりたい」って思ってる奴だ。

そういう奴ほどよく伸びる。

「ん？ なんやネギ君。来とったんか」

「木乃香さん……」

「……エヴァを起こしてから別荘に行くぞ」

「別荘……ですか？」

「そうだ。……坊主、オメーもついてきたけりやついて来い。圧倒的なまでの力の差で潰されれば、少しは頭が冷えるかもしれんぞ」

そんなときだった。すっかり忘れてた存在が現れたのは。

「幻想郷には来れそうになさそうね、銀炉」

「……すまん、すっかり忘れてた……」

「「「「……?!」「」「」」」

ネギを含めた全員の顔に驚愕が張り付くのを見届けた。うむ、なかなか良い顔じゃないか。

「まったく……夏休みになったら強制的に来てもらうから、覚悟しなさいよ」

「ああ、エヴァも行くことになってるから、その時はよろしく」

「はいはい、分かったわよ」

「あ、あの……銀炉様？ そちらの御方は……」

「ん？ ああ、こいつは紫。俺の保護者だったババ「今スキマ送りにしてあげてもいいのよ」……まあ、妖怪だ」

「ほえ、綺麗な人やね」

「あら、ありがと。それより、あんま虐めんじゃないわよ？ 精神崩壊してもしらないんだから」

「善処するよ」

そして紫はスキマの中に帰っていった。

さて、そんなエヴァを起こして別荘の中に行きますかね。

「な、なんですか。これは……」

「正式名称をダイオラマ球。エヴァの別荘だ。ここでの一日は外での一時間。これを付けておけ」

そう言って渡したのは一見普通のブレスレット。

「これは？」

夕映がそれを付けながら訝しむ様な顔で訊いてくる。

「それは特別な術式が組まれててな、この別荘内では成長を止める作用を起こすんだ。外では効果を発揮しないから、若さ対策とかに使うなよ」

「……神楽坂明日菜と近衛木乃香はなにをしにここに来たんだ？」

エヴァが海の方を見ながら言う。

俺もそれにつられて別荘の浜辺を見るとアスナと木乃香が服が濡れるのもお構いなしに水かけ合っている。それに巻きこまれる刹那がなんか可愛そうだ。

「若いな……」

「急に老けるなよ、エヴァ……。てかなんで水着？」

俺の隣に立つエヴァは何故か白い水着を着ていた。いやホントな
んでさ？

「別に、最近来てなかったから着てみただけだ」

「そうや！ そないなことより勝負せんか！？ 銀の兄ちゃん！」

「おっし、まずは魔法の基礎だな。アスナー木乃香。刹那も戻ってこーい」

「んな！？ 無視か！？」

「戦闘技術はその次だ。それまでネギと殺り合ってくれ。お前に魔法の基礎は必要ないだろ」

「うし！ んじゃネギ、さっさとやるか！」

「う、うん。いいよ」

「……浜辺の方でやれよ？ こっちにまで余波が来たら授業が進まん」

そんな訳で銀炉の魔法教室、はーじまーるよー。

……いかん、あの氷精の馬鹿が移ったか？

「んで、魔法と言うのは基本的にだな」

「あの、銀炉さん。その前に少し質問をしていいでしょうか」

「なんだ、夕映」

「その耳と尻尾は……？」

「俺妖怪だから。はい、んじゃ続きな。魔法とは精霊に力を貸してもらってのが一番簡単な解釈だな。最も簡単に基本的な魔法の呪文は『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』だ」

アールデスカット

そう言いながら初心者用の杖をそれぞれに配る。

ちなみにこれはこうなることを見越して妖怪みたいな人間に急遽用意してもらったものだ。

「プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ」

アールデスカット

「うわー、エイミーちゃんすごーい！」

「これくらいは魔法使いとして当たり前です」

とか言いながら嬉しそうに頬を染めてるエイミーもなかなか可愛いものだと思う。

うーむ、やばいな。ロリコンに目覚めたか？

「プラクテ・ビギ・ナル アールデスカット！ ……って、やっぱ出ないか……」

「当たり前だ。つい先日まで一般人だった様な奴等が一発で成功するくらいなら魔法も苦労はせん。……まあ、自慢じゃないが、魔法の危険性くらいは見ておいた方がいいだろ」

「「……？」」

「刹那は知ってるだろうけど……いいか？ 魔法と言えば最も基本的な攻撃は『魔法の射手』だ。とりあえず実演だ。あの海の方に撃つから良く見とけよ」

みんなが海の方を見たのを確認。詠唱に入る。

「デッド・クライ・ラストワード・グレイエル 雷の精霊千柱 集
い来たりて 敵を射て 『魔法の射手 連弾・雷の千矢』！」

千の光の矢が海に向かっていく。

そして着弾、遅れて爆発音と爆風が押し寄せる。

「……まあ、今のが基本魔法だ。だが、これは本来「」「すっごー
い！」「うお?!」

「ネギの魔法の射手なら何回か見たことあるけど、アレってこんなに
凄い奴だったの!？」

「さすが銀炉様です！ あんなものを撃って涼しい顔でいられるな
んて……！」

「アレが魔法ですか!？ 素晴らしいです！ 感動です！」

「なんや綺麗やったわー。もう一回やってえー！」

「とりあえず黙ろうか」

「うゝっ……？」

あっはっは。思わず笑っちゃうよ。うるせーよ。はっはっは。

「とりあえず、最初は一矢からだ。詠唱は覚えてるな？ 覚えてん
ならすぐ練習。恥ずかしがって声を小さくしてたら精霊にも聞こえ
んから、大きな声でやる様に！」

「」「はい！」「」「」

はあ。返事だけはいいのにな……。

「なんだ、随分と投げやりだな」

「そんなこと言うならお前が教えてやってくれよ。そもそも、俺は
こういうのを言葉で説明すんのはめんどうなんだよ。レベルを少し

ずっ上げていくとか、そういうのな」

「いいぞ」

「……へ？」

「教えてやっても良いぞと言ったのだ。お前ばかりに苦勞かけるのも気が引ける」

「お前って良い奴だったのな！」

「ぬわあ！？　こんなところで抱きつくな！」

と言う感じにエヴァとじゃれてる時に空気を読めない奴がいた。

「銀の兄ちゃん！　向こう終わったんならほよこっち来てやろうや！」

「……っつーわけだ。じゃれ合いはまた後でだな」

「むう……勝手に抱きついて勝手に離れるとか、自分勝手すぎるだろ……」

なんか聞こえたが気にしない。

浜辺。俺と相對する様にネギと小太郎が立っている。

ネギは昨日の復讐……あ、いや、復習だそうだ。まあ、小太郎と一緒に実戦訓練をしようと言うヤツだ。

「いいか？　俺を殺す気でやってもお前らじゃ俺は一撃当てるのもままならん。ならどうするべきか。それを考えろ！」

「「おう！／＼はい！」」

やれやれ、こっちも返事だけとかになんなければいいのだが……。

数分後。

「やっぱダメだな、お前ら」

「銀の兄ちゃんが強すぎるんや……」

「あうう。また勝てなかった……」

ネギは、昨日のことを良く覚えていた。

昨日は一瞬で後ろを取られそれに反応できなかったネギだったが、今回はちゃんと反応してきた。まあ、その注意は後ろ限定でサイドの方がガラ空きだったのが。

小太郎は良い筋いつてるな。俺の瞬動を初見で微弱にだが読み取った。それに敬意を表して少し本気の瞬動で攻めたところ一瞬で撃沈したが。

「あのな。お前ら二人掛かって倒せない理由、分かってんのか？」

「うーん、火力不足か？」

「いや、それはない。その歳でその火力はなかなかのもんだ」

「じゃあなんや」

「コンビネーションだ」

「……コンビネーション、ですか……」

「お互いの長所と短所を補え合えてないな。ネギの短所ははっきり言って詠唱に時間を掛け過ぎだ。後、中途半端な力程惨めなものはない。中国拳法はきちんと形にしておけ」

「は、はい！」

「んで小太郎だが……お前は突っ走りすぎる傾向にあるな。今のネギの短所である詠唱の長さ。その詠唱までの時間稼ぎこそ俺にとつてのお前の理想だな。それこそ、相手を倒そうと思わず、少しでも傷を与える。或いは自分にのみ注目させる様にする。ネギが詠唱を終えれば合図でも何でもしてその場から離れる。離れるタイミング

も重要になってくるな」

「なんや、難しいなあ……。もちっと簡単な説明できんのか？」

十分に分かりやすいと思うのだが……。

「簡潔に言うアレだ。ネギの前衛だ。ネギは後衛としてじゅっくじゅくの未熟坊主だが、お前は近接格闘に関すれば十分だ。無論、それは『子供』として十分と言う意味だがな」

それを聞いた二人はううむ、と考え込む。

まあ、

「ネギは中国拳法習ってるわけだしな。完全に後衛でなくとも、小太郎と共に前に出て速度で相手を翻弄し倒すという形もある。中国拳法はなかなか幅が広いからな。翻弄するのには十分だ。小太郎も速度に関しては申し分なしだ」

「おお、なんか銀の兄ちゃんにそう言われると俄然やる気が出てくるな。おし、ネギ！　これから一緒に戦い方を考えんぞ！」

「う、うん。……あの、銀炉さん。ありがとうございました」

「ん？　なにがだ？」

「いえ、なんでもないです」

そう言っネギは駆けだしていった小太郎を追っていった。

……………。

……………。

……………。

……………はっ！　結局俺はコイツに戦い方を教えちまつたってことか！？

「……俺も、なかなかのドジっ子だな、うん」

あ、やばい。自分で言っておいてちよつと虚しくなってきた……。

それから一日、アスナ達にみっちり魔法の基礎を学んでもらった。

今のところ進歩が速いのは木乃香と夕映、宮崎の図書館探索部メンバーだった。

三人とも『火よ灯れ』アールデスカットは最早完璧。正直あり得ないと思った。バグですかと。

更に夕映は『魔法の射手』を既に光を四つ。雷を三つ出せるようになっていた。成長著しいですな。

木乃香も光の矢を五つまで出せるようになったし。

アスナだけではどうしてもダメだったらしい。なんでさ……。魔法無効化とかの関連性？ いやそんなバカな。

刹那は陰陽術があるし、エイミーは殆どの属性の魔法を操れると言うバグだったりする。あり得ん。俺でも闇と雷と炎以外は難しいのに……。

てな訳で夜。皆は既に就寝した。

外が見えるベランダ(?)で、白いドレスの様な服を着たエヴァと共にワインを飲んでる時、刹那がやってきた。

「あの、修学旅行の時のお礼を、銀炉様にまだ言っていなかったの……」

「別にいいんだけどな。てか刹那、その銀炉様って呼び方。もう止めろ」

「え？」

「その呼び方は好きじゃあない」

「じ、じゃあなんてお呼びすれば？」

「普通に銀炉でいいよ」

「では銀炉さん、で……」

「ああ、まあそれならいいか。んで、どうだ？　紫から聞いた話によると、随分と幸せそうにしてるみたいだが？」

「はい。おかげ様で。本当にありがとうございます……！」

深く札を述べられる。そんなにされるとこちらまで畏まってしまいそうですよ。

「言いたいことがそれだけなら早くあいつらの所に戻ったらどうだ？」

何故か不機嫌なエヴァ。だからってそんな言い方……ああ、木乃香が心配そうにこちらを見ている。

そういうことか。

「ほら、迎えが来てる。もう寝ろ」

「じ、じゃあ。失礼します」

「おう。……にしてもお前は本当にいい子に育ったなあ、エヴァ」

「な、なんのことだ！　頭を撫でるなあ！」

「今日は久しぶりに一緒に風呂入るか？」

「何故だ！？　というかそんなこと平然と言うな！」

「いや、ほら。裏会にいた頃の大事なスキンシップだったじゃないか。確かエヴァの弱い所は……」

「わーわー！！　思い出さんでいい！」

そうして別荘での夜が更けていく。

別荘での一日（後書き）

ううむ、ネギの魔改造計画でも発動してしまおうか……。

そんな訳で結局ネギが弟子になったのか……？　これは。分からん。ちなみにアスナに魔法を使わせる気はありません。体質上魔法無理。でも咸卦法オーケー。ハリセンガンバな方向です。

銀炉の始動キーだけど、その場凌ぎで厨二病的（？）に考えました。

次は夕映のアーティファクトに関するお話になると思いますです。

感想等、お待ちしております。

アーティファクトと仮契約と三番隊（前書き）

新キャラ登☆場

アーティファクトと仮契約と三番隊

別荘二日目。宮崎と夕映のアーティファクト披露会になった。

「アデアット《来れ》。……これは、本、ですか？」

「私も本だー……。夕映のと似てるね」

夕映は魔法使いの基本的な格好、ローブに帽子、そして本を持った状態。宮崎はただ本を持ってる状態。

「じゃ、宮崎は坊主に説明してもらえ。夕映はこっち来い」
「あ、はいです」

昨日エヴァと一緒に飲んだところまで移動する。何故かと言うと……これと言った理由は無い。

「そういえば、木乃香も仮契約したんだってな。治癒系のとんでもないのが出たって言ってたけど……」

「ああ、はい。修学旅行の時にネギ先生が石化の魔法にかかっていたのは覚えてますか？」

「覚えてる」

「その石化を解いたのが木乃香さんだったんです。あの時はエヴァさんに言われた通りにするしかなかった様ですが……。自分で治癒魔法が出来るようになりたいと言った理由でここに来たそうですよ」
「……そうか」

木乃香が、ね。詠春、ショックだったろうな。娘には魔法に関わらせたくないって言ってたし。

まあ、西の次期長最有力候補だったんだし、いつの日かばれてたんだろうな。

さて、今はそんなことどうだっていい。今ここで大事なものは一つ。

「お前のアーティファクトだが……これはなかなかレアなものだぞ？」

「レア、ですか？」

「恐らく、な。魔法登録本とでも言っておこうか。その本の中身は見たか？」

「いえ」

「じゃ、見てみる」

訝しむ様な顔で本を開く。

「……これは、なんでしょうか……」

「呪文だろうな。ゲームで言う初期設定魔法だ。デフォ。初めから使える魔法と言うわけだ。レベルアップしていけば使える魔法は増えていく。……お前の場合、見たことがある魔法・魔術を完全に解析。更にそれを本が勝手に記述。そして記された魔法はお前が使用することができる、と言うわけだな」

「少々反則気味な気もしますが……」

確かに反則だよな、これ。下手すれば固有結界も解析可能。俺の固有結界を完全に再現できるということなのだから。恐ろしいの一言に尽きる。

「ついでに言うと、お前の魔力が少なくて発動できないもんじゃないだろうが……そこは俺からの魔力供給でどうにかなるはずだ」

アーティファクトに書かれた名は『魔導博物館』。
なるほど。博物館ね……。まったく、本当に恐ろしいカードを
引いちまったもんだ。

「銀炉さん、どうかしましたか？」

「いいや、なにも。……もしものために、いろいろ魔法を登録させ
た方がいいかもしれない。それと、一つだけ言っておくが基本的な
魔法はちゃんと扱えるようになってくよ？ 幾らそのアーティファ
クトがあるからって慢心していれば勝てるもんも勝てない。なによ
り、その登録本に記された魔法は一日に一回しか使えないらしいか
らな」

「は、はいです」

あー、疲れた。

アレから魔法を連発。最後に「黒雷龍牙」を見せて終わり。魔力
は尽きていないが、精神力をかなり使った。すり減った。疲れた。
寝たい。お休み。

俺の目が覚める頃には皆が皆別荘から出ていつていた。エヴァだ
け残って。

「……んで、なんだその魔法陣は」
「仮契約だ」

「はあ!？」

「いいだろ。ちょっとキスするくらい……」

顔を赤くしてもじもじしてるお前に言われても説得力は皆無であり絶無だぞ。

「……もう誰もいないのか？」

「ああ、茶々丸もチャチャゼロもないぞ。あのガキ共もふむぐ!？」

エヴァが喋ってる途中に唇を塞ぐ。我ながらなかなかタイミン
グのキスだったと思う。

最初はいきなり(?)なキスに暴れていたエヴァだったが二秒く
らい経つと大人しくなった。

魔法陣の光がより一層強くなったのを見届け、唇を離す。

「……まったく、お前は本当にいきなりで困る……」

すみませんね。いきなりで。

「んで、俺のパクティオーカードは？」

「ほら、これだ」

「……なんでさ……」

そこに描かれた俺は白銀の狼。ある意味これが本性なのだから仕方ないのかもしれない。

そしてその銀牙となった俺が口にくわえているモノ。

「よりにもよって剣か……」

黒い刀身を持ったロングソード。
はずれだな。剣なら投影で作れる。

「ま、いいではないか。説明書はこれだ。ふふん、これで私はお前の主で、お前は私の従者だな」

パクティオーカードを嬉しそうに持ちながら笑顔でそんなこと言われましても俺的に一体どのようなアクションを取ればいいのかまったくもって分からないわけでしてね？

「はあ。何を企んでんだよ、お前は」

「別に？ お前を私の人形の如く扱ってやろうとか考えてる訳ではないぞ？」

絶対そうしようとしてるだろ。

「ただ、私に服従を誓え」

「だが断る」

「な！？ このカードがある限り貴様に拒否権はないぞ！」

「そんなこと言われてもな……とりあえず、説明書読むか」

「おうい！？ 話を逸らすなー！」

炎の様にぎゃーぎゃー騒ぐ可愛い可愛いエヴァをとりあえず頭を撫でることで鎮火完了。

見たか。頭を撫でられた途端「はにゃん」だとさ。キャラ崩壊が色濃くなってきてますな、エヴァさん。

アーティファクトの説明書を読むことにする。

とりあえず、いつまで立っているのも疲れる。階段に座ることにする。

「暑いぞ、エヴァ」

「いいではないか。少しくらい」

俺の座ったすぐ隣。肩と肩をくっつけながらエヴァが座る。

そして俺の手にある説明書を覗くようにしてくる。こうなるとエヴァの頭が邪魔で俺が読めない。それにしてもエヴァの髪の毛からは良い匂いがする。多分、シャンプーの匂いなのだろう。

くらくらする様な甘い香り。

「おい銀、どうした。目が死んだ魚みたいになってるぞ」

「誰が死んだ佐中さんですか」

「誰だ、佐中さん」

「んで？　アーティファクトはなんだって？」

「ああ、別にどうとでもないただの剣だと思うぞ」

「そうか……《来れ》」

とりあえず、本物を見とかない限りなにも出来ん。

……確かに、なんの変哲もない剣だな。ただ不可解だ。解析が出来る。

剣や刀、銃から複雑な機材の中身。そう言ったものを全て解析できるとは魔術が効かない。どうしたものか……。

もしかすると普通じゃない剣なのかもしれないな。

説明書熟読完了。エヴァは別荘外。俺一人だけ残った別荘で、俺は少しだけ驚いた。

皆さんは《闇の魔法》たるものをご存知だろうか。

エヴァがまだ弱かった頃に死に物狂いで編み出した、魔法を吸収

しドーピング作用を施す魔法。人間が使うには危険とリスクが多い魔法だ。

このアーティファクトは、それと同系列の魔法具だった。

魔法の吸収。

この剣に魔法を吸収させることで、持ち主である俺にも同じ効果を施してくれる便利な剣だ。

つまり、この剣に風系や雷系の魔法を使えば、俺は風化・雷化できる。その速度は驚異的なものだろう。雷化など、はつきり言って驚異的だ。

これはなかなか良い剣を手に入れたかもしれん。

闇の魔法と違い、人外のものになる危険性がない。いや、そもそも俺は妖怪だから闇の魔法のリスクなんて軽いものなのだが。それでもこれは嬉しいものだ。

エヴァは何故か闇の魔法を俺に教えたくなかったみたいだったからな。

ダイオラマ球から出ると、なにやら小太郎が言いたいことがある様な目で見てきた。

てかなんでコイツだけ帰ってねえんだよ。

「なあ銀の兄ちゃん！俺の師匠になってくれへんか！？」

「オーケイ。良いぜー別に」

「だよなあ。ネギも言っとったわ。そう簡単に師匠にしてくれるわけない……って、あれ？マジか？銀の兄ちゃん」

「ああ、別に良いぜ。お前ならな。ネギはダメだ。アレは父親しか

見ないだろうし、かなりひん曲がっちゃってる。アイツを強くするのは骨が折れるし、なによりめんどくさい。お前みたいな単純な野郎の方が育て甲斐があんだよ」

まあ、事実だ。

ネギの力を上げるには、それこそ《闇の魔法》だとか、咸卦法を取得するしかない。と俺は思っている。

小太郎はきつと良く育つと思うし、なにより、俺とコイツは似てる。外見的に、というか種族的に。

「とりあえず今日は帰れ。時間があれば来い。別荘でとことん相手してやる。師匠と言うよりも練習相手だな。俺は教えるのが苦手だから、実戦形式で経験を積んでいくしかないからな」

「おう！ んじゃ、また今度来るわ。今からエイミーに買い物に付き合う約束しとんねん」

「へえ……。デートか？」

にやにや。

「な！ ちゃうわ！ ただ少し買い物に付き合っただけやで！？」

それを人はデートと言う（たぶん）。

「まあ、精々楽しんで来い。んじゃあな」

「おう、また今度！」

元気がいいなあ、小太郎は。
それにしてもエヴァと茶々丸の姿見えない。どこ行った？

「御主人ナラ買イ物ダゾ」

ワインをラッパ飲みしながら歩いてくる人形。チャチャゼロだ。エヴァの呪いが解けた今、エヴァの魔力で動いているこの人形も歩くことができる。

「何故だ？」

「知ルカ。トリアエズ旦那。戦ロウゼ」

この殺人人形は……。

「戦らねーよ。めんどいことはしない主義だ」
「チッ」

舌打ちしながら部屋の奥に消えていく。

……ホラーだ……。

しかし、そうなると暇だな。少し、外を歩くか。

洋服から和服へ着替えを済ませ、麻帆良の商店街を歩く。

和服の方が落ち着く……と思ったのだが、なにやら視線が集う。落ち着かな。

見れば女子からの視線が多い。

お？ あれは、刹那か？ 他の女と同じようにチラチラとこちらに視線を送ってくる。

……ふ、少し遊んでやるか。

「おい、その女。どうだ？ 俺と歩かんか？」

「ええ！？」　そ、そんなこと急に言われましたも！　わ、私にはお

嬢様という御方が！ ……って、あれ？ ……もしかして、銀炉さん？」

「ん？ なんだ、気付いてなかったのか？ こっちを見てくるから気付いてると思って遊ぼうと思ったんだがな……」

俺は銀炉じゃありませんよ的な発言をしながら刹那を弄り倒すと言う計画が……。

「えと、その……和服を着ているせいかな、いつもの銀炉さんと見分けがつかなくて……」

ああ、確かに良く言われた。魔法世界でローブを来た時の俺と和服を着ている俺は別人だ、と。

ナギだけなら兎も角、ゼクトにまで言われたかたなあ……。いやはや、虚しいばかりよ……。

「まあいい。ところでその荷物はどうしたんだ？」

刹那の両手には食材が入った袋。
結構な量が入っている。どこの主婦だ。

「それが、お嬢様達と鍋パーティーを開くことになってしまいました……」

「へえ、なんでまた？」

「それは教えなくてはいけないんですか？」

「つれねえなあ」

「そうそう、つれないこと言ったら銀様が可哀そうです」

「「！？」」

この声。この気配。この魔力……。

まさか……嘘だろおい。

「あは、久しぶりです〜！ 銀様」

「……なんでオメーがいんだ。この雪女……！」

裏会十五夜三番隊副隊長、厄魔雪麗^{せつら}。

氷雪系最強クラス。エヴァの師にして、姉代わり。

腰まで届く水色の髪。雪結晶の柄の和服。

日本で最初に吸血鬼になった女。

「なんだよう、銀様もつれないこと言わないでくださいよう。私たち、杯を交わした仲ではございませんか〜！」

「うるさい、ひつつくな。冷たいんだよ、お前は」

「なにい〜！？ 私より銀様ののが冷たいじゃないですか〜！」

「態度の問題じゃねえ。物理的な意味だよ！」

「私もいる」

「んな……！？ 獣使い……。お前もか……」

ていうかいつの間に俺の肩に乗ってんだよ！

裏会十五夜三番隊第三席、神崎咲八^{さくや}。獣（主に龍）を従える吸血

鬼。本名が無かったから雪麗が付けた。守護聖獣である龍樹をも調教したことがある大物だ。俺も一度調教されかけた……。

容姿は子供の姿で薄汚れた着物。

一見すれば座敷童だと思うこと間違いなしだ。

「あの、銀炉さん？ この人は……」

突然のことに戸惑いを隠せていない刹那が俺に問いかける。

そりゃそうだ。

雪女に獣使い。物騒な名称で呼ばれてる二人が誰なのか、疑問を

持たないわけがない。

「裏会、
って知ってるか？」

「あ、はい。長から少しだけ聞いたことがあります。確か、最強の殺し屋組織だと……」

「その裏会の三番隊の副隊長と第三席だ」

$$\left[\begin{array}{c} \wedge \\ \vdots \end{array} \right]$$

一瞬刹那の顔が凍りついた。

雪麗の所業かと思ひ顔を見るが、雪麗は首を横に振るだけ。

そして、じゃあなんだ？ と刹那の顔を見ると、フリーズが解か

「ええええええええ！？」

商店街に刹那の絶叫が木霊した。

刹那は鍋パーティーがあるから別れ、とりあえず俺は二人を連れてエヴァ邸に行くことにした。

そんなこんなでログハウス。

一つのテーブルを挟み、俺とエヴァ、雪麗と咲八が座っている。

茶々丸は用事があるということで、今ここにはいない。

「で？
なんで雪麗姉様がいるんだ？」

「もう、エヴァちゃんまでそんなつれないこと言わないでください
よう！ 仮にも私は師匠ですよ！」

「エヴァ、反抗期？」

「違うわ!!」

確かに、裏会にいた時からエヴァは反抗期みたいなものなのかもしれない。

「銀、貴様もなにを『確かに……』みたいな顔してるんだ!？」

「おお、読心術……?」

「違うわあ! てか私の予想は的中か!？」

「んで、話が変わるけど、なんで雪麗と咲八はここに?」

声調を変え、真剣だということを伝える。

「……とある組織が動き出したのを総隊長が感知しました」

「へえ……。総長がねえ……」

俺達裏会は中立の立場で仕事を請け負う組織。

敵対する組織なんてないと思うかもしれない。だが仕事は「殺し」だ。「殺し」をしていれば、どっかの組織から目をつけられるってこともあるのだろう。

「その組織ってのは?」

「《コスモエンテレケイア完全なる世界》……が動くと思われていました。ですが、《完全なる世界》は奇妙な程に動きが無いそうです。代わりにある組織が活発化してきたそうです」

「名を《ジオサイド完璧なる虐殺》。今私たちは幻想郷に身を置いているのですが……それにもきちんと理由があります」

ああ、そうだった。今幻想郷にいるんだったな。こいつ等。

「その理由ってのはなんなんだ？　そのジオサイドって奴等の動きってのは？」

「幻想郷は隔離された世界。それも、旧世界と新世界よりも更に隔離された、安住できる地であることは銀様が一番知ってるはずですよ」

確かに、な。

「彼等《完璧なる虐殺》の目的は、我等《裏会》の壊滅」

「……なんでだよ……」

「彼等は名前の通り《完璧なる虐殺》をしてきた者です。無差別に、殺す集団です。そうなればどこかで恨みを買っていてもおかしくありません。その恨みを持っている人が、私達を知っていれば必ず手助けを要求する。そう読んだんじゃないでしょうか」

おいおい、なんだそりゃ。

あっちの勝手な妄想で俺達壊滅されるかもなの？　　ないわー……。

「なら先手を打てばいいんじゃないか？　俺達も『殺し』の集団であることには変わりはあるまい。同業者通しの蹴落とし合い……なんてのは珍しくもない話しろ」

「残念ですが、既に先手は打たれてるのです」

なに？

そんな情報俺には入っていないが……。

「貴方様はいなかったの……。その時裏会にいた隊長格は五番隊、九番隊、十五番隊、そして総隊長でした。総隊長のいた一番隊はほぼ無傷。ですが、他の隊の人は死者が約三百人。大小問わず怪我をした者が、約六千人……。私たちの三番隊は、壊滅状態です」

——ギリッ。

思わず齒軋りをした。

俺がいれば良かった、とは思わない。そんなことを思えば、それは自分の部下を馬鹿にしてるのと同じだ。でも、それでも、俺がいればもう少しくらい被害は小さかったんじゃないかと、思わざるをえない。

「三番隊の被害状況は？」

「死者が六十七人。重症で戦闘不能者は五百八十三人。先程言った通り、ほぼ壊滅状態にあります。……更に言うと、おかしいことが一つ。裏会の女性が、数十名だけ行方不明に……」

俺達裏会は、隊長の下に部下がいる。その部下は副隊長。副隊長の部下が席達だ。その席に入ってる者にも一人ひとりに部下が配置されている。

俺の三番隊は総勢で約千人だった。他の隊はもっと多いのだが、俺は千人で十分だと思った。

だが今の状況は……戦闘できるものが少なすぎる。最低でも三百五十人。

俺の隣にいるエヴァも愕然としていた。

そしてなんだ？ 裏会の女性が行方不明？ どういうことだ……。意味が分からない。

「銀様、責任は感じないください。氷雪系の中で裏会最強クラスの私がいてコレだったんです。相手との格が違いすぎたんです。私たちの不甲斐無さを、どうかお許しください」

深く頭を下げる雪麗。だが、俺はただ口を抑え、驚きを隠す他になかった。裏会の、上に行く殺人組織。他殺願望の塊。

「……雪麗」

何秒間そうしていたのだろう。いや、もしかすると数分過ぎたかもしれない。

だから、声の音量調節を忘れた。とても、小さな呟く様な声だった。それでも、雪麗には聞こえたようだが。

「はい……」

雪麗は俺が怒ると思ったのだろう。顔を上げ、目を硬く瞑っていた。

「ここにいろ……」

「……え？」

「三番隊に伝えろ。お前らは麻帆良で預かる。本当なら、俺が幻想郷に行くのがいいんだが……なんせ、俺は中途半端が嫌いだ。だから、三番隊をここに連れてこい。寢床ならあのジジイになんとか頼み込む。なんならこのエヴァ邸も使わせる。良いな？ エヴァ」

エヴァは小さくため息をしてから、

「いいぞ」

と言った。

「ですが銀様？ 幻想郷以上に安住に隠れることができる土地など……。幾ら麻帆良が魔法使いの集まりだろうと、あの《完璧なる虐殺》には敵いません！ それは銀様も同じだと思います」

「……今何と言った、雪女」

「銀様も、《完璧なる虐殺》には敵いませんと、そう言いました」
「ほう……、そうか。それは面白い。なら俺一人でそのジオサイドとやらを片付けてやろうじゃねえか。お前みたいな腰抜けは引っ込んでろ、雪女」

冷たい空気が部屋を支配する。

だが、さすがに我慢ならん。部下を馬鹿にするのはならんと思っていたが、まさか部下に馬鹿にされるとはな……。そもそも、俺は――。

「確かに、私は腰抜けです。勝つことができないと分かれば、身を隠す。ですが裏会と言うのはそういうものです。決して日に当たることなき深き闇。太陽から逃げる様に生きる、組織なんです」

「テメエ――」

立ちあがり、雪麗の胸ぐらを掴む。

「くっ……」

「自分の隊長を馬鹿にするまでなら許してやろうと思ってた。だが、自分の組織を馬鹿にするのは我慢ならねえ！　そもそも、お前みたいな腰の抜けてる奴なんか勝てる訳がなかったんだ！　なら、引っ込んでろ。テメエ等が出る幕はねえ。俺が全部片付けてやんよ」

「ですから、無理だと言ってるんです！　分かりませんか！？　私達の力は遠く及ばず、総隊長のいる一番隊だけが辛うじて生き残った……。さくらさん以外の人達は手も足も齒も出なかったんです！」

「オメエの隊長は俺だ。他の隊長がどうだったかなんてことに興味はねえ！　それとも、そんなに自分の隊長が信じられねえか……？

俺は、お前らに死んでほしくねえから……。俺の部下を殺した奴等に落とし前をつけに行くってのは、そんなに許されねえ行為か！
？」

「私だって貴方に死んでほしくない!!」

冷気が立ち込める。

雪女と呼ばれる秘密。元々吸血鬼になる前から雪麗は氷雪系の魔法素質があった。そのせいで、感情が高ぶったりする際、魔力が漏れたときに冷気が立ち込める。

それが、雪女と呼ばれる様になった所以だった。

エヴァや咲八の顔を見ることができない。

雪麗の目に吸い込まれる様に……、ただ目線を逃すことが許されない。

だが……恐らくエヴァは怒っているだろう。

なんせ、ソファを挟んで置いてあるテーブルが凍ってる……。凍る対象が俺じゃなくて良かったと密かに思った。

「……俺を信じる。麻帆良にはジジイもいる。アルもいる。馬鹿でひん曲がってはいいるが、ナギの野郎の息子だっている。これから俺が育てていく小僧もいる。正義馬鹿だけど魔法関係者はたんまりいる。そいつらだって、時間稼ぎくらいできる」

「……………」

「それに、俺達三番隊の隊言。たいげん忘れたか」

「……不滅」

「覚えてんなら良い。俺達是不滅だ。古い言葉かもしれないねえが……。死んだ奴等の無念、晴らしてやろうじゃねえか」

胸倉を掴んだまま、雪麗の顔を見る。

雪麗は、雪女という名に似合わない程顔を赤くした。

「……柴さんが、死にました」

「……………」

「あの、柴さんが。皆の親代わりの柴さんが……三番隊の、兄貴分の柴さんが……死んだん、です……」

「ああ……柴が……。あの柴が……？」

柴 海蔵。

三番隊の世話係。雪麗の世話も、柴がしていたと聞いた。

エヴァは柴を嫌っている様な素振りを見せたが、そんなことは無かった……。

きつと、今、俺の隣で口をあんぐりと開けていることだろう。

「……俺が、仇を討つ」

「止めて……。これ以上、お兄ちゃんと呼べる人を……失いたくないの……」

「俺を信じろ。俺の《黒椿》がそんなに信用無いか？ 糸だって、投影だって……。そもそも、俺自身、そんなに信用がないのか？」

「そんなこと……ふぬっ!？」

「なっ!？」

隣でエヴァが一瞬騒ぐ声が聞こえたが気にしない。

雪麗の唇を奪い、口内を蹂躪する。ただただ、蹂躪する。

「……………、俺を信じろ。俺は、死なねえ。当たり前だろ……お前

に残して死ぬなんぞ、絶対ありえないからよ」

「……です」

「え？」

小さい声は、何を言っているのかが分からなかった。

だがその声はだんだんと大きくなっていき……。

「卑怯、ですよ……」

雪麗は涙を溢れさせながら言う。

その涙でさえ、凍っていく。雪麗の中にある魔力は膨大。故に、精神が不安定になると、制御が上手くいなくなる。恐らく、そのせいなのだろう。

「卑怯でも何でもいい。だから、三番隊の奴等をここに連れてこい。いや、ついでにきたい奴だけついてこいと伝えろ」

「……………」

「返事」

「はい…………はい！」

胸倉を離し、頭を撫でる。

そしてそこに、質が違う寒気が訪れた。

「…………話は終わったのか？　ならいい加減に離れろお！　銀は私のモノだ！　幾ら姉様でも渡さんぞ！」

空気を読めよエヴァ！？

「むっ…………私と銀様は杯を交わした仲。貴女こそ銀様から離れなさあい！」

「杯だか何だか知らんが、私は銀と性交までしたぞ！！」

「なっ……………！？」

エヴァ、後で殺す。絶対コロス。

「ぎゅんぐさぐま？」

「…………ハイ、ナンデショウカ。てか笑顔が怖いぞ、雪麗…………」

「…………っ！　銀様何か嫌いです！　女誑しです！　汚らしい

「獣です!!」

「んな?！」

そう言いながら地団太を踏む。それだけで冷気が飛び散る。
寒くなってきた……精神的な意味で。

「銀様なんか死んじゃえばいいんです……!!」
「ちょ、待て雪麗！」

……出ていっちゃった……。盛大に雪の様な冷気を孕んだ魔力を
振りまきながら。

「エヴァ、お前はいろいろ空気を読め……」
「空気は吸うものだ。読むものではない」

それは屁理屈だ。

「にしても、どうすっかなあ……」
「そういえば銀。今日の夜は女子寮に行くぞ」
「あ? なんでまた」
「いいから。偶にくらい休め」
「……………」

「さて、少し風呂にでも入って汗を洗い落とすか」

エヴァはそれだけ言うときささと風呂のある方向へ向かう。
……なんだか、今日は休める日じゃなさそうだな。

「……銀ちゃん、大胆?」
「……お前は見ちゃいけないものだったな。咲八」
「私ももう三百歳。あれくらいなら見ても大丈夫」

裏会から見ればまだまだ子供じゃねえか。
そう言う俺もまだ子供扱いだったりするんだがな。

アーティファクトと仮契約と三番隊（後書き）

とりあえずここまで、て感じですね。

急展開だったりしますね。伏線はって無かった気がするし。

ということ、ネギはつれていけない。幻想郷、或いは魔法世界に行くことになるのは絶対。

雪麗と咲八のキャラ作りってどうしていいこう、と思ったり思ったりなかったり。

ちなみに雪麗と銀炉は仮契約してたりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1856v/>

魔法先生ネギま！ ～幻想より出でし最狂者～

2011年9月13日22時23分発行